

り今度も上宮寺の隣屋舗を城郭に構へ上宮寺に加勢せし故佐崎一揆等殊更心つよく働きたりしかば今度所領没入せられ九州に趣き後に加藤主計頭清正に仕へ加藤佐助と名のり天草にて討死す(宗亂記に三藏は矢田作十郎と同時佐崎にて討死し今も上宮寺の南に墓印の松のこれりと覺ゆ)大草の松平七郎昌久も行方知れず落失せたり其方一揆方にて大將と頼れたる鳥居四郎左衛門渡邊八郎三郎渡邊源藏本多彌八郎弟三彌浪切孫七郎等の改易せられ遠國へ立退しが此輩の後日に歸參せしも多かりき其中も本多彌八郎の後に佐渡守正信とて御當家佐命の功臣とはなりにけり荒川甲斐守頼持も今防戦叶ひがた再び降人と成り出にける是の御妹嫁に迄あされ御寵遇ありし御恩を捨て一揆に組せし故一命の助けられたれど八面の城を召上られしかば河内國に落魄し程なく病死せり(宗亂記に荒川の三州吉良莊寄近村に整居し永祿九年五月廿一日病死其地裏ありと覺ゆ)かくて降參の者共を先手とし吉良が東條の城をせめらる義昭も防戦の術を失ひ其罪遣れ難きを知て近江の國へ逃行て佐々木承禎を頼みしばらく彼に住居せしが後年攝州芥川合戦の時討死せしとかや(宗亂記に吉良は吉良莊花岳寺に入て剃髪し高山と號す其後京六角堂に閑居して病死すと見ゆ)吉

良が家人大河内山雲基孝其子善一郎政綱同金兵衛秀綱等の皆御家人に召出さる秀綱が三子の長澤家をつぎ松平右衛門太夫正綱とて後に功臣とありき依て松井左近忠次をして東條の城を守らしめらる此時までも酒井將監忠尚の猶も三州上野に籠城せしかば是をも直に攻られしに將監も必死ありて防戦す仍て寄手小林金助等二十餘人討死せしが城の終に落され將監の我身の罪重疊に及けるを恐れ駿州へ出奔と(宗亂記に酒井將監の上野の城を落て三州加茂郡猿枝山麓に猿枝迫に整居し永祿八年九月六日に死て大樹寺に葬ると見ゆ右衛門太夫忠政孫藤四郎忠分子)一揆の與黨既平均しければ上宮寺勝巖寺本證寺善秀寺はいふまでもなしすべて一向宗の寺院悉く破却し門徒等改宗すべしと仰出さる僧徒のさなり檀越等さまざまと愁訴せしかば終に是をも聞召入れ凶惡の僧徒皆放逐せられ質直和の併にかへて寺領も元の如く賜りければ門徒僧俗其御仁政をかこみ國中忽靜謐せり(宗亂記に道場悉く破却仰出されしかば一向門徒等是の御誓詞も前々の如くなしをかるべき旨仰出されしにいかなる事ぞとすける前々の此地も野原なれば前々の如く道場を破り捨て野原にせよと仰られ三州中の門徒寺の悉く破却せらる其後廿年を歴て石川日向守が母の願

により國中の一向宗寺々再興を免許せらる其時の御教書頼田郡平地村西派光願寺に傳ふとあり)さて一揆蜂起の最中大樹寺の登攀上人にも加勢の事仰遣ひされしが宗門の寺々坊々いふに不及檀那の武士町人百姓の差別なく驅催しければ程なく千餘人になりけるに登攀上人みづから筆取て旗の表は厭離穢土欣求淨土の八字を書て是を真先に立て一揆原をかけ破り程なく靜謐に及びしかば是を御吉例とされ軍中毎度此旗を川ひ給ひ今も日光山御寶庫第一の御寶物とて傳へられしとぞ

按るに厭離欣求の御旗由來區々にして一定せず大樹寺の開山勢譽愚底が此二句を御旗に書て親忠君に献す親忠君此御旗を用ひられ井田野の合戦に切勝給ひし後御代々の御旗と定られたりといふ(陸奥源惠が筆記)是一説なり清康君森山にて御事有し後井田野にて御家人等織田信秀が勢と合戦の時大樹寺の登攀此句を旗に書て加勢に來り味方勝利せしより川ひらるゝといふ(紳書并源祕録)是其二也又桶狭間合戦今川義元討死の後神君大高城を出給ひ其夜大樹寺にやどらせ給ひし所へ織田勢をしよせければ住持の登攀(鎮譽と有り)此旗を書て献す此時難なく敵を追拂ひ給ひ此後御吉例とて戰場常に用

ひらるゝと云(開運録方世家譜)是其三之一向宗一揆の時登攀此文を御旗に書て御加勢に参りしといふ(木書)是其四之又此旗を名護屋御陣にももたせ給ひし事の筑前國黒崎淨蓮寺の記録に見へたり抑此二句の文の惠心僧都往生要集撰述の時觀無量壽經の文により六道十樂の廣釋ありし時の二句なりしを大樹寺勢譽は親忠君御師依厚かりしかば當時四海の亂逆を穢土に比し擾亂反正の武功を淨土にぞぞらへ演説し御旗にも書て献せしを川ひ給ひしより御累代の御旗となされしか大樹寺に御止宿の時も一向亂の時も寺僧等加勢の時又此文を旗に書て出さるべし夫を皆其時々に始て用ひられし事と語り傳へしよ、是を記する書とも誤りたる事明らか也

戸田重貞以謀奪二人質一事

永祿七年二月一向專修の徒が一揆既に靜謐しければ西三河悉く平均したり小笠原新九郎康元始めて歸順し拜謁しければ幡豆郡の藩邑を賜り賞せらる是の四月の事之五月には今川氏真小原肥前守鎮實に命じ東三河諸士の人質を吉田城に取入て三河一國を零定せんとばかりしかども設樂菅沼白井等志を岡崎に通じ小原が指揮を受ける者なごに二連來の城主

戸田主殿助重貞の志を岡崎へ通ずるといへども其母を人質として吉田城に入置しかばいか
 にもして計略をもつて母を奪ひ返し彌忠勤せばやと思ひ近日の毎度吉田城に赴き種とど
 肥前守鎮實が心をとり媚をかし或時暮をかこみ雙六をもて遊び或時の茶屋并珍敷菓子酒肴
 を進物とす或夕例の如く酒肴敷ととりそへ長持へ入て家人野と山内匠助を差添城内へ昇
 入させ番兵どもも長持のふたを開て示し後刻歸らん時は主人の母が着ふるしたる衣服洗
 濯のため此長持に入て通るべし怪み給ふなどかたらひ城内へ入しめたり扱重貞のどくより
 城に来て肥前守と例の様に雙六打ながら其酒肴取出し酒を酌かはし慰めける其間に内匠
 助の主人の母を盗み出し長持の底に隠し其上へ古き衣類をまた入て下部より昇せて内匠助付
 添長持のふたを明け番兵に示しけるに藩の者共の先刻かたらひし事故不審をも立ず門を出
 しけり其跡にて重貞の何げなく肥前守に暇を告て座をたち城門を出れば迎の者大勢來り重
 貞と老母を守護し飛が如く二連木に歸りたりやがて其由告奉れば神君御感淺からず舊領に
 新恩の地そへて賜ふ肥前守安からぬ事に思ひ大勢を催し此後頻りに二連木城を攻圍みしに
 重貞防戦するとして不意に討死しければ神君はなほだ惜ませ給ひ其弟甚平忠重をして所領を

つかはしめらる重貞討死せし十一月十二日の事とぞ

吉田城下軍の事

今年五月の頃より神君吉田城を攻らるゝために新築を築かしめられ喜見寺の築は鶴殿八郎
 三郎政俊に守らせ平塚の築は小笠原新九郎康元に守らしめらる其後神君の野田牛窪の築に
 至らせ給ひ夫より吉田の城近く御馬をよせられければ城兵も大勢打て出ければ雙方入亂れ
 て合戦す本多平八郎忠勝此時十七歳城兵牧野宗次郎と鎗を合す是今日の一番鎗之峰屋半之
 允二番鎗たらんとを恥て鎗を捨て刀をぬいて敵二人を討ちとる其時城兵河井正徳が鉄炮に
 わたり打倒されしが元來剛勇なれば起上り引退しかど痛手にて其夜死す峰屋が老母是を
 聞き武十の討死するの其常あり應じたる働さへあくバ恨る事なして歎かず勇猛の子を
 持たる母程ありとみな人是を感じたり又正徳といふ者の鉄炮の妙手ありしか其昔敵を打取
 しを朋輩共の敵の手負なりと言ければ手負にてはあし生得のちんばとてやけるを今川氏
 真聞て正徳と名を下されしとぞ此戦に小笠原新九郎の城兵肥前守が弟小原勘助を討取松平
 玄蕃頭加藤勘左衛門成瀬小吉犬塚作内等首級を得たり戸田吉兵衛氏光も人質を捨て忠戦す

されども城兵もよく防ぎ急に城落べくもなかりしかば黄昏に及んで岡崎へ御歸陣あり(大久保物語基業)

一宮後詰の事

其頃小原肥前守領實の氏真の命を請て二度佐脇八幡の兩砦を取たて三浦左馬之助に守らせ太田牛窪の邊とぞ此時神君も又一宮に砦を築かじめ本多百助信俊に五百の兵を添て守らしめらる氏真三州の諸士大略岡崎に降参し近日吉田の城を攻るよし聞て急に大軍を催し三州へ發向し寶飯郡八幡の砦に着陣し佐脇の砦まで陣を張るかぐて二万餘騎を以て一宮の砦をかこまじめ其身の旗本の八幡佐脇に備へ別に武田信虎が一備を以て岡崎よりの援兵を押へすべて十二段整ふ堂と備へたり此事岡崎へ聞へければ神君三千の人数にて急に打立後詰あるべし軍令を下さる老功の御家人等承り氏真たどひ弱將たりとも其旗下には老功の御家人等の將士少あからずとさる二万とや人数の味方に十倍せり其上後詰を防んとして軍を分て備へたるは尤ある手立之幾重にも御勘辨有て然るべしと諫たり神君聞召汝がす所理りなしとせず乍去武士の大身も小身も畢竟信と義との二を闕ては道志らぬ禽獸にも劣るべ

し家人を敵地に遣はし番をさせて置ながら其家人難義を見て救はざれば信も義も捨るといふ物之方一今度の後詰を仕指し討死するとも夫の天運の盡る所あればもとより覺悟の上之敵の大軍も小勢も構ひなしと勇みすゝみて御出馬あれは御家人等皆々頼母數御大將かなど各感涙を流しおなじくいさみ立しと道理あれ斯て酒井左衛門尉石川伯耆守には牛窪より佐脇八幡の間に備へて氏真が旗本を押させしめ御旗本二千人の武田信虎が八千の備へを突わりかけちらし本能が原を押通るに今川の大軍此猛威に氣を吞れ取て戦んけしきもあし神君其時御旗本の先手の敵の先陣を目當とし敵もしかへらば脇鎗に突崩し時分はよきそやと闘を作り貝太鼓を鳴らし御馬を進め給へば今川勢の手を出さず扱ひ敵も戦を好まざると見へたり真直に一宮へ押詰よと下知し給ふ今川勢との間僅に三町計りなり敵も味方の旗色を見て打てかへりしが先手と氏真が旗本との間を突破り難なく一宮の砦に入給ひけるに二方に餘る今川勢道を開て通しけり今夜の一宮に御一宿あり遠州引間(後に濱松と改む)城主飯尾豊前守致實の氏真が陣中に有りしが内々岡崎へ志を通じければ今夜病と稱して居城へ歸るとぞ新井白須賀邊を過るとて火を放つて驛舎を焼立ければ氏真驚く事限りあし神君

翌朝本多百助を始め將卒悉く召具せられ今川が大軍を追立く難なく岡崎へ引取給ふ是を一宮の後詰として天下後世迄其英武を稱し奉る事之けり(岩淵夜話基業)

小原鎮實吉田開城の事

今川氏真の二万餘の大軍を催し吉田城を援けんとはるく佐脇八幡迄山陣せじかひもあく岡崎勢三千餘騎にかけ立られふるひわあき手も出さず其上味方と頼む飯尾豊前守は居城引間へ引返す岡崎勢の押せし武田信虎も内々異心を披むとの風聞雜説まろくすれば氏真魂を消して早く兵を引て駿府へ逃歸る小原肥前守の吉田城を堅固に守るといへども氏真の今度大に手懲して再度後詰せん事の思ひ絶たり其上三州の國士の大半岡崎へ降参す城中頼りに心細く氣あくれし勇氣次第に撓み果肥前守も防戦心元なく大に心を膽じける同年六月岡崎よりの再度御出馬あり酒井左衛門尉忠次を先手として吉田城を烈しく攻給ふ肥前守も武功老練の將あれば力を盡し防ぎ戦ふといへども後詰の頼みなきまよふ城兵日よ力弱りたり此時五月十四日伊奈の本多八郎光忠伊豫光典兄弟は彦八郎光次(光忠光典の弟)て父の家を繼ぐと共に吉田城を乗取べき計策を献じ奉る神君尤なりさらば汝等が計らひに

まかすべしとの御ゆるしを蒙り兄弟ともに先陣又馳加はる然るに此兄弟が謀の如く城兵思ひくりに成りて防戦はかしくしからざる様を見定られければ彦八郎が從者戸田小栗といふ兩人を城中に使し小原が方へ入けるは此城を攻る事度うに及ぶといへども堅固に防戦せられ塀二重も乗取事を得ず其武功感ずるに餘りありたれども後詰のたのみもなきに月日をかさね籠城せられ互の士卒を損ずる事殆其詮なきに似たり速に此城開き渡し東三河一國に徳川殿へ附屬あらんに徳川殿元來信義を守る大將之今川殿と舊好を修め互に水魚の交をまじし患難を救われん事こそあらまほしけれと懇懇に説諭せしむ肥前守を始め城兵の兵糧も次第に乏しくなる後詰の頼みならず朝夕落方を求める折節なれば肥前守も早速に同意し徳川殿舊好を忘れ給はず今川殿と隣好を結び給はんには是にまさる大慶なし但し和睦の御志るとに人質を給へるべきにや然らば此城を開て東三河一國を徳川殿御領に引渡しすべしと答ふ神君へ其由申上ればあどりりと聞召わけられ其人質は異父同母の弟松平原三郎康俊(久松佐渡守定俊二男)并酒井左衛門尉忠次女子(名のお風)とを遣はさる小原肥前守此入質を講取城を開き渡し駿州へ歸る此時より三河八郡(碧海賀茂額田幡豆寶飯八尾設

樂渥美(の)地悉く御手に屬したり此事木多功莫大なりとて彦八郎光次所領加へ賜り光忠光典兩人并家人戸田丹後小栗澁太夫四人へ五十貫文ツの地を宛行へる(寛系藩譜)又酒井左衛門尉忠次に吉田の城を給へり東三河の諸士皆其手に屬せらる六月廿二日の事へ左衛門尉是より此邊の人々の旗頭たり其時の賜ふ所の御書

吉田東三河の儀付以異見可仕以吉田小郷一圓に出置之其上御入城の新知可付由來如承來山中の儀有可所整之假借等に向以共不可有異儀也仍如件

永祿七年甲子六月廿二日

藏人家 御判

酒井左衛門尉殿(此書譜牒余録によりて校正す)

田原五油落城の事

同月又田原の城實取べき旨本多豊後守廣孝に仰付らる此城は今川氏眞被官朝比奈肥後守元智が守る所之廣孝梶の郷に砦を構へ數日田原を攻圍みに廣孝が家人木多甚十郎城兵長谷川十郎三郎と鎗を合せ進んで外郭を攻破る戸田三郎右衛門忠次先登して敵大勢にかこまれ既に危難に及びし所に戸田九右衛門勝利戸田七内光定かくと見るより馳來敵數十人を討

拂ひ敵色めく所を惣勢一同に城中に攻入れれば朝比奈防々事あははず和睦を乞て早に城を落て駿州へ逃歸るよつて神君廣孝が功を賞し給ひ此城を賜りて移り住ましめらる其上近邊悉く廣孝に所務として彼進退を任せ給ふ(寛系基業)其時賜はる所の御書に

今度田原梶の取付付爲其忠賞進む地の事

一二百貫文

田原の郷

一百五十貫文

梶の郷

一五十貫文

二崎の郷

一五十貫文

白屋の郷

一百貫文

浦の郷

一七十貫文

敷地の郷

一百貫文

新野美の郷網二帖

一田原の城誰に以調略雖取置之宮代の事其方へ可付并座王山進置の事

一進置地の内一圓諸役浮所務其方可爲計事

右條に永所可有相違若此内も不足は以他の地可進置之縱雖有爲何儀彼地は未代可爲本地田原惣地檢注之進置地は可免除者也仍如件

永祿七年甲子六月 日

藏人家 御判

本多豊後守殿

廣孝追々近邊を攻取しゆへ赤澤矢久間高松赤羽根神部等都て賜ふ所七千餘貫の地へ(寛系)
 此年又五油の城(城主姓名詳ならず)を攻らる酒井左衛門尉先手に進み短兵急に攻立たり此
 城高き所故城兵高き所に登り雨の如くに射立ければ寄手進兼たり依て内藤四郎左衛門正成
 に命じて敵を射させ給ふ正成城の矢倉に二矢射込たり其矢に内藤四郎左衛門の姓名を鐫付
 たりしが敵此矢を取て射返し又射られよと云けるを神君御覽じ是城兵謀有べし汝射る事あ
 りれと仰遣ひさる正成仰を用ひず又射んとて進み出る城兵盾を路の傍に出し置て待懸た
 りしよ正成が射る矢其盾を射抜きて其かげに居たる城兵を忽に射殺ければ城兵大に驚き
 悉く逃去たり神君大に其射藝を感賞し給へり(原書一揆平均の次に御油落城の目録あり
 其まるす所の永祿五年九月赤坂の軍の文を少し引く佐脇八幡今川勢御油壘に出張して戦ふ
 事を志す御油落城の事見へず今基業によつて志す)

牧野等國士降參付三奉行の事

永祿八年乙丑の春に至り今川方の三河十等氏真將帥の器にわらず諸士を指揮する事わた

ず徳川家へ降參す西郷孫九郎清員菅沼新八郎定盈の野田又住む白井某の下條又住む是等
 の皆御旗本なれば長篠築手田嶺の輩皆々此三人にたより降參す長篠築手田嶺を山家三方
 衆と唱ふ三州一國悉く平均せしうへ岡崎に本多作左衛門重次高力左近清長天野三郎兵衛
 康景の三士に國中政務訴訟裁斷の事を命ぜらる是を三河の三奉行といへる高力の元來温順
 にして慈愛深く天野の寛厚にて思慮厚し本多のいひ度事有の儘にいひ思慮の有べしとも見
 へざりしが裁斷に臨み心正しく直に果斷明敏之ければ人皆よくも神君の人を知らせ給ひ
 らばせ給ふ事うきと感じ奉れり其頃三河の土俗が佛高力鬼作左とちべんなしの天野三郎兵
 衛どうたひしとぞ各其性質の異なるを一所に集めて事を掌らしめ給ふ事神子産が猛を
 以て寛を救ひ鄭國を治め唐太宗の房玄齡と謀り杜如晦と斷じて貞觀の太平を致せしが如く
 剛柔をもて互に救ひ寛と猛とを兼て施し給ふ神君の程こそわりがたけれ

寺部上野城攻付飯尾豊前守の事

三州の國士多半歸順する中に鈴木日向守重教其子監物の猶も今川氏真に與力し徳川家の命
 を拒み三州寺部の城に籠りければ是を征伐有べしとて野々山藤兵衛元政を先手として攻給

ふ鈴木父子力を盡し戦へども終に防兼て城を逃山並といふ所に落行しが後には永祿十年正月に至りて父子共駿府に逃行て氏真に屬せり（此鈴木永祿元年既に御當家に降参の事あり其後又今川へ随ひしと見ゆ）酒井將監忠尙一向亂平均の後上野の城を逃去て駿府に赴しが又ひそかに上野に歸り來りもとの從兵并土民等を催し上野に城を取たてたり此よし神君聞召酒井左衛門尉本多豊後守に命ぜられ攻め給ふ其時内膳三左衛門信成城門近く攻より城兵坂部造酒允を討取たり時に信成僅に十七歳とぞ阿倍四郎五郎忠政大久保五郎右衛門忠勝今井彦兵衛勝長皆射藝に精妙を得たる輩あれば城兵多く射取られ命を殞す者若干之此忠尙の廣忠卿の御時も櫻井の内膳正清定（信定が子）に與力して叛逆し近年も一向專修の徒に荷擔し一方の大將に頼まれしが其時も軍敗れ駿府に逃去り今度又叛逆を企るかゝる亂臣賊子よかたらはれ汚名を後世に流さん事尤愚昧の至りなり速に降参し寛仁大度の大將に仕へ忠勤をるにまかじと評議一決し各城を出て降参すよつて酒井將監力盡て防戦すべき様もなく再度城を逃山て駿府に赴く又今川氏真の去年三州發向佐脇八幡に在陣せし時飯尾豊前守致實が徳川殿へ内通し病と稱し居城遠州引間へ引返すとて其道すがら新井平須賀邊

の驛舎に放火して歸りし事を大に憤り氏真駿州へ歸府の後早速に引間を故致實を生捕て其虚實を鞠問せんとて新野右馬助親規其弟式部少輔之規を大將とし三千餘人を差添へ引間の城へさし向短兵急に攻させしに豊前守さる古つゝものなれば少しも恐れず矢炮を飛し防戦す寄手の大將新野右馬助鉄炮にあたりてうたれ死す（大成記引間城攻を永祿五年四月とす誤れり）依て散々に敗れ駿州へ逃歸れば氏真益怒りかさねて朝比奈備中守泰能瀬名陸奥守親隆其子中務大輔氏範朝比奈兵太夫秀盛等に大勢を差添攻めこみ晝夜を分たず攻しかども致實防戦の術を盡し寄手の手負死人ばかりにて城落べしども見へず其時致實矢文を射出し某説者の爲に無實の罪を蒙り遺恨せん方なし一時の急難をのぞかんが爲防戦するといへども全く異心を抱くにわらず早く説者の虚實を糾明有て恩免を蒙らば彌二心なく忠勤すべしとしたりめ起請文に添て贈りければ討手の輩是を駿府に贈り氏真に見せしむ氏真爰に於て討手の輩呼返し致實が罪を免し此後の懇意に恩義を施しければ致實も悉くや思ひけん神謝の爲に駿府へ來りけるを氏真謀をめぐらし壯士を伏置不慮に殺害せり致實が妻女ながらもけなげなる性質にて夫の横死を憤り城兵を指揮し堅固に籠城し小國の武藤刑部丞を

たのみ甲州の武田へ内通す神君此由聞召飯尾が家臣江間安藝同加賀兩人へ御内意有て松下覺右衛門後藤太郎左衛門を御使とせられ徳川家へ其城を渡すに於て飯尾が幼子寡婦を御懇に御養育ありて其家人等悉く召抱られ御扶助有べしと仰ければ依て安藝加賀兩人其旨を以て飯尾が妻を種々と諫めさとしけれども彼の妻さらば承引せず爰に於て引間の城を乗取とて酒井左衛門尉石川伯耆守兩將を差向らる然に彼妻の防戦の指揮をなと城兵屢々突出て烈しく戦へば寄手大に敗走せり其翌日の酒井石川又攻寄てはげしく攻立遂に外郭に乗込めば飯尾が妻の糾威の鎧に同じ毛の兜を着長刀をふるつて敵中に切て入る侍女婢七八人同じ粧ひ山立て城兵五六十人と同く勇戦し男女一人も残らず討死す彼妻死去就の是非の論ずるにたらしられども其志操の節烈の丈夫にもまさりたりと感ぜぬ者亦も扱酒井石川の兩將城を乗取れば左衛門尉に此城を守らしめらる江間安藝加賀の兩人の最初より御内意を蒙りし者なればとて飯尾が所領の悉く此兩人へ下されける(原書飯尾病死し氏真より其幼子に家督を繼せしとあるの誤之引間城攻の事の基業による)

法藏寺山緒付寺門額の事

三州山中法藏寺の二村山國豊院といふ其昔大寶年中(文武天皇御宇なり)行基菩薩開基して出生寺と名付たるを永享三年に及び教空龍譽上人改めて淨土寺とあす其後親氏君三州に御住居の頃當山觀音を御信仰あり御願書を納めらる其頃より寺號を改まりしとぞ信光君に至り本堂を建立し給ひ御祈禱料三十貫文を寄附し給ふりける御山緒の故にや神君御幼稚の程此寺にまじり御手習を遊ばしけるとぞ今に其時の御視御机等を傳懸す(開運錄より駿州の智源院にて御物よみ御手習遊ばしける其時の御視御机後に法藏寺にうつしたると見えたり)神君駿府より御歸國の後永祿八年三州御平均の後寺僧共相斗り額として其門に打しとぞ其御條左の如し

定(法藏寺門内門外)

- 一 守護不入の事
 - 一 不可陣取事
 - 一 不可下馬の事
 - 一 伐採竹木の事
 - 一 殺生禁斷の事
- 右於違犯の族者速に可處嚴科者也

永祿三年庚申七月九日

御名

今も寶飯郡山中法藏寺村に存する所之三州に全く御常家御發祥の地され、神社佛閣御由緒
敷多有と雖大樹寺大林寺法藏寺の同派の三檀林にて尤御由緒深縁の靈場とぞ聞へける

三好松永弒將軍義輝卿事

等持院贈相國尊氏將軍よりこのかた足利家天下兵馬の權を掌握ありて四海の政務を専らに
せらるゝ事既に十三代にわたり常將軍義輝卿頗る聰慧をわしければ慈照院准后義政將軍
此かた政綱大に亂れ武威衰廢せしを歎き給ひ何卒して祖業を恢復せんと神心をくるしめら
れしかども等持院殿以來首肉互に害し親戚相そこなふ習ひにて三管領とて天下補導の仁に
わたる斯波畠山も兄弟相争ひて其家遂に衰微細川も兩流に分れ干戈止時なれば天下の政
を施す暇なく四海の亂を治る事を得ず五畿七道悉く瓦解し天理人倫既に斷果たり其頃細川
が被官三好左京大夫義繼其陪臣松永彈正久秀其子右衛門佐久通京將軍家衰微に乗じ竊かに
叛逆を企てけるが今年永祿八年五月十九日俄に大勢を召具して京室町花の御所を取かこむ
折節御所にも宿直の輩數十人にすぎず義輝將軍みづから太刀ぬいて切て出給ひ宿直の輩も

爰も專途で防取し寄手大勢突伏切働きしかども其事不意に起り其上人數も少ければ悉く
同じ枕に討死し義輝卿も御自害有しぞはかなけれ三好松永此亂逆を思ひ立し事の此者共が
豺狼の心を恣にして其身國家を掌握せんどの亂逆といひ雖又其故あきにもあらざ三好
松永等近年權勢を専らにし將軍家の政令の闕外に及ぼさる事を義輝卿多年心ならず思召け
る所に越後より上杉謙信上洛し將軍家に拜謁し三好等近年驕縱にて上をあみし君を腦し奉
るよし承りし何時にても彼等を誅戮し給はん思召立あらばひそかに仰下さるべし某早速
上洛し彼鼠輩を踏潰し御心を安んじ奉らんとかひなくしくや上げれば將軍家世に嬉しく聞
召謙信に御諱の字給ひるのみならず綱代の興を初め數々の禮數をゆるされ謙信歸國の後も
内々ひそかに仰通せらるゝ事ありしを三好等聞出し已等が僭倫の罪深きと知らてさしあ
たる身の災難を遁れんためかく俄に叛逆に及びし物之其外にも義輝卿の御父方松院義晴將
軍の御弟に左馬頭義維とすあはしける此人の御子此頃までも阿波にいまし三好を頼みて年
月を送り給ひしが我をばいつ京都へ供奉するにやとわかれ世に出しくれられよと朝暮三好
を頼み宣ひければ三好一統是も餘議なく思ひ何卒義輝卿を廢し此若君守立ばやと思ふ折か

ら故かた／＼此亂逆をいそぎ思立けるにすべて是等の事迹のるれが七年頃考置たる事どもありといへども其事永く且御當家の御事にもあらざればこゝに記さず

牧野家督付神君御叙爵并足利義昭諸國經歷之事

永祿九年丙寅にうつりぬ此五月三州牛窪城主牧野右馬允成定病死せり其子新次郎庸成家繼べき所一族に牧野出羽守清成といふ者有て成定が所領を押し領せむと康成岡崎に参り其事を訴へ恩裁を請ふ所に神君康成が所理り有とて成定が遺領悉く康成に給りて御書を下され又かの出羽守をバ水野下野守信元に仰せて國中を追放せしめらる(基業)其十二月廿九日に神君從五位下三河守に叙任し給ふ(此叙任の事三州誓願寺京に参り勸修寺家によりて其事を申請て御叙任ありし之今も彼の寺に其文書存す別に録せり)扱も京都よての三好松永叛逆して將軍義輝卿を弑し奉りければ洛中洛外の騒動大かたならず將軍家の舍弟鹿苑寺の周湯をバ平田和泉といふ者馳向て討取とる南部一宗院覺真の三好松永等疎客に不存と雖心あらず思はれしか細川兵部太輔藤孝とといへる將軍家の近臣進めまいらせ伴ひて春日山を越へ江州中部矢島へ落下り佐々木義賢入道承禎を頼み逆賊三好松永等を誅戮し將軍家再

興を頼み思召むね仰下されけれども承禎仰の旨領掌するといへども屹度御請よ不及かくての徒に月日を馳過んこと詮あし若州の武田大膳太夫義統の御姉嬢あれば是を頼み給ひんと若州へ下向有し所若州の分内狭くして計畧整ひがたし越前の朝倉左衛門督義景を頼み給ひ然るべしとて又越前へおもむかる義景早速御請し朝倉孫八郎景鏡を御迎ふ参らせ九月朔日若州を出立給ひ越前敦賀郡金崎に迎入て朝倉崇敬限りあし翌永祿十年丁卯四月廿一日一乗谷の館にて一乗院殿元服し給ひ義昭と改めらる義景管領代として加冠の役す箇様に奔走すると雖上洛の事急に思ひ立べしとも見へず其中には種々難説もあこりければ義昭主従の安き心もあらざりけり京都にては三好永松等阿波の國に使を馳て左馬頭義維の息を呼迎元服させ義榮朝臣と稱し足利家十四代の公方と尊敬したりとぞ(永祿記岐集記織田真記)原書義昭越前より又齋藤龍興を頼み美濃にありたりといふ齋藤の永祿七年五月織田殿のために攻亡され濃州の織田家の領地之義昭齋藤を頼み給ふべきにわらず今剛言す信康君御定婚付今川家躰流行之事

永祿十年丁卯五月廿七日の神君御長男二郎三郎信康君御歳九にならせ給ふ織田殿息女徳

姫を迎取て北方と定め給ふ織田殿より佐久間右衛門尉信盛御送に参り生駒八右衛門中島與
 五郎御興添たり織田殿男女の息數多ありたり長子奇妙御曹司信忠後に從三位中將秋田城
 介たり二男茶筌御曹司信雄後に伊勢國司北畠中納言具教卿養子と成り從二位内大臣迄昇進
 あり三男三七郎信孝勢州神戸城主四國守職職と成り四男お須丸後に豐臣秀吉猶子正三從中
 納言に叙任し秀勝卿と稱せらる五男の坊丸勝長武田信益入道の養子と成り六男の大納言
 信重後に三吉郎と改從四位下侍從に叙任し又入道して浦坊と號す七男の小側信高從五位下
 左衛門佐に叙任す八男の酌丸信吉從五位下武藏守に任叙し入道の後久道と號す九男の藤四
 郎信貞從五位下雅樂助又左京允たり十男の信好始めの長好從五位下左京允に成る十一男の
 綠丸長次後に長兵衛と號す十二の女子岡崎殿北方(寛永十二年丙子正月十日逝去)十三の浦
 生宰相氏郷の北方十四の前田中納言利長卿の北方十五の丹羽宰相長重の北方十六の二條關
 白前右大臣昭實公の政所に備り給ふ十七の筒井伊賀守定次の妻とあり寡と成りて後法華
 に歸依し日榮尼と號す十八の水野東市正某が妻後に佐治與九郎一成と再嫁し剃髮後江肆院
 と號す十九の万里小路權大納言教亮卿の北方かくて織田徳川今の近き御ゆかりとあらせ

給へば益御親しみ厚くわたりせらる今川のおのづからうとく取成給へば氏真大に快よ
 からず毎度國境に人數を出し侵掠んど計りしかどもいつもはかくしき勝利もあしかくて
 の氏真近年の内には大軍を催し父義元吊軍のため三尾の間にて大合戦有べしと國人共安
 き心もわらざりしが氏真の方に更々兵馬の調練軍慮の評議も聞へずけふの花見の酒宴あ
 すの月見の連歌共外茶湯亂舞の遊興のみにて武備の沙汰の夢にも聞へず被官も郎等もいか
 い成行事にやと眉をひそめ額を集て愁傷すあまつさへ此七月頃より駿府に風流躍の流行
 する事衆人耳目を驚かせり先八幡村より躍り始りて郷々村々へ躍をかくれば又其村々より
 躍を返す程に國中の躍夥敷成て八月の末九月の半迄躍りければ次第々々に華麗を競ひ綾
 羅錦繡を粧ひ金銀珠玉の飾天地もかやく計之糸竹金鼓の響き雲井を轟かす凡費川をはか
 るに一日一夜の遊興幾千万ぞや村々より市中へ躍をかけ市中より武士へかけ武士の府城へ
 かくる然れども當年のはや寒冷の時節に至れば來年の秋に至り興行すべしとて九月下旬に
 は躍を休みたり抑駿府に躍流行する事の當時今川氏真が第一の寵臣三浦右衛門佐義忠が
 あながちよ是を好しかば氏真に進め國中鄉民各其家業を捨て躍をのみ専らする事全く今川



今川家躍り
流行する
士民餘念
るに圖

せしむ其子細をいかにといふに太郎義信其頃美女一人求得て限りなく寵愛せり父信玄に知られん事を憚り館内に置きたく思ひ脱近の飯富兵部といふ者の家に預置長坂源五郎只一人を具して夜々飯富が家に忍び行夜明る迄かの婦人とかたらし鳥が音に倦ぬ別をさしみける第四郎勝頼兄義信と失ひ父が家國を押領せんと計畧をめぐらす最中義信のかくとも知らず七月城下の家々燈籠見物せんと披露して例の飯富が家に行て夜明方に歸るを見知り目付横目の役人共へ賄賂を興へ内々頼みけるの兄義信の父君を失ひ早く家國を押領せんとの不孝の姦謀を思立夜々長坂と飯富が家に行て密談せらるゝよし聞及べり此事も事實ならんに於ての國家の爲能々心を付て窺ひ見義信夜々長坂壹人を召具し飯富が家に往來せらるゝ事等君の爲國の爲能々心を付て窺ひ見義信夜々長坂壹人を召具し飯富が家に往來せらるゝ事あらんには速に父君へ申上べし若又此事施設ならんに於てのゆめく他言すべからずと詞巧に申ければ目付横目等賄賂を得たる嬉しさにいかにも勝頼が心になふ如くはからんと思ひ其夜より飯富が家の邊に隠れ居て伺ひ見れば果して有明の月すみ渡る門口より義信の名残りをしげに立出て又此暮の契りをかこち長坂一人具して密に歸館の様子目付横目等

の儘に見すまじ翌朝早々其由信玄へ訴へければ入道大に仰天し父を失ひ國を奪へんとする不孝の賊子早速に誅せん者之されども此隠謀彼一人に限るべからずとて速に義信をば押籠置き飯富長坂を生捕て糺明すされども隠謀の事は跡方もなき虚説にて飯富が家に美女を隠し置て義信夜々忍び步行有しと二人密詞を以て諫防すといへども勝頼彌信玄が近臣侍女共へ財寶を興へ飯富かねて隠謀有る故美女を隠し置て義信を毎夜呼入叛逆をすめたる由誠がましくうたへしむ信玄も衆口金を鏢す浸潤の譜にたぶらかされ義信が訴狀空しく遂に冤罪に沈み自害せしむ奇算妙謀孫吳を欺し此入道若輩者の勝頼が奸計に落入て罪なき嫡子を殺しけるこそうたてけれ扱飯富も長坂も誅せらる武田の家督の勝頼が子太郎信勝と定め信勝幼稚の間の勝頼後見とさだめ吉田左近を使者とし信勝より武田家累代重寶行平の太刀左文字の刀を譲られけり勝頼の思ふまゝに謀をなす得て悦ぶ事限りあり織田信長此事を聞給ひさらば其勝頼を諱として後々の甲斐信濃をも我手に入んものぞと計畧をめぐらせれ妹女を猶子とし勝頼に參らせ織田武田一家の好みをなして以來歡苦を相共にすべしと申送られければ信玄も同意ありて祝言の返答す此妹女といふの備後守信秀の第十八の女と濃

州の苗木の領主遠山勘太郎へ嫁し女子二人を設けて後妻住んで有けるを猶子とせられ此十月四日甲斐の國へ送られ其後又織田掃部助を使者とし信玄の息女を請受て嫡子信忠の妻とせんとす送られければ是も信玄同意し返答に及ぶ(編年に信長の女を勝頼に送り給ひし)永祿八年十二月十三日とし此女の遠山が女を信長養女とせらるゝと見ゆる又信玄の息女信忠定婚の十年十二月廿一日とす(織田殿かぐはうらひ給ふ其本意の信玄と好を通じ親しみを厚くし後を心安くして御身の早く近國を討たがへ京都に旗を揚られんどの大志とぞ聞へける此頃より織田殿の數年軍功老練の聲をえらみすくりて黒繩赤繩衆十人を定められ軍馬調練武備専らに沙汰せられ近年の中にはいかさま五畿中國へ山陣の川意とこそ見へにけれ

義榮朝臣將軍宣下付堀川宇津山城攻并武田信虎陰謀の事

永祿十一年 戊辰正月十一日には神君左京大夫に任じ給ふ京都に三好松永等が守立て主君と仰ぐ左馬頭義榮朝臣を以て奏聞し征夷大將軍に補せしめらる是二月八日之三月に神君大澤左衛門佐基胤(治部大輔基相が子)の侍大將に尾藤主膳村上修理といふ者遠州堀川

の城に籠りけるを押寄て短兵急に攻給ふ松平勘四郎信一榊原小平太康政一番に先登し烈しく勇を奮ひ康政創を被る城兵も切て出防戦の術を盡す味方大久保新十郎忠隣當年十六才是も勇をはげまし敵を打て首級を得たり勘四郎小平太ますく力を盡し士卒を指揮し遂に城を乗破る此月又宇津山の城を攻給ふ小原肥前守鎮實吉田の城を退ひて後此城に住して近郷を侵掠する所に寄手大軍にて急に押寄烈しく攻立れば鎮實防戦かなひがたく城を捨て落行けるが跡に計畧を残し城中に烟硝を埋み置て立去しかば大勢城内に乘入時に烟硝發しければ寄手大に驚きけれども死傷するにも不及四月に至り遠州豊田郡三股城主二股左衛門佐高敷の淺原主殿須陀寺の松下嘉兵衛之綱(豊臣大將其始此之綱が家の奴たりと云)松下源太郎連昌(大二三河志清景とす今寛政譜に従ふ)同國久野城主久野三郎右衛門宗能是等の皆今川が旗下たりといへども氏真が闇愚をうとみ三浦右衛門佐が讒邪を怨み皆々徳川家へ降参す此程山本帶刀成行(一本頼重とす山本勘介道鬼入道が弟と云)に命せられ見附に城を築くべしと有ければ帶刀其地を巡見せし所に城地に然るべからずと申上る(深井彦が廢城老に見附城永祿五年堀越六郎氏延今川に叛て此城に籠る其六月小原肥前守鎮實攻て是を破る此城

後に大井川あり武田が大軍にて攻寄し時大井川水増増さの後詰ちし難からんと信長諫られ
 (と見ゆ)さらば引間の城を修理すべしと命せられ帶刀是を修築す城郭成功せしかば引間
 といふ名の思ひしからずとて濱松と名付給ふ(基業成績)六月になれば今川が領地駿州にて
 今年の風流踊を再興し七月の中旬に及へば士農工商とも家業をなげうちて躍の仕組衣裳
 の物好きの外に他事有とも見へず殊更三浦右衛門佐が駿州法大寺へかけし躍こそ尤も前代
 未聞なれ衣裳の綾羅金縷の美麗を盡し髪に金銀の紙もてつかねしが國主氏真にも花やかに
 風流を極めし衣裳類被して其囃子方の中に混じ大鼓をうつ實に其家破滅の兆ならんと心有
 る者の歎息するといふも時にへつらひ人に競ふ人情故一國の武士共我劣らじと奮修をわ
 らそひ美麗をきそひ譜第舊功の聲も氏真に媚を求め左衛門佐にへつらひんと甲冑を賣り
 馬具武具を質物に出し躍の衣裳を調へるされ近日の笛鼓の價の甚た貴く甲冑の價の低く
 あり武功名義の徒が子孫を見るに猿樂舞に異ならず笛を吹大鼓を打或は河原役者に志た
 がひ踊を學び狂言の稽古に日夜をわかたず弓馬の道の少しも心に掛す手の舞足の踏所に心
 を盡すされ猿樂役者の高祿をたまり財寶を積重ね舊功の武士の朝夕の煙を立兼るに至

れり假初の參會にも酒宴に山海の珍味を設け舞や謠へやとて日夜明し暮す一婢一僕も事か
 く族も重代の二刀を賣りひさぎ踊の興行に財をあげうつ淺ましかりける風俗との成にけり
 爰に武田前陸奥守信虎の去る天文十年に我子信玄が爲に甲州を追出され幸に今川家の諱其
 子氏真の外孫なれば駿府に至り今川家の養育をうけて年月を送りけるが此信虎もとより貪
 慾邪曲の性質なれば當時氏真の昏闇舊功の老将二心をいだき國中の武備怠弛させる形勢を
 見て再度奸計を思ひ付諸老に謀し合せ氏真を追出して駿遠兩國を奪ひ取て我子信玄に渡し
 父子和陸の計らひすべしと瀬名駿河守關口兵部少輔(刑部少輔親永が子筑山殿の御兄弟あ
 り)葛山備中守朝比奈兵太夫三浦與一等に心を合せ氏真を追出さんと計りける所に關口が
 方より信虎方へ送りたる密書を信虎何としてか取落けん今川の掃除坊主宗哲といふ者ひる
 い取て庵原安房守へ見せければ安房守大に驚き早速氏真へうつたふ氏真も大に仰天し速に
 信虎を捕へて誅せんと評議す此事又内通する者有ければ信虎深夜に駿府を逐電し京都へ逃
 登るとて遠州掛川の満願寺といふ一向宗の野寺に滞留の間内々信玄が方へ使者を遣ひし駿
 府にて我に一味の者ありと其姓名書送り今川家滅亡近にあり猶よく舊功の徒を誘き味

方とぞし早く駿遠を切取べしと告しめ其身の京に登りしとぞ一系圖によるに信虎京にのぼり將軍家に昵近し其後高野山に年月を送り天正二年信州に下り八十七にて死すと云ふ是よりいよく駿遠を奔らん計策をめぐらし今川家舊功の老臣等に音物賄賂を興へも此事成就するに於ての恩賞は望み心の儘たるべしと約しけり氏真の又關口兵部少輔をば生捕て腹切らせしうども其外の輩が武田に内通の事思ひもよらずいづも國中無事ありとのみ心得亂舞遊興に奢侈を極めて何事も三浦右衛門佐のみにまうせ置たりしとぞ不覺され

織田信長應足利義昭命一事

足利義昭の朝倉を頼み越前に年月を送り給ふ所朝倉崇敏限き奔走する躰ながら急に上洛の評議もなし其間に種々雜説も生じて始終とゆくべしとも思われずとさら永祿十一年六月廿五日義景最愛の男子河君丸病死したる哀傷限りなし更に心もほれくと成り國政をも沙汰せず尾州上総介の先年今川義元の大軍を烈風甚雨の時節を斗り一戦に切勝て義元を討果す程の名器の剛將此人義昭いまだ江州甲賀邊逗留せられし時内々使者を參らせ忠節の志を顯はしたり此人を頼み給ふにまうじとて細川兵部大輔藤孝上野中務大輔清信を御使とし

其旨仰遣はさる織田殿當時諸國英雄豪傑數多有を置て信長に仰付らるゝ事武門の規模何事か是又まうんいかにも仰せ承まのりいとてうひくしく返答有れば義昭其返答を聞給ひ大に悦みれ其後又上野中務大輔清信を使とし今度早速の御請感心淺からず彌不日に軍勢を催され出陣の程頼み思召と之信長仰にや可及速に軍勢催促して上洛し亂臣共を誅戮し將軍家恢復の功を顯へすべし先御迎を奉れば當國に御座をうつさるべきにやと返答せらる

(此條以下織田長清の織田記太田和泉守午一が信長記による)義昭此頃の又越前にあつしければ不破河内守光治和田伊賀守惟政を細川上野等と共に御迎として越前へ遣はさる是の永祿十一年七月の事之同月廿五日に義昭濃州へ來着有て立政寺へ入らるれば織田殿の廿七日に立政寺へ赴き義昭に對面せられ太刀一腰馬一疋鎧二領沈香十箇綿緋百端鷲眼千貫獻せられ供奉の人々にも銘々種々の物を贈らる此時義昭の細川上野兩人を以て織田殿へ仰下されし前將軍義輝卿三好松永が弒逆の亂より柳營の潰亂極りぬ不肖の義昭漂泊流落し天下再興の志ありといへども一人も國の爲に忠勤せん志の者あり幸に信長英略を施し亡兄義輝卿の怨讐を誅戮せば亡兄黃泉の幽魂を慰むるのみならず等持院殿以來累代の宗廟社稷を再

遣するといふ物之勤て戦功をばげまざるべしとて御盃を賜り酒宴時をうつして織田殿
 暇乞して退出せらるかくて織田殿の義昭の使者に別使を添て近江國観音寺城主佐々木六角
 左京大夫義賢入道承禎其子右衛門佐義彌に仰送られけるの今度信長の足利義昭の御頼によ
 り供奉して上洛せんとす承禎父子も速に人質を出し道を開きて迎へ奉り力を合せて逆徒誅
 伐の功を勵むべし無二の忠勤するに於ては京都の所司代を仰付らるべしと諭告せられける
 されども承禎父子兼て三好松永に一味の事あれば返答もせず既に敵の色を顯らぬせば扱ひ
 先軍神の血祭に承禎父子が首切て京都も攻登るべしと軍議す是八月之九月に織田殿軍勢
 催促せられ美濃尾張の勢一万五千遠州三州の勢八千都合二万八千餘騎義昭より先立て發行
 せんとす川意専らなり是より先佐久間右衛門尉信盛池田勝三郎信輝丹羽五郎左衛門長委林
 佐渡守秀就木下藤吉郎秀吉近習に毛利河内守秀頼同新左衛門菅谷九右衛門福富平左衛門
 野々村三十郎栗林茂助以下を召集め今度義昭の御頼みを蒙り京都へ出陣せんと思ふに依て
 各の異見を尋る所所存つゝまず一へしと有けれど各左右を見廻しはまだ一言を出す者も
 わらず其時佐久間信盛一人列座の中より進み出此御計畧誠お至極の御事と存し凡の一國

一郡を治るだも武家の規模とす然るに况や將軍家の御頼みにより逆徒誅伐あし給ひ柳營恢
 復の功を建られん事此上の事いんや其上に今我君に遠三尾濃勢都て五ヶ國御手に屬す
 天下を敵に受て戦ふとも更も恐るゝに足らず早く逆徒を誅戮し將軍家を輔佐して善政を施
 し四海を治め万民を撫育せられんに於ては英名盛徳比倫是あるまじく承禎をだに誅戮あ
 らば其餘の輩の忽ちに降参し御被官とならん事疑ひなしとすける織田殿喜び斜ならず汝吉
 事をすたりとて盃をあたへられ酒宴夜に入て各退散す其後菅谷九右衛門を以て諸軍勢九
 月五日前に岐阜へ着陣すべしと觸られたり

松平勘四郎信一加勢の事

織田信長既に出陣せんと諸國の軍勢催促よ及ばれける其頃三州岡崎への津田源八郎を使と
 し仰越されし信長今度足利義昭の御頼をうけて三好の逆徒誅伐の爲京都へ出陣す願ひく
 へ御加勢有て給へるべしとの事之神君早速御尤に承りし追付人數を進らざるべしと御返答あ
 りて源八郎をの歸し給ひ松平勘四郎信一を今度加勢の大將に命せられ相じたがふ將士等
 の諸手の中より殊更驍勇の族をえらみ出され都合八百餘騎を信二に附屬せしめられ今度織

田殿五箇國の軍勢敷を盡して召具し給ふ其中に藩家の軍士等方一應したる舉動あらは現達
 あるべし實は晴なる合戦なれば銘々其心得よて一段と軍功をばげむべしと御みづうら仰せ
 含らる信一始め士卒迄今度高名をせず再び本國への立歸るべうらずと悦び勇んで打立け
 る抑此信一の出雲守長親君の御五男藤井の松平彦四郎利長が子にて數度の高名武功の中
 にも永祿元年三月上巳尾州科野の城に有て織田方の皆に夜討して寄手竹村磯田戸崎瀧山と
 いふ名ある輩五十余人を討取たる程の勇士されば今度の大將に撰まれしも時に取ての面目
 皆人うらやみ思ひざる者なし(信一)寛永元年七月十六日に八十六才にて卒するよし系圖
 に見ゆ然に神君との五年の年上と永祿元年科野城の働り二十才今度の加勢の大將にさへれ
 たるり三十才の時なり)

織田勢岐阜出陣の事

織田上総介信長の今度足利義昭を守護し江州より切のぼり三好松永等の逆徒を誅伐し足利
 家再興の功を成就し中國へ旗をたて將軍家をわきばさみ四海を令せんは齋桓晋文の覇業
 瞬息の間に定むべしと悦勇み其旨早く近國へ觸渡されしうば美濃尾張伊勢三國のいふも

さら近國の諸軍勢我劣らじと濃州岐阜城下へ馳集る者雲霞の如し信長の江州一國の地圖
 を以て軍議をこらし永祿十一年九月七日五ヶ國の大軍を引率しはや出陣せらるべしとて先
 義昭の旅館立政寺に參上し細川藤孝を以てや上られしは五ヶ國の大軍はや參着す仍て速に
 上洛を急ぐべしといへども近江の佐々木六角承禎父子の内々三好松永等の逆徒と志を通じ
 伊勢國司北畠が加勢を請て今度君が御上洛の御道を遮んとする聞へあり先承禎父子を誅し
 彼等が首を刎て軍神を祭り其後御迎を奉るべしと有ければ義昭も對面有て世に嬉しげに當
 家再興の事偏に頼み參らすと禮を厚く遜讓して仰ければ信長も深く畏りいと返答せられ
 退出あり直に出陣せむとて先後軍の着到を見られけるは佐久間右衛門尉信盛柴田修理亮勝
 家丹羽五郎左衛門長秀森三左衛門尉可成池田勝三郎信輝佐々内藏助成政前田又左衛門利家
 堀久太郎秀治木下藤吉郎秀吉坂井右近政尙峰屋兵庫頭頼隆稻葉伊豫守一鉄伊賀伊賀守福富
 平左衛門林佐渡守秀就菅谷九右衛門毛利新助毛利河内守秀頼飯尾近江守定宗同隱岐守信宗
 野村三十郎水野帶刀左衛門忠廣梶川平左衛門村井長門守瀧川左近將監二益長谷川與次郎中
 嶋豐前守和田新助飯沼勘平不破河守内光治同彦三郎九毛兵庫頭山田三左衛門丸毛三郎兵衛

丹羽源六等の皆是侍大将あり又一族に織田上野介信包(信秀四男)同三郎五郎信廣(信秀庶長子)同七兵衛信澄(信秀二男武藏守信行が子)同九郎信治(信秀二男)同安藝守信時(信秀六男)同彦七郎信興(信秀七男)同喜六郎秀孝(信秀八男)中根越中守信教(信秀九男)織田源五郎長益(信秀十一男)同又十郎長利(信秀十一男)同與二郎信康(信秀弟)其子喜藏信時十郎左衛門信清兄弟同孫三郎信光其子市之助信成四郎三郎信昌の兄弟同四郎次郎信實(信常弟)同源十郎信次其外同苗の輩に織田玄蕃允信平同彦五郎信豊同播磨守秀盛勘解由左衛門信益同主水信重同民部少輔信重同庄左衛門信治菅谷安房守康長津田半左衛門秀成同修理亮信就同隼人正信英以下宗徒の勇士一万餘騎岡崎よりの御加勢松平勘四郎信一が人数八百餘其他尾張美濃伊勢三河近江織田家の隨順の將士彼是都合四万餘騎とぞ聞へける先陣既に江州平尾邊に至るに後陣のいまだ濃州垂井赤坂邊にさへたり信長義祖平相國清盛より相傳の蝶一ツ染出したる赤旗今度義昭より賜りたる桐并三引兩の旗斯波武衛より傳へられし爪の紋の旗又織田殿の馬前に黄絹一幅に永樂通寶の錢を墨にて書し一流の旗又妙法蓮華經と題目書し馬印九本此日の平尾村に着陣あり八日の江州南宮山こゝに滞留有て人馬の息

を休めらる花々たる平原に色々の旗旗飄へりたる有櫟の春の花秋の紅葉をこぎませたるに異ならず十一日に愛知川に着陣し其近邊を放火せらる扱敵地に入て見れば佐々木六角父子設けたる砦とも數ヶ所ありされども織田殿の諸壘に目も掛べうらず箕作と和田山との兩城を攻よと手別を定め其後宿老とも召集め箕作城を攻べき手立いういあらんと評議せらる坂井右近政尚進出てすけるの箕作と和田山との間さのみ遠うらず敵も定て相はうり互に救ふ手立有るべき之幸淺井備前守の味方なり先和田山を押させて然るべしとさせ織田殿尤之淺井の當國の住人案内者されば淺井に箕作と和田山の間陣せしめ和田山城を押へしむべしと佐々内藏助福富平右衛門兩人を淺井が方へ使して其旨命せられしに淺井の某父子共箕作に向ひ戦功をばげみいべしといふ織田殿仰なりとて和田城の押へして手を空しくなし人の軍を見物斗して日を暮しいんとり得こそよまじけれと返答す兩使返て其旨をさせば織田殿重て兩人を使とせられ淺井父子然らば急ぎ箕作城に攻りくるべしと仰遣りさる淺井承り織田殿の御勢攻めかへらん時其も引ついき攻めくるべしと返答す兩使立歸り來り江州第一の猛將と聞へたる淺井父子返答の鈍きを以て江州士の武勇の程の思ひ知られ

いとすす織田殿も聞給ひ江州の滑者共さるそわらめと打笑ひ給ひさらば我手の者共に此押を命ずべしとて濃州の三人衆といへる氏家常陸介稻葉伊豫守伊賀伊賀守に和田山の押を命ぜられ又箕作の城の形勢見て來れとて柴田修理佐森三左衛門坂井右近三人に扈從馬廻りの五百餘騎副て遣はる其時佐々木承禎も兼て用意せしと見へ足輕數十人途中迄出して防かせんとせしかども柴田森坂井等か引具せし輩の皆騎馬の達者されば歩立の足輕共打群り居たるを蹴立て四方八方へ乗破る佐々木が足輕ども何かの以てたまるべき一さへもさへへず城中さして逃行を追討して討取首ども三十餘級持歸りて織田殿の見參に入れれば軍の手始目出たしとて大に悦ひ給ひける備織田殿にいよいよ箕作を責べしと軍議一決しければ江州の地圖を以て軍將等に城賣の手立を示し攻具の用意整て佐久間右衛門尉丹羽五郎左衛門木下藤吉郎淺井新八郎以下諸將に軍勢五千餘騎差添九月十二日また東雲の頃より箕作の城へ發行せしめらる三州の御加勢松平勘四郎信一も其時手勢八百餘騎を引率し勇み進んで箕作の城賣手の勢に加はり一同に進みけり(永録記岐阜記)

正校 三河後風土記卷第九終

正校 三河後風土記卷第十

近江國箕作和田山落城付松平勘四郎信一勳功の事

永祿十一年九月十二日織田上總介信長の五箇國の大軍を引卒し近江國佐々木六角が所領を放火し箕作和田山兩城の間を取切兩城を攻落さんと軍令を嚴にし美濃三人衆氏家常陸介下全稻葉伊豫守一鉄伊賀伊賀守等に和田山城を押へしめ又佐久間右衛門尉信盛丹羽五郎左衛門長秀淺井新八郎木下藤吉郎秀吉等に五千騎を差副箕作の城に押寄しめ鬨を揚金鼓を鳴らし曳く聲を出し攻させらる此城守將には建部源八郎秀明吉田出雲守重高同新助六千餘の城兵を引つれ矢炮を飛して防戦し時刻をうかいひ城門を開き突て出寄手散々又突立られはとんど攻めぐみけれは是程の小城攻て日數を費し矢を損じて詮なし此城に押を殘し置都に攻登るべしとて搦手の寄手既に引返さんどす織田殿佐久間右衛門尉を以て松平勘四郎信一の陣へ仰遣はされしに今朝卯刻より午の刻迄此城を攻れども味方討死手負の多多くして城落べしと見へず依て右衛門尉を初めとして攻めぐんだり徳川殿の寡を以て衆を破り小を以て大を挫ぐ事神のときのかねて知る所之當城大手の先陣を勘四郎へ譲れば先登して

攻らるべし信長旗本の後陣にありて徳川勢手際の程を見物すべし跡備の信長かくて有れば
 心安く思へるべしと有ければ勘四郎返答に仰の越武門の面目何事か是よ過いべき徳川家
 の中に勘四郎が如き小卒は其數にいはいねども織田殿仰を蒙り御先手を仕つるに於て此
 城忽ち攻落す又討死を仕う二ツの中に安否を極め御覽に入すべし徳川殿當時小國を領し
 いへども武略に於て恐らく日本六十餘州の諸大名肩を並らぶる人あるべうらず其流を
 汲む勘四郎身不肖いはいへども虚言のや上べうらずどかひくしく返答すれば織田殿聞給
 ひ大に感せらるかくて勘四郎の八百余騎の士卒にむうひ只今織田殿使者の詞と信一が返答
 の程面々たしかに聞給へん勇士の面目是に過たる事やあるべき今度發行する面々の武功高
 名の秀たる徒を諸手の中より撰出して遣されたと是面々の眉目ならずや然るにまじひ
 なる働きて織田殿にも見落され敵味方に笑はれなば徳川家の名折するのみならず我君の
 御武名迄穢さん事不忠是に過べうらず次に子孫後世迄の恥辱あらべう心を一にして死を
 一途に決し此城忽ちに乗取べし若も乗取兼る程ならば一人も生て故郷又歸るべうらずと
 合すべしと渡す士卒何れも皆一同に我々いうて一命をおしみ君に不忠し子孫に恥辱を

残しいべき今度吾々八百餘人が命を捨て此城を乗取ん事一瞬の間にとべしと異口同音に返
 答と信一大に悦び徳川家の御旗を眞先に押立大手の門際へひしと付て堀を乗り柵を破
 り討ども射ども事どもせず旗を投入我をどらじと先登す松平勘四郎信一大手の一番乗りと
 高らうと呼いれべ城兵終に一の曲輪を攻乗られ二の曲輪へ引入信一息な繼ぞひた攻にせめ
 よと眞先うけて進んだり織田殿後陣より此形勢を見給ひわれく勘四郎が一の木戸を乗取
 たるぞや信一うたすな者どもと牙を嚙て下知われ木下秀吉始め織田家の輩追ふ跡より
 ついきて二の木戸を押破り亂入す城の守將吉田出雲守格に上り笠を出し招くゆへ寄手しば
 らく矢砲をといむれべ建部源八郎始城中將卒どもが命を助け給ひ城をば開き渡すべしと
 の事を乞出ぬ信二其よし織田殿の本陣へ送る織田殿是をゆるし給へば建部吉田の兩人の
 擲手より落行しが東光寺といふ寺に入て兩人忽ち入道し源八郎の良佛と改め出雲守の道學
 と改め染衣の姿となり迹去ぬ織田殿築作の城を請取て機嫌斜ならず信一を本陣へ召て今日
 の高名先の詞少しも違はず諸手責あくみたる當城を一手を以て責落す事誠に天晴の武功と
 いふべし實の汝の生得小男ながら肝に毛の生たる男かなと宣ひ其日召されたる柵の紋縫た

る津の道服をぬきて給ひける信一が紋の元來葵あれと徳川家の御紋を憚り酸醬草を紋とせしが此道服給ひりしより桐をも紋とせしと之又和田山城の守將田中治部中山城も箕作の形勢も聞おちして竊かに忍び落失たり

佐々木六角父子観音寺城退去付蒲生氏郷の事

佐々木六角左京太夫入道承禎其子彈正少弼義彌の観音寺城も有て箕作の城へ敵押寄バ後詰して救ふべしとかねて思ひもふけしかど美濃三人衆か其道筋を取切たればいかよせんと心を苦め居たりし程に箕作も落城し和田山も開退しときこゆれば今の防戦の頼みもあく興醒て居たりしに織田家の大軍勝に乗して観音寺の城に押寄るよと聞へしかバ承禎父子大に狼狽し終にたまりかねて城を落失て甲賀の山中に逃入たり(原書に日野谷貝う峠とす編年にて石部城と有今の家忠日記并基業成蹟による)入道父子落失たりと聞えしかバ承禎か兼て設置たる國中城々十八ヶ所一夜の中に悉く落去しぬ織田殿の武威破行の如く一日の間は江州を切なひけ十三日に観音寺の城に入給へば國中の輩皆々降参して人質を献ず依て柴田修理亮森三左衛門坂井右近峰屋兵庫頭等へ命せられ功を賞し罪を罰し國法を沙汰せらる

爰に江州日野城主蒲生右兵衛太夫賢秀の俵藤太秀郷の後胤にて數代の名家之近年承禎に屬しけるが入道が諫を用ざるを憤ほり入道と引分れ當城は籠居せしに今度佐々木六角の被官共皆織田殿へ降参すると聞て流石弱を捨て強につく事本意ならず織田勢押寄は一戦せんと用意して待設たる所伊勢の住人神戶藏人盛友の蒲生に縁ある者されバ信長と蒲生と和睦を取給ふ依て賢秀も遂に其子鶴千代とて十三歳に成しを町野左近といふ乳母子をそへて人質に出して降参せり後に從三位宰相兼飛彈守氏郷と聞へし此鶴千代の事あり

按ずるに原書に信長観音寺を攻られしに承禎はげしく防戦し織田勢手負死人多く城陥らず其子義彌勇戦し寄手若干討れ又城兵下方三夢といふ法師大力にて勇戦し信長攻めくまれしが承禎家人三雲三郎右衛門同新左衛門入道父子をいさめ時節を待て本意を達せんとて入道父子城を開きたりと記す是偽作者の妄説にして諸書に見へず依て今是を剛り去り家忠日記織田真記成績基業にまたがひ本文を改む

義昭催促二朝倉一付六角代々不臣の事

足利義昭此時迄も濃州西庄立政寺におひしけるが江州合戦の勝敗いまださだかならず心も

ぞなく思ひ給ひ曾我兵庫頭祐乘を御使とせられ越前朝倉左衛門督義景へ加勢の事を仰遣ひ
 されし今度織田上總介信長を召具して三好松永の征伐を催す所に江州の佐々木六角承禎
 父子御下知は應ぜざる故に上總介御先手として不日に誅伐の事申合都合軍兵七万餘騎先立
 て差向らる然れば兩三日中を出ずして承禎父子が首を刎べし其節早速上洛し給ふべければ
 義景も早速馳上り御上洛の供奉して三好誅伐の功を勵さんへの恩賞は望にまかざるべしと
 仰下さる朝倉義景も兼々三好に内通せしかまた三好松永が猛威をや憚りけん兎角の御請
 むやさず曾我兵庫頭へむちしく立歸るかゝる所へ近江より織田殿の使不破河内守光治立
 政寺へ参り江州の御敵共既に退拂ひ御道筋を開き以早く御發向まじくしへとすければ義
 昭悦び給ふ事大方ならず是の九月十四日之信長の廿一日柏原上菩提院へ着陣せられ廿二日
 への桑關寺に着給ふ廿四日守に着陣廿五日志那勢田の渡迄人数をすゝめらるゝ所は船を
 ければ志那にといまり船の用意を催され廿五日湖水を渡り三井寺極樂寺に着せられて諸軍
 の大津馬場松本邊に陣取たり廿六日には義昭も湖水を渡り三井寺光淨院に着給ふ抑此度
 佐々木六角承禎が大軍を領し數多の城々堅固に備へて國富兵強く有ながら僅に一兩日もさ

へず忽ちに没落せし事の代々將軍家に不臣の亂逆舉動ある天罰のしからしむる所にやど
 世上に評する所之其故の常徳院義尙將軍の時にあたりて大膳太夫高頼の子彈正少弼定頼武
 命を蔑如し上洛もあさず其上將軍家肥近の御家人迄の采地を侵掠せしかば(采地侵掠の事
 陰涼軒の記に見ゆ)常徳院御憤ありて長享元年九月江州釣の里まで御動座有て三年迄
 攻給ひしうば定頼りないがたく甲斐の山中へ逃隠れ明應九年八月惠林院義桓將軍常徳院殿
 の御志をつぐれ再度江州へ御動座ありし時もまた甲賀の山中へ逃入て頭をも差山さず永正
 五年六月惠林院殿周防國山口より大内義興供奉し御入洛ありし時の定頼細川左馬頭政賢三
 好寄雲齋等と一味し京都へ攻上り是を拒がんとしけるが打負て江州へ引返す光源院義輝將
 軍北白川に城郭うまへておひしける時の今の承禎入道大軍を引つれ京都へ亂入し光源院殿
 を追出し奉る是天文十六年の七月之又永祿八年三好松永亂逆をふるまひし時も内々承禎の
 其與黨なりしうば義昭矢島にありしてまじく御頼ありても表に領掌しながら内々の三
 好松永と謀計を通じて義昭を失いんとし今度義昭上洛の道をも遮り留んとすかく代々不忠
 不臣を舉動しかば數代の名家一朝に失ひしも天命のまらしむる所とぞまられける

按するに足利殿の有力の人を頼み怨敵を亡して後また其功ある者を嫌ひ他人を頼み其功臣を亡す事を以て代々の家風とせられし其舊轍を改めず義昭の信長の功を忌嫌はれ朝倉武田北條等を頼み信長を亡さんとして終に天下を失ふに至る佐々木六角の攻らるれば甲賀の山奥へ逃入敵去る時の首さしのべて我國へ立歸るを以て万古不易の謀計と代々思ひあたる之依て今度も甲賀へ逃入しが時代變じ其説又異されば終に再び舊轍を踏事あたらずなくその家を失へり琴柱に膠して舊弊を因循し改革の時を失ふたぐひ古今不少名門貴族の人々能々心得らるべき事ならずや

義昭上洛の事

江州の佐々木六角退散せし上り一日も早く上洛し三好を誅伐有べきと軍議定りしかば九月廿八日足利義昭上洛の行粧を催す織田家軍勢十七段並々堂々と備へて御先をうつ一藩の佐久間右衛門尉信盛同大學助秀盛同刑部少輔同左京進此勢力一千七百人貳藩の飯尾近江守定宗其子隠岐守信宗織田玄蕃允信平此勢三千貳百人三藩の水野帶刀左衛門忠廣同大膳亮築田出羽守佐々隼人正此勢貳千五百人四藩の佐林渡守秀就池田勝三郎信輝毛利新助梶川平左

衛門織田源兵衛此勢三千人五藩の柴田修理亮勝家前田又左衛門利家松平勘四郎信一を加へて此勢四千貳百人六藩の木下藤吉郎秀吉同雅樂助毛利河内守秀頼織田造酒允此勢三千五百人七藩の不破河内守光治同彦三郎織田上野介信包其子民部少輔信重坂井右近政尙(一本義胤)中島豊後守此勢貳千八百人八藩の明智十兵衛光秀山田三左衛門峰屋兵庫頭頼隆此勢四千五百人九藩の山口飛彈守弘孝遠山河内守織田左馬允此勢三千貳百人十藩の丹羽五郎左衛門長秀津田掃部頭福富平左衛門貞次此勢三千四百人十一藩の内藏助成政川尻與兵衛鎮吉津田越後守津田源八郎野々村三十郎此勢二千三百餘人十二藩の惣大將織田上總介信長旗本勢一万餘人十三藩の織田十郎左衛門信清同市之助信成同美作守同佐助同孫五郎此勢貳千餘人十四藩の森三左衛門可成稻葉又右衛門村井民部少輔此勢貳千百餘人十五藩の稻葉伊與入道一鉄氏家常陸助卜主伊賀伊賀守定次此勢貳千四百餘人十六藩の村井丹後守嶋田所之助與平十内加藤三左衛門甲斐越前守大山越中守名塚采女正乾加賀守此勢四千貳百人十七藩の織田孫十郎信次同主水信重丸毛伊豆守山口半兵衛岡部又右衛門堀池主膳正前田一學北畠左馬允丹羽惣内兵衛竹村新左衛門瀧野傳八寺田善左衛門篠川兵庫頭圓平八郎永井新太郎森兵

部左衛門此勢三千四百人都合六万貳千百余人(一本四万貳千人)其跡より義昭の細川兵部大輔藤孝三百餘人を前驅とし上野中務大輔清信か貳百餘人を後騎とし浮雲を拂て青天白日を見る心地して旗旌秋風にひるがへし京都へ入給ふ軍勢物の具各綺羅をかやかせり洛中洛外の貴賤群集して其行粧を見物する者街巷せまじと充滿す義昭清水寺(原書に相國寺慈昭院とす今家忠日記織田日記よる永祿記もあなじ)信長の東福寺に着陣し給ふ天下二人の將軍ありと見へたり

青龍寺落城付信長紹巴連歌の事

信長の岩城主膳助か山崎青龍寺の城に有と聞給ひ早速に先坂井右近森三左衛門柴田修理亮峰屋兵庫頭を軍將に命じ六千五百餘人桂川を越へ山崎青龍寺へと發向せしめらる此報押寄て城下の町を放火し短兵急に責立る岩城か方も是を防んとす兵大勢打て出しかども騎馬武者にかけ立られ忽ちに敗走す柴田峰屋森坂井等は城兵の首五十餘級打取て歸參し東福寺迄實檢ふ備ふ信長御感不淺又菅谷九右衛門に命せられ洛中洛外軍勢の亂妨を堅く禁せらる織田殿今度足利殿を翼戴せられ諸方の強敵追拂ひ御入洛有と聞えしかば洛中洛外の寺社工商

等醫者總港道三等連歌師紹巴心前昌此其外一藝に名を得たる者共我あどらじと清水寺と東福寺へ參謁し賀し奉る其中に紹巴末廣二本壘にのせて信長へ獻す信長御覽じて日本手に入るけふのよろこび

舞つる、千代万代の扇にて

とや上る信長殊更御感あり此日群參の諸人への信長何れも態の御詞かけられ祿給ひりしが紹巴に殊にあまた給ひしとぞ(原書此連歌を紹巴の句に義昭のつけ給ふとするの誤之今案記にて改めぬ)又此日不慮の事ありしに織田上野介信包が下部と徳川家の御加勢松平勘四郎信一が下部と洛中において古き烏帽子を奪合て争論に及びけるに美濃尾張の軍勢一同して信一が陣におもよする徳川家の人々是れを見て此上の力あし尋常に戦ふて討死せよやとて弓鉄炮を揃へて寄來る敵をまつ其威に恐れてあへて近付者いなし信長らくと聞召憎き奴原が狼藉うな徳川殿の加勢を同士打するといふ不覺あるべきり離人にもせよ信一が陣に向ひ狼藉ふるまふ者有んに一々首刎よと柴田佐久間等に仰下さるれば是を聞て寄手の敵

りくく^に逃去たり信長急ぎ信二を召ていかに信一今度箕作の城攻落し又今日の狼藉を止めし事比類稀なる振舞哉と再三稱美あり今の歸國して今度の始末徳川殿へ委細に聞へ上られよとて頓て暇賜り信一の諸人に先立て歸國せり(家忠日記編年皆信一が信長在京の間先立て歸國せりとす原書に信一の信長の歸國の跡迄在京し池田城攻の時一番乗りすと記せせり誤之)扱翌廿九日よ信長畿内の敵ども退治あるべしとて義昭をともなひ東福寺を出陣せられ惣勢五万余騎野にも山にも満ちたり信長の寺戸寂照院に本陣を居られ先手を以て青龍寺の城をかこみ其上にて款を入られしう岩城主膳助早速一戦にも不及降人に参りけり岩城をば攝州發行の先手に加へらる

攝州所々軍の事

攝州伊丹城主伊丹大和守親興の三好方に在ながら先義昭の御方へ忠志を通じければ今度義昭御歸洛を悦び九月十九日人数を出し武庫郡河邊郡邊を放火すれば三好方の輩は大に驚き騒ぎ立河内國飯森城に三好三人衆の隨二三好下野守政康入道釣閑高屋城に三好山城守康長入道笑岩二人の早々城を逃出し四國を差して落行たり畠山次郎高政の兼を義昭へ忠志

をばこひければ高屋の城を返し下さる晦日信長山崎に陣せられ五万余騎を以て攝州池田城を攻らる城主池田筑後守勝政大剛の者よて烈しく防戦せしうは寄手魚住隼人梶川平左衛門あど勇士等十四人討死し雜兵數を知らずされども寄手大軍あれば遂に外郭に火をうけ三九迄押詰其上にて款を入れれば筑後守八質五人を出して降参す(案記晦日とし眞記十月二日とす)高槻城主入江左近將監始め近邊の三好方皆々降参すれば織田勢彌大軍と成て天神馬場の邊迄雲霞の如く充滿す三好松永が計らひて呼上せ参らせし將軍義榮朝臣の將軍宣下の蒙り給へども京都も引續き動亂の砌なればいまだ入浴もなし給はず此頃迄攝州富田の莊普門寺に御座有て三好方の人々主君と崇め置しが又今度の騒動に成ければ茲にも御安座成難く篠原右京進がはからひにて細川掃部助直之三好彦次郎長治御供やて十月朔日阿波國へ落し参らせしが程なく腫物を腦み給ひ此月の末にみまかり給ふあまりあへなき御事之扱芥川には細川右京太夫晴元の嫡男六郎昭元三好日向守長線入道北齋等大勢にて籠りしが是も十月朔日の夜中逃出し四國へ落行り篠原右京進も翌二日の朝越水(二本小清水)布引瀧山の兩城を捨て是も四國へ落去ぬ今の近邊も敵もなければ義昭も信長も芥川の城に入給ひ五

畿内の政事を沙汰し各恩賞を施行はる河内國若江城主三好左京大夫義次のみとより光源院殿を殺せし時の事にも預うらず三好笑岩等との不和なりければ早速義昭の御味方に参る松永彈正忠久秀右衛門佐久道父子の人より真先に降参し此所に集りて拜謁し天下第二の名物吉光の小脇差九十九髪といふ茶入を獻す今井宗久の松嶋といふ茶壺紹鷗が菓子掛物を奉る其外五畿内の輩もくくと芥川城へ來り和漢の重寶珍物を獻じける爰に十餘日滞留せられる間柴田峰屋森坂井等に命じ諸國の軍勢亂妨して土民迷惑すべしとて制札を建られ違犯の徒を嚴しく罰せらるゝ其文にいふ

禁制

- 一 當手之軍勢亂妨狼藉の事
- 一 獵りに山林竹木伐採の事
- 一 押買押賣并追立夫の事
- 一 右條々於于違背者速可被成嚴科一者也仍如件

永祿十一年十月二日

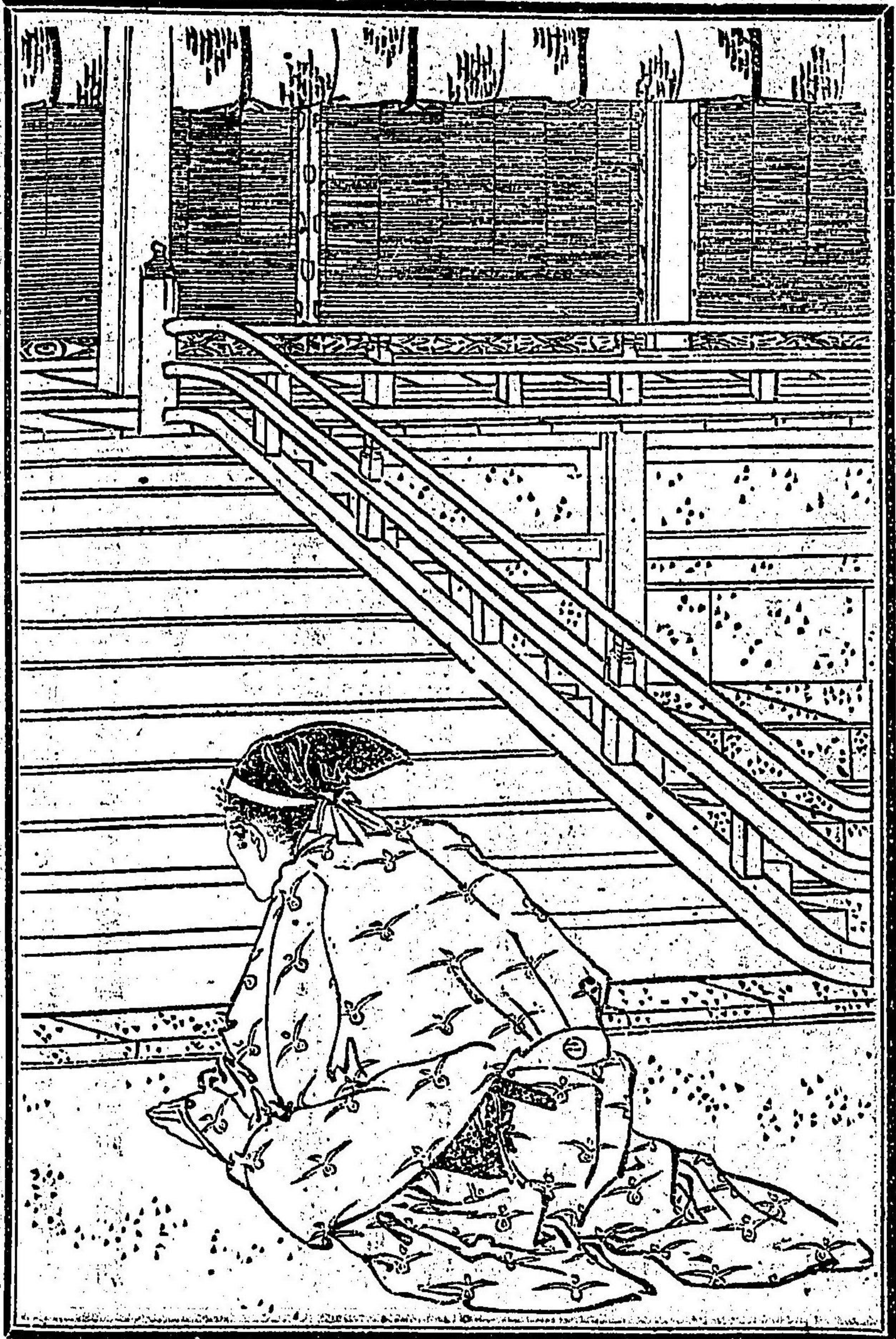
かくて五畿内の政務あらまし整ひければ信長義昭を守護して京都へ歸陣せらる（此禁札の芥川にて建られし原書に歸京の後京にて建られしとして公家門跡の事と四ヶ條を加ふ例の妄説之今案記によりて本文をあらたむ）

義昭將軍宣下 信長歸國の事

十月十四日足利義昭の攝州芥川城に歸城し給へば上總介信長も五万餘騎引具し供奉せられまづ六條本國寺に入参らせやぐて細川右京大夫氏細舊宅を假御所としてうつし参らせ此所にて三献の御祝信長より太刀馬獻せらる御酌にて御盃并に御劔拜領せられ信長は東山清水寺の旅館へ退出せらる同月十八日（足利家官位記による岐阜記廿二日）義昭從四位下に叙せられ同日参議左中將にのぼせられ征夷大將軍宣下ありて禁色昇殿を免さる（足利官位記）目出たりし事共之信長此度逆徒を一戰に追散し足利家再興の大勳を賞せられ左兵衛督に拜任せらるべしとの事ありしが微賤身俄の高官恐ありとて固辭せられしうば從五位下彈正忠に補せられ廿三日將軍御参内池田筑後守勝政伊丹兵庫頭親興道路警固よ参勤す（岐阜記）廿四日假御所にて將軍宣下御祝儀御能あり今度粉骨の報拜見を免さる信長太刀馬進



亞利義昭
將軍宣下
の圖



上せらる脇能弓八幡觀世太夫是を勤めて御能十三番九るべしと仰出されしを干戈いまだと
いまらぬ時節なれば諸國の武士早く暇賜へるべしと信長申上られ五番と定らる御祝初献の
御酌の細川兵部太夫藤孝和田伊賀守惟政上意を傳へ信長今度の大功古今拔群あるを以て副
將軍ありとて管領職成とも其所望次第に仰付らるべしと有けれど是も固辭せられしかば人
皆是を感じたり扱脇能高砂觀世太夫同小次郎大鼓大藏二助小鼓觀世彦右衛門笛長命集大鼓
觀世亦四郎此時二献の御酌大館伊豫守晴忠三使又上意を傳へ信長御前に召て將軍御酌にて
御盃下され應井御腹巻を賜ふ二番八幡大鼓三谷長助小鼓幸四郎次郎三献の御酌一色式部
少輔三番定家此時に小鼓御所望ありしうども是又固く辭せられ四番道成寺大鼓大藏小鼓觀
世彦右衛門笛伊藤宗十郎五番吳服御能過て一座の役者へさらにも云はず田樂桂に至る迄信
長より引出物數々さづけらる實にいかめしき規式と貴賤目を驚うしたり今日諸國の軍勢
の暇給はりて歸國に赴し又國々旅人の煩をわはれみ關所を停止せしむべき旨申沙汰せら
れ信長歸國の暇申上られしかば不日に逆徒退治將軍家再興を御感のあまり三通の御内書賜
ふ其一通の左兵衛督仰出されしが是も辭退せらるその外

今度國々凶徒不歴日不移時令退治の條武勇天下第一也當家再興の大忠不可
過之彌國家の安治偏に賴入の外無他事猶藤孝惟政可や候也
永祿十一年十月廿四日 判

御父 織田彈正忠殿

又一通には

今度依三大忠一紋桐引兩筋遣之し可受武功の力祝儀也

永祿十一年十月廿四日

判

御父 織田彈正忠殿

信長大に面目をほごころれ直に暇給はり廿五日京をたつて廿八日濃州岐阜へ歸陣あり諸軍
勢も銘々賞録をほごころ歸國せしめらる是より先松平勘四郎信一の三州岡崎へ歸り箕作以
下の戰のさきを委細申上しかば神君は信一か戰功を御感有しと之(永祿記岐阜記)
按るよ織田殿此度義昭將軍を翼戴して足利家恢復の功を立られし始め江州の佐々木父

子を追排ひ義昭を供奉し上洛有て大功を立給ひけるを原書には佐々木の嫡流に修理太夫義秀といふ者有て信長と相討り佐命の大功を立しとて其家へ澤田目賀多三上高島などいふものゝ姓名をもかざし書のせたり今佐々木系圖を閲るに義秀といふ人更にあし作者偽造せる妄説故今悉く刪り去る此後も義秀并其子義郷と言者の事散見する所の者妄説あればどもに刪り去て除く猶撰者考を合せ見るべきと

武田信玄襲三野駿州一付今川氏真走掛川事

義昭將軍歸洛せられしかば畿内ハ漸く靜謐のごとくあれども諸國は彌擾亂して一日片時も靜ならず其中にも甲州に武田信玄越後には長尾謙信相州に北條氏政駿州に今川兼定互に險要の地に割據し各國境を争ひ干戈更に止む時なし今川氏真昏愚闇弱といへども父義元の武威残り譜代の被官武功の輩多ければ駿遠の兩國を失はず武田信玄ハ父の信虎を追出し家國を奪ひし程の無道人あれば父子の大倫をさへ知らずまして異姪の情をいかでか辨へんや甥氏真が家國をも侵掠せんと年頃謀計をめぐらしけるよ父信虎駿府を逐電し京都へ赴くとて掛川の満福寺より内通して今川氏真昏弱にて譜第古老の輩怨をふくみ二心を抱くもの

ありと告げれば信玄大に悦び氏真の老臣漸名陸奥守葛山備中守朝比奈兵衛太夫あといふ隨一の侍士大將どもへ賄賂を贈り交を厚むかたらひける程に利を求め欲に耽る輩甲州へ内通する者數多あり其後初鹿野傳右衛門を駿州へ遣はし氏真方へ送りけるは三河の徳川の父廣忠が時より今川殿の幕下に屬し代り恩義を蒙りむがいつしか大恩を打忘れ尾州の信長に屬するのみならず今川殿所屬の城々爰かも攻取て今は遠州へ手を出さんとする形勢之其勇威に恐れ今川家の重恩の被官共徳川に降参する者も少なからず只今のごとくならんには近年の内には遠州を徳川に攻取られんその眼前にさればとて當時今川殿の弓矢を以て徳川に敵せられん事覺束なし座むかから遠州を徳川に取られ他家の所領とせられんよりハ快よく信玄に遠州を賜へるべし然らば信玄遠州を手に入て不日に大軍を發し三州を攻取て今川殿の怨を報ずべしと之氏真聞て大に憤り使者傳右衛門を呼出し信玄遠州所望の事とらに心得られず其方奸智貪慾にて甥氏真が所領を奪はんが爲め巧言を以て誘く事親戚の道にろむく遠州の徳川は渡さんと兼々氏真が覺悟する所之信玄が奸計其詮あし汝歸て此旨よく入道に傳へよと返答し早々傳右衛門を遣返す信玄此返答を聞て大に怒り氏真乳臭

の小兒何ぞ無禮の甚だしき其儀あらば徳川と和睦し後を心安くし駿府を攻取らんとて順て
 山縣三郎兵衛昌景を岡崎に使し今より後兩家永く好を通じ大井川を境とし遠州は徳川殿御
 手柄次第切取給ふべしと申送る神君尤もとて御同意の御返答あり(原書に信玄駿府を奪
 ひし後神君より信玄方へ御使にて此御約束有とす誤之伊東記大久保記基業によつてあらた
 む)永祿十一年十一月六日信玄三万五千餘人を引具し甲府を出軍し下山通を経て由井八幡
 坂を左に見おし長坂を越へ宇津總といふ所へ日數七日に押付て松野を陣を取る信玄かね
 く内通せし今川方諸將へ彌忠勤を勵むべし恩賞の望の儘たるべしと申送る氏真此事夢
 にも知らず信玄出軍すと聞てさらば山向て蹴散さんと人数を催す先陣庵原左馬進忠宗同安
 藝守忠胤二千餘騎にて薩埵峠を前にあて陣を取る三陣岡部忠兵衛長宗小倉内藏助直次七
 千餘騎八幡平を陣す惣大將今川氏真の二万五千餘騎にて清見寺に備へたり今川家一族舊好
 の宿將老臣彼是二十二頭物て其勢三万四千餘股脇金鉄の勇士ども今日大事と兇の星をか
 ややかし具足の袖をつらね雲霞の如く列れば今川武田の雌雄を決する大合戦さぞいかめし
 き事あらんと敵も味方も堅睡を吞て今日を最期と思ふ所に信玄がた先手旗の手見ゆると其

儘後陣に備たる今川方朝比奈兵衛太夫秀盛の早々陣を拂て駿府へ逃歸る是を見て瀬名陸奥
 守親隆其子中務大輔氏則三浦與一義高葛山備中守氏信并武田陸奥守信虎が駿府よて設たる
 上野介信隆等を始として兼々信玄へ内通せし侍大將二十一人の輩同じく評議せし氏真
 の聞愚にてハ逆も駿遠の兩國を永く守る事得べからず僅に織田徳川兩家の爲に切取られん
 より兼々信玄所望の如く信玄にさづけ其功を以て我等恩賞に郡邑あまた申受ん是こそ家名
 を失はず富貴を得べき妙計なれと評議一決し各駿府へ逃入けり數代恩顧の老臣既にかくの
 如くあれハ前後に透間かく居並びたる諸軍勢氏真をばかへり見もせずまばしの間に我も我
 もど逃歸り近邊に人有とも見へざりけり先陣庵原左馬進同安藝守跡を振返りて見るに後陣
 俄もむら立て引退くろと見ゆればこゝいかしつる事を八幡邊にひらへたる味方のこたへ
 たるう見て來れど使を遣はすに其使やがて馳歸り此近邊にありし味方の勢の一人も見へず
 いどいふ庵原聞て扱ひ此勢ぱりりおて武田と合戦かなふべうらざ一先駿府へ引歸し重で軍
 議をさため合戦すべしと二十二人の老臣共を召集る所各別心を企望しにや但し武田勢に
 恐れけるう一言も存慮を申出じもさく途方にくれたる有様之其中にも今川隨一と人よ知ら

れし朝比奈兵衛太夫軍議の席へ出座もせず料理の間の長爐に脊をあぶり居眠していたり岡部忠兵衛小倉内藏助等此跡を見不思議に思ひ兵衛太夫逆心あるうと見及ゆと氏真へ告る氏真夫に何ぞ證據ありやと尋らる兩人答へけるの兵衛太夫事無雙の剛士數度の名譽人に死されし身が今度武田が旗の色をも見ずして一番に逃歸るは一ツ次に武田が軍勢既又當國へ亂入す其事の急に臨み軍議の席へも出ず是第二又此騒動の最中に當家隨一の老臣が具足も着せず爐をかこんで座睡す此三ヶ條不審なきにあらずいかさま廿一人の侍大將悉く信玄に内通せしと見へて軍を氣遣ふ様子もなく敵を恐るゝ景色も見へず兵衛太夫一人誅戮あらば残る黨是に見懲せんかど陳れバ氏真も尤も得心して日根野備中守并内藏助か嫡子小倉與助兩人も命し兵衛太夫いよく逆意の形勢あらば速に討果すべし若し又左もあからんにハ卒爾の騷擾すべからずと下知を加ふ兩人畏て頓て料理の間にまかり座睡したる朝比奈か側へ立寄れども朝比奈更に用心する跡も見へず日根野小倉をさし招き朝比奈逆意あらば我等兩人か形勢を見て少しの用心をすべき所もさらしく其有様もあし然る上の朝比奈逆心よあらざるかといふ小倉聞て我も左様に存ずれば卒爾の振舞すべからずと相談し氏真へ

其有様を告たり其間に兵衛太夫いひそかに座を立て宿所へ歸り弟金七郎に向ひ我今日の漸々虎口を逃れて歸りたり其故の日根野備中守小倉與介兩人にて我身の側に立寄てはばらく佇立たる其様子事有げに見えしハ必定主君の命を蒙り秀盛が形勢を伺ひ見てもし怪しき跡も有あらば討果さんとする景色なり秀盛是を推察する所もしも此方にて川心の跡あらば身の災難逃るべからずと心付進と知らぬ跡にして座睡して居たるを見て兩人不審の顔色にて立去たり今の隠謀露顯程近しかくてあらん事甚だ危し我速かに此所を立退へし其方我等が人質を盗出し何方へか落行べしとや含め兵衛太夫の其夜逐電せり氏真此事夢にも知らぬばかさねて軍議有るべしとて宿老共を召集るに秀盛はハや逐電せしと聞へければ氏真あきれ果兎角の沙汰にも及ばず然れども二十一人の宿老ども己々か敵に内通露顯を恐れ皆武田へぞ従ひける秀盛弟の金七郎の兄が人質盗出して逃たりしが氏真聞て大に怒り手分して追掛させしかば金七郎をぞ取逃したれど人質をば取返して來りければ氏真諸人のこらしめの爲とて彼人質の首を刎たりさる程に武田の先陣山縣三郎兵衛昌景馬場美濃守氏勝小山田右兵衛尉高茂小幡上總介信貞眞田源太左衛門忠平同兵部少輔達進内藤修理亮昌豊等三千五百餘

騎江尻を越へ宇和原(大成記に上原に作る)迄寄來る駿河の町人百姓共是の何事なるやとて上を下へと騒動し資財雜具を東西へ持運ぶ或の幼き子を背負ひ老たる父母の手を引て南北に逃迷ふ城中の女童部あつてさわぐ事限りあし武士も妻子にもて扱ひ逃支度計して軍を心かぐる者ありし大將氏真も近習どもの驢ぐを見あきれ果たる計にかゝる所へ三浦右衛門佐あつたしく馳來り手の舞足の踏所を覺へず而色土の如く成てや様君のいまだ世の有様をも知らし召さずかくて渡らせ給ふか二十一人の逆臣共皆々信玄へ降参し君にむかひ弓をひき戈を倒まにして攻んと是を防くべき味方あし退くべき所へ退き進べき時へすゝみ進退節に應じしを以て良將の舉動とすかく座あがら敵の擒と成給ひんの口惜き事ならずやいそぎ此城を立出給ひ砥城(家忠日記に土岐に作る)の山家へ身をひろめ計畧をめぐらし重ねて恢復の功を顯らし給へど例の利口巧言を以て智恵有顔にすければ何事も三浦がや所に背かぬ氏真是尤も心得心し近習わづかに五十餘騎召具し世々住馴し駿府を立出て砥城の山家へ落行たり(伊東物語に氏真駿河の府を落し)十二月十三日と記す)城中の女童部皆步行既足にて走り出しが道も知らねば彼是さまよひたるを情も知らぬ下部共爰かしこに追つめ

打倒し押伏て衣服を剝取手又物を持たるの奪ひ取赤裸になすをめきさげんて泣きかあしめ其儘息の絶るもあり目もあてられぬ有様之駿府の西花澤の城に小原肥前守鎮實遠州掛川の城に朝比奈備中守泰能藤杉の城に長谷川次郎右衛門一族二十一人(原書に朝比奈備中守と今成績基業による所)是等の流石數代深恩を思ひ金鉄の心を現はしけるが小原鎮實使を立て掛川の城へ送りけるの亂世忠臣を知る古語今眼前に覺へたり今川家數代恩をあたへ惠をかけて將士を養ひ置れたる甲斐もなく譜代老臣共恩をわすれ義に背き此大切に望みて敵に内通降参し主君を追出し國郡を奪へんとす人面獸心論するに足らず鎮實に於ての義を守り節を變ぜず信玄に請矢一筋射うけて君恩を報せんと志ありとやける朝比奈是を聞てや越さるゝ所節義の御志返すゝも感じ入ては乍去只今味方悉く離散す此小勢を以て武田が大军と決戦し討死せんと義の潔よしといへども謀事拙きにあらざとせず氏真事いまだ存命なるに妄に一身の名をさしみ討死せんも詮なきに似たり幸ひ掛川の城の要害堅固にて兵糧玉藥も乏しうらず泰能が所存に氏真を當城へ迎取りて嚴重に守護なさは敵幾万の兵を以て日夜に烈しく攻るども容易に落城はすべからず其中に小田原の北條

氏康父子よもや捨て置るまじ定て後詰をもせらるべし其時の氏眞の恢復の運を開くるべしと存ず死の易く生難しとすいへば一旦の恥辱を忍び會稽の恥をすゝこそ勇士の譽とハヤべけれ必ず短慮あるべうらずと心中残さず返答し泰能の其後砥城山家へ使をたて、氏眞を迎へ取掛川城中軍勢七千人各鉄石のごとく志を一致に約束して節義を守り氏眞を守護せしける泰能こそ比倫すくなき義士とい見へにけれ

駿府城焼滅付今川將士落着の事

今川氏眞の無二の寵臣三浦右衛門佐の氏眞をともむ砥城の山家に忍び居たりしが朝比奈泰能便を立て氏眞を遠州掛川の城へ迎入るゝ及び右衛門佐も氏眞に付添ひ掛川へ参らせしてかなひ難き身あれども此年頃右衛門佐氏眞が寵に誇り古老武功の輩に無禮をふるまふを以て朝比奈泰能右衛門佐を甚だ憎みければ右衛門佐大に恐れ氏眞と別れ父小原肥前守が守りたる花澤の城に入て父子一所に武田勢と一戦せんと立籠る長谷川次郎右衛門一族二十一人軍兵三百餘人藤枝の城に籠り其外由比淺原齋藤等の輩も伊具山に備へて一防せんとひかへたれば信玄容易には駿府へも入難く先手山縣三郎兵衛馬場美濃守小山田右兵衛尉

小幡上總介眞田源太左衛門同兵部小幡内藤修理亮等を遣はし駿府の城を焼かしむ折節烈風吹て城櫓其外樓閣二圓にもえわがり黒烟天地をかすめたり今川家數代の間富貴奢侈をきりめ積蓄たる財寶珍器名物數を盡して焼亡し金銀をちりばめたる今厦高樓一夕の灰燼とありし有様の姉蘇城一夜の煙成陽宮三月の火もかくやらん吳越秦楚の古へも思ひやられ哀といふもあるか（成績基業等に信玄賄賂を以て招しがは留守を預りたる岡部次郎右衛門正綱の信玄に降参し安部大藏元眞退去し後に神君に師順す其後信玄駿城を焼ぬとあり然れども翌年五月神君氏眞と御和睦の後氏眞を駿府に歸任させしめんとして駿城を經營し給ひし時岡部次郎右衛門正綱兄弟に其事を命ぜられたり岡部も信玄に前年降参せば何ぞ氏眞のため築き給ふ城を岡部に命ぜられんや全く岡部此時迄の信玄へ降参せず氏眞の味方なりし故此普請を仰付られしなるべし十二年の十一月より信玄駿州に攻入十二月再び駿府を攻し時岡部終に信玄に降りし安部も其時退去せしなるべしよつて此所の成績基業の説をばどらず）信玄の山縣三郎兵衛に駿府を守らせ其身の久能山に陣したり如何なる嗚呼の者の仕業にや翌日駿府の焼跡に一首の狂歌を大札に書て立たりけり

甲斐もなき大僧正の官職を

愆に駿河の甥倒し見よ

信玄と氏真の眞姪の中ちればたどひ救済する事なきとも信玄姦謀を巧にし氏真の家人共を貨財を以て誘き終に國郡を奪ひ取しを憎まぬ者なければかく誹謗せしなるべし信玄武門に有て何の故にか北畠山明應院に賄賂して大僧正の僧綱を任じ今又甲斐を領しあから駿州を奪ひ甥氏真が所領を失ひしめしゆへ諸人其無道をそしり憎むも道理と知られたり是のみならず信玄が無道といふの父信虎を追出し家國を押領し罪なき嫡子太郎義信を殺害し諏訪刑部大輔頼重と和睦して頼重を甲州へ招寄て偽り殺じ其國郡を奪ひ其上頼重が女子を以て妾とし此腹に勝頼を設くかゝる暴惡の所行あけて員へ難し今川家の重寶京極黃門定家郷眞蹟の古今集を借て遂に返さず國中の替者を召集て焼殺す類ひの物の數あらず老算妙謀古今に比倫なく軍法戰術孫吳に彷彿たりといへども子孫繁昌覺束なしと思へぬ者もなかりけり扱又今川家譜第恩願の老臣とも利録の爲に誘はれ大節に臨んで其志を奪はれたる輩多きか中にも葛山備中守の兼々内約のとく駿州を下し賜はるべしと願山しに信玄頭をふり汝の

如何ある忠節の有てかかゝる願を叶出すぞ數代恩義を蒙りたる主君を捨て叛逆せしを大劫と思ふにや君恩を知らざる禽獸に駿州を取らしめん程ならは甥氏真へこそ返し渡すべけれどて大に冷笑て罵りける葛山大に怨悔といへども詮方なく年を経て後北條氏康へ内通し氏康の手引して信玄を亡し怨を報へんと計畧をめぐらしけるが其の事露顯し生捕られ信州諏訪にて磔にかけられたり瀨名陸奥守の程なく不療の病をうけて病死し其子中務大輔の信玄の心に違ひ甲州を追出され小田原へ逃行しが北條氏康も其不忠を憎み扶助せされば終に民間へ落入ぬ朝比奈兵衛太夫の志ばらくの間駿州にありしが武田勝頼滅亡の後徳川家の誅を蒙りたり其外大身小身とも信玄へ内通せし者信玄稱美せずあるひ誅せられ或は餓死しあるひ民間に流浪す不忠無道の天誅のがれざるこそ恐ろしけれ

信玄築久能城の事

武田信玄駿府を焼擲し其身久能に在陣せしかば今川家亡命せし將士共降人に出て人質を獻ずる者日々夜々に絶間あし信玄奥津の横山といふ所に要害を構へ穴山陸奥守信忠入道梅雪を此所に置て守らしむ奥津に續たる山下といふ地の梅雪が所領あれば方便のためかく定

めし之(梅雪が名一本信照とす今の系圖基業の中武田系による)爰に又今川家の家士に庵原彌兵衛とて小身の者ありしが數度の高名此類なき剛の者とさら山木勘助入道道鬼が第一の弟子之信玄彌兵衛を召出し小勢を以て立籠り大敵を引受て防戦なし安き地形のわりやと尋るに彌兵衛やけるに此久能山とやの後の山の尾長く引て深山につゝき三方の岩石高く聳て谷深く其上川水乏しからず其中に一ツの細道あり半脇を踏で鷹齒を傳ふ秦の函谷蜀の劔閣も是にの過じと覺へし實に一夫怒れば三軍の士も抑て向ふ事あたはず尤も要害の名地之此山に城を築き兵糧多く蓄置て十人の勇士心を合せ弓鉄炮を掛置ならは日本六十餘州の物軍勢残らずあし寄攻るもたやすく落城すべからずと先年山本勘助が浪人にて當國に在し時語りいとやければ信玄大に悦びさらば不日よ此地へ城を築んと細張り地祭り取行ひ土木の功成就せしかば兵糧馬の練葉まで具に是を懸檢し今福常閑其子丹波に與力四十騎差添都合三百七十餘人爰に籠置守らせて信玄の一先甲府へ歸陣せり又神君先年御舅父同母の御弟松平源三郎康俊と酒井左衛門尉忠次が女子との今川家へ人質に出し給ひしを氏真兼て其家人三浦與一に預置れたり然るを今度駿府の没落により與一も信玄に降参しければ何うも勘

功にせんと思ひ氏真の詠々預け置たる人質を伴ひ甲府へつれ行しり信玄大に悦び此人質を我方に留む物あらば徳川殿も後々の我等が幕下に属せられんは必定ありとて其人質を受取甲府にて番人嚴重より付守護させたり

遠州井伊谷刑部落城付奥平由緒の事

今年十二月武田信玄の駿州に攻入んとする由聞へし所神君の遠州を經略し給ひんとて岡崎城御出馬あり先井伊谷城を攻んと菅沼新八郎定盈并其家臣今泉四郎兵衛延傳に案内者を命ぜらる抑此井伊谷城といふの今川が被官井伊信濃守直盛が代々の居城ありしが直盛の永祿三年今川義元討死の時同じく討死して後一族肥後守直親遺跡を繼ぎ此城を守りしに是も被官小野但馬が讒にてあえなく討れ幼兒万千代の三州の方へ漂泊せり神君此月朔日大井河邊に御陣を張給ふ所へ菅沼定盈參陣して此城要害の地に築たる城なれば力攻にせんとせばむなしく月日を費し士卒も多く損ずべし某が一族菅沼次郎右衛門忠久并近藤石見守康用鈴木太郎太夫重時(一本重吉又重緒)此三人井伊谷の豪傑之此三人に恩を施し味方に招き給ひし此城戦はずして御手に入へしとす上る神君其す所尤も之とて井伊谷近く御馬を進めら

れ菅沼近藤鈴木三人は御書を下され所領の地を宛行ゆる其御書にいふ

今度兩三人以馳走井伊谷筋を遠州へ可打山の旨本望之就の所々出置知行分の事永無相違爲不久扶助旁若自甲州致知行分如何様の被ア様共進退に引懸いて見放間敷也其外の儀不レ及レテ若於レ偽者梵天帝釋四大天王別て其富士白山都て日本國中神祇の可レ蒙レ御爵ニ者也仍如レ件

永祿十一年十二月十二日

御諱御判

菅沼次郎右衛門殿

近藤石見守殿

鈴木三郎太夫殿

此御書ハ今も近藤家に傳ふ(井伊肥後守直親讒死の後其被官七人にて此城を守りたるよしされば菅沼近藤鈴木其七人の中なるべし鈴木が子孫今水府老臣鈴木石見守是之)菅沼定盈并今泉延傳も同じく誓詞を添て三人の方へ御書を遣ひし三人の方より參らする誓詞并人質も定盈請取て献しければ定盈も此功を賞せられ遠州にて新地被下ける又此三人後に井伊

直政に附屬せられ井伊谷三人衆とて武功に知られし輩之(近藤菅沼兩家譜説)かくて定盈ハ此三人を案内として定盈先陳し井伊谷城をば忍ちに乘取しかば夫より同月三日菟原庄太郎忠良長谷川次郎右衛門秀匡か守りたる刑部の城に攻かりしが此城定盈一手して攻落し其家人菅沼又左衛門を以て其城を守らしめ其旨言上せしかば神君の夫より直に金指通瀬戸川にかゝらせ給ひ端折の妙恩寺に御着陣あり濱松の城の去年飲尾豊前守討れし後其家人江馬安藝江馬加賀兩人ハ徳川家へ降參して其城を守り居たりしが其後今川氏真大に怒り大勢を以て其城を攻しかば江馬兩人防戦かゝらずして又今川へ降參す然るに今度神君遠州へ御出馬ありしを聞て江馬加賀密に妙恩寺の御陣へ使を奉りやけるハ氏真昏愚にて疑念深く古主飯尾豊前守を討取て後彌疑念晴やらす火急に當城を攻ければ詮方なく氏真へ降參し一朝の危難を逃れ實に氏真へ歸順する本心にあらす御寛宥の御沙汰有んに永く無二の忠節を可盡とす上る神君元より寛仁よ渡らせ給へば加賀が願ふ所を免させ給ふ然るに安藝ハ是を聞加賀一人にて徳川殿へ降參し我を賣しありとて大に怒り恨み夫となく加賀を招寄て刺殺たり加賀が郎等小野田彦右衛門早速に安藝が宅へ走り付安藝を討果し其首取て神君の御陣

に馳参りて事の由注進す神君此時はや安間村頭陀寺に御着陣ありしが此注進を聞召て直に濱松城にいらせ給ひ小野田彦右衛門が功を褒賞し給ひけり先に徳川家へ降参せし久能三郎左衛門宗能が一族久能淡路守宗益同八右衛門宗明同禪正宗政同采女宗當等皆徳川家に歸順しければ奥平監物貞勝長子九八郎貞能父子も御味方に属し奥平の遠三の今川方を大勢かたらひ歸順せしめたり此奥平が由緒を尋るに村上天皇の皇子具平親王より十二代赤松則景安藝に居住す治永年中右大將頼朝卿伊豆國より義旗をあげ給ひし時則景東國に下向し右大將家の御味方して軍忠を盡したり則景男子二人あり嫡子の家範是の後醍醐天皇へ仕へ奉りし次郎入道圓心が五代の祖之二男氏行の族父の一族兒玉庄左衛門が聲と成りて其家を繼兒玉庄左衛門と稱す其末流上野國奥平郷を領せし故子孫奥平と稱し軍配團扇を以て家紋となす(和名抄上野に奥平といふ郷あり波合記に武藏七黨の中兒玉庄左衛門貞政御當家政親君と同じく尹良親王の御味方して後に三河國に隠れ住む其子孫奥平と稱す奥平の三河國地名に寄ると云此説是なりや否)其末葉奥平八郎左衛門貞俊が時上州より三州へ來り築手に居住し代々長壽にて貞俊ハ八十歳其子監物貞久八十一歳其子監物貞昌八十五歳其子今の監物

貞勝是も此後文祿四年十月九日迄ながらへて八十四歳にて終りをよくし其子九八郎貞能の後美作守と稱し孫の末々御當家に武名を顯らし御縁結ばされし九八郎信昌之又小笠原新九郎康元の先より御味方と成じらば一族小笠原主膳正同伊豫守とも進めて歸順せしめたり(康元降参の永祿九年四月なり)爰に又同國高天神の城主小笠原與八郎長善(成績氏與編年長忠)眞虫塚城主(大成記成績馬伏塚と云ふ大久保記にハ此塚と見たり)小笠原美作守長秀兩人信立又や降参せん氏眞にや從服せんかと此兩人の信立氏眞の勝負をうたぐひ其心いまだ定らず神君其一族新九郎主膳正伊豫守に命せられ早く與八郎美作守兩人を味方に引付けしと仰付らる新九郎畏て高天神へ赴き降参を勸めんと急ぎ行途中よて與八郎の信立が侍士大將秋山伯耆守晴近を頼み信立へ降参せんと思ひ美作守長秀が二男太郎吉を秋山が方へ送らんとて既に途中まで出たるに行達て新九郎の太郎吉を取ておさへ天神へ同道し與八郎美作守をよくくすめ徳川家へ歸順せしめ同道して拜謁せしむ新九郎康元ハ此功を賞せられ三州赤羽赤澤蘆村の三村を加恩せられしと云(新九郎康元が家今も代々五百石賜り兩番士にて新九郎と云美作守長秀が家今も其子久兵衛長忠より紀府に附られしが享保の

時御供して五千石賜ひ御側たりし石見守政定此家之與八郎の天正二年武田へ降参せしうば子孫ありし此一條の小笠原家譜大成記基業よる

秋山伯耆守敗走付寺嶋浦菴禁獄の事

遠州の國人共追々降参して御味方に属する輩多し依て神君のいよく御馬を進められ掛川城を攻給ひんと城下を放火せしめらる然りといへども今年既よ歳暮之軍の明年の春の事と爲すべしとて見附一陣を取らせ給ふかゝる所に武田が部將秋山伯耆守晴近(一本信友)信玄の命を請しにや信州より軍勢を引具し遠州を切なびけん二股邊にひりひけるが先久能の城へ使を遣ひし久能三郎左衛門宗能に一族引具し信玄へ降参すべしとすめたり宗能の先達て徳川家へ歸順したる事あれば秋山が使を返事もせず追返す伯耆守大に憤はりさらば國人どもの見懲むに久能城を攻落せとて平尾の村へ陣取して久能の城におし寄せんとす宗能も是をき鼻鬚淵といふ所へ打て出防戦せんとす神君もかくと聞召ければ奥平監物貞勝入道道文菅沼伊豆守満直同新九郎正員等を援兵として遣ひされ秋山が勢を防がしめらる然るよ敵思ひじよりも大軍にて味方散々に打ちやまさる伯耆守の勝に乗じ濱松まで追寄んず

る勢之同國乾(一本大井)の城主天野宮内右衛門景貫のかねて武田方の一味なれば是も人数を押出し秋山に力を合せて働きたり神君此時にはや濱松の城へ御馬を入給ひしが秋山伯耆守が方へ御使を以て仰遣ひされしに汝が主人信玄先に約束を定め駿州をバ信玄切ねさめ遠州をバ我等に切おさめよと送る我其盟約を守り大井川をへだて互に經略すべしと當國へ働く所に汝何ぞ主人の盟約に背き當國へ亂入するや甚だ以て無禮之早く其地を去らず事延引せば我直に出馬して一人も残さず首刎べしと仰遣ひさる其跡へ引つゞき御馬を出され御勢も追々走り出てはや秋山が陣へ討てかゝらんとする形勢を見かなむとや思ひけん早々人数を引まどひ信州伊奈口へ逃入ける(大久保物語にの駿州へ入とす)岡崎勢の一人も逃すまじと追掛けれども甲州勢の地理に熟したる事あれば捨鞭打て逃延びたり岡崎勢牙を噛今少し早うりせば秋山をば討取へき物と名残おしげに濱松城に引返す其頃又武田信玄の寺嶋浦菴といふ者を使とし相州小田原へ遣ひし北條氏康氏政父子のもとへ送りけるの今川氏真事の信玄が甥あれども昏弱にして佞奸の三浦右衛門佐が詞のみを信用し一族家人非道の政務をうとみ古老譜代の者共怨をふくみ軍卒國民虐政に苦む其上亂舞酒宴に耽り武備

を意圖する故幕下被官共みな徳川へ内通し遠州の城々多半徳川の爲に攻取らる頼て駿州を
も彼の家の所有とあらん必定期他人の爲に取られたらんよりは信玄が手に預り置べしと
存じ氏眞を追放致し然るに於て富士郡川原を境として川より東に北條家にて管領し給
ふべし川より西に信玄が所屬とし治めしべしかく約束を定る上の兩家彌親睦して互ひに
患難相救ひすべしと懇懇に申送る北條父子是を聞て大に怒り姦賊例の邪智巧言を以てわざ
むくども氏康何ぞ惡法師めが油口にたぶらかされんや其使者坊主め歸すなどて浦港を搦捕
て獄屋につなぎ置浦港が從者共は是を見せ汝等甲州に歸ていふべきに來春の氏康早々山馬
して駿州にどめあいたる甲州の將卒一々に首刎べし其用意して待べしと信玄に申せと申
合て追返せば從者どもはあぢあぢのきて早々逃去けり

正校 三河後風土記卷第十終

正校 三河後風土記卷第十一

北條武田對陣の事

北條氏康氏政父子の永祿十二年己巳正月四日五千余(一説五万)の軍勢を引其し駿州へ發向
するどて先武田信玄より使者に遣はしたる寺崎浦港を三嶋の三枚橋に礮になして信玄が
無道姪今川氏眞が家國を奪ひたる罪を鳴し其十八日に軍勢を進めて三嶋の心經寺に在陣
し先手諸軍をバ薩埵山八幡平より由井浦原迄進ましむ信玄方もかくと聞じりは山形三郎
兵衛昌景に二千五百人を屬し鞍子に砦を構へ花澤藤枝伊久美山の敵をおさへしめ江尻井上
の兩砦にも人數を加へ信玄の旗本の久能山に屯じ駿州の人質どもを彼山中に入置き今福澤
開に馬兵四十騎歩卒三百五十人添て守護せしめ先手の典原信豊を大將よて一万八千の軍勢
を興津河原に押出し北條勢と日々足輕追合せしむ(編年)されども其間に嶮岨の切所われハ
いまだ互に大合戦に至らず日數を送る頃ハ正月末つかた余寒はげしく山々の雪いまだ消や
らず濱風いたく吹立て軍勢こらへ凌ぎかねたる其様を見て信玄駿府より酒多く取よせて諸
軍にのましめければ諸軍勢是を飲て寒氣を忘れ大に悦びいさみける其醉心に氣力を得いさ



北條武田
對陣の圖



や一夜討して敵の眠を驚かせんと二千余人を合せ各其川意も山上に登り見る所北條勢の寒氣に倦かね陣營毎に焼火に寒氣を凌ぎ座眠りたる者も有り籠に集てうづくまりちいみ臥たる者も有孰も由断の有様なれば武田勢はこそ天の興へあれと悦びどつとおめき叫んで陣屋くを蹴破り弓鉄炮其外武具馬具分捕して輕くまどめて引歸す北條勢其聲に驚きすのや夜討の入たるぞ太刀よ物具よどひとめく間に寄手へかろく引取たれば北條方將卒とも余り寒さに由断して大盗人にあひたりと後悔すれど其かひあし此後の相互に夜討の用心し盡の陣より五十騎百騎つゝ出て追合のみ成しか或日武田方より跡部大炊介勝資地黃に紺筋の旗一流さつとさし上て其勢三百余人擁鎧の馬印押立乗出す北條方よりも松田尾張守憲秀(原書康秀とす誤れるに似たり)白地に山道黒く付たる旗是も一流滾風にひるめへし其勢八百余人打て出互にかけ合せ初の程の弓鉄炮にて射合打合けるが後にの雙方騎兵いりませて突合切合と見へし所武田方小勢故かけ立られ二町余り敗走す北條方松田尾張守士卒に下知し是を喰とめんと進くれハ跡部大炊介取て返さんとすれども備亂れ立て士卒足並四度路に成り返し得ず逃んとすれハ松田勢近く追うけ跡部せん方あく見へける所に武田方より馬場

美濃守氏勝二百余騎にてうけむうひひしと折敷て鎗袋を作て一面に備たり松田是を見今の是迄とぞ軍士をまねき引返す此時馬場が屬兵爲大式といふ者の紀州根來の産にて太剛の兵なれば信玄常は是を寵しけり然るに此日衆に抽て先登に進み出て松田が勢を喰留んと働しに鉄炮に腰を打たれ倒るゝを見松田勢二十騎斗り其首を取らんと馳集るを是も馬場が屬兵金丸彌右衛門かくと見るより馳寄て大身の鎗を取のへ近寄る敵七八人突倒し大貳を引立味方の陣へ歸りたり大貳甲州へ歸國の後さまくゝに療治し腰の少し引たれども勝頼時代迄ちがらへて長篠の戦も勇戦し飯寄惣兵衛と名のり討死せし此大貳にて有けるとぞかくて北條武田の九十余日對陣し四月廿八日信玄終に軍を歸し大地山をこえ甲州へ入にける北條父子の駿州へ入て今川士ども愛かしこに隠れ居たるを招き集め其外小原勢一万八千を駿州の蒲原三枚橋(今沼津といふ)興國寺善徳寺深澤新庄又豆州の戸倉泉頭山中鷹巢湯淺等の城々に籠置小田原へ歸陣せり

久野宗益等没落の事

神君の去年十二月下旬今川氏眞の籠りたる掛川城を攻給へんとあされしが歳末に迫りけれ

廿九日其城下を放火せられ御歸陣あり今永祿十二年再び掛川城を攻給のんと思召立給ひ
 正月始より八千餘騎召具せられ吉田へ押出し給ふ酒井忠次石川家成本多廣孝等を先手とあ
 ざる植村家政松平彌左衛門小栗仁右衛門是に添たり酒井正規松平清宗松平家廣加藤播磨守
 景元平岩主計頭親吉戸田因幡守松平左近菅沼新八郎等も同じ石川伯耆守本多肥後守同平八
 郎忠勝同天野三郎兵衛高力清力の御旗本より内藤信成本多重次渡邊守綱柳原彌兵衛は御
 目付たり此時法令三章を出され士卒狼藉を禁ぜられ御出陣は濱松橋陽(大三河志志瑞輪)の
 法華寺に移されける此頃武田信玄の北條父子と對陣して駿州にあり神君山岡半左衛門植村
 興左衛門を信玄が方へ御使として我等遠州へ出陣し掛川城へ手を掛以得共兼約の如く大井
 川を限りて手を出さるゝ事有べからずと仰遣はさる信玄もいかでか前約を變へべき御こゝ
 ろ置おく遠州切取給へど返答す(基業)神君是より見付の古城を崩し新に築を築きいよく
 掛川城を責んとせらる濱松城のさきに神君の御手に入しを守兵少かりし故氏真方より是を
 取て朝比奈兵衛尉に守らしむ(去年信玄へ降参したる朝比奈兵衛太夫との別人)近邊の百
 姓共徳川勢の大軍あるを見て大に恐れ老を扶け幼を襁負して三千人斗り濱松の城中へ逃來

り徳川勢掛川濱松の人を悉く撫切にせらるゝ風説なりと異口同音よわあゝきくゆけれ
 ば朝比奈兵衛尉も驚き恐れ早々手勢を引具し濱松を逃山し掛川城へと逃入ける依て神君の
 石川伯耆守天野三郎兵衛を濱松へ遣はされ百姓どもをば少しも害せらるゝ事なし心を勞す
 べうらずと觸渡さる爰よ於て百姓ども始て安堵し徳川家の仁徳を謳歌して各家々に立歸
 ければ十二日の神君御先手を桑田村に備へ後陣の曾我山に備へ小笠原與八郎久野三郎左衛
 門の天王山に備へ渡邊半藏本多作左衛門の天王山に備へたる諸軍をめぐり圍を合す其時城
 兵日根野備中守弘就弟彌次右衛門彌吉金丸山にて久野三郎左衛門が軍と合戦す(基業成績
 の原書に同じ編年此戦を十八日とす)日根野兄弟剛勇にて奮戦すれば久野が勢散々に破る
 是を見て岡崎勢救ひ來り林藤左衛門加藤孫四郎(大三河志平次)等鎧を合せ嚴しく戦ひ小林
 平太夫重直の踏破で敵の首を取る城兵日根野兄弟を始め戦ひ疲れて引退く城兵梶原平三郎
 剪綵梅花を兜の前立とし花々しく後殿して城に引入たり神君久野が敗北を大に怒らせ給ひ
 (大成記編年)十七日大軍をすゝめ御本陣を天王山に移されて掛川城に鉄炮を打ちけ攻給へ
 ば城中よりも鉄炮多く打出す内藤三左衛門信成先登し鉄炮を左の股を打れ倒るゝを見て城

兵其首取んと馳る時信成が兄彌次右衛門家長射撃の妙を得しり其敵三人射倒す三左衛門が家士岡田甚右衛門其ひまに主人を擔いで陣營に歸りたり神君御馬前の御なれば尤御感淺くらず成瀬藤八郎御使して内藤兄弟を慰勞せらる(編年)後に今川氏真の此廿日ひそりに金丸山久野三郎左衛門が一門の老臣久野八右衛門宗明が方へ密使を以て久野一族舊好を思ひ徳川方を叛き氏真方へ一味せんに明夜氏真軍勢を山し天王山の本陣に夜討すべし其時久野の一族も敵の後陣より襲ひ攻ば徳川勢を敗る事疑ふ不可も此謀の如くあらんに遠江一國を久野が一族に授け其功に報ふべしと内々や送ける久野が一族の三郎左衛門宗能が弟淡路守宗益(家忠日記基業によりて名を改む原書宗茂とす)佐渡守宗憲叔父彈正忠宗政(原書宗光)其弟采女宗常將監某日向守守政(原書佐渡守り名なし今改む)其外一族等是を聞て皆利慾に引れ義理を忘れ氏真に一味の返答す扱其事を一家の大將三郎左衛門宗能に告て其上にも諫めける徳川殿掛川の城攻給ふとも此城要害堅固にして其上今川方忠義金銀の勇士數多籠りたればたやすく攻落さるべからず夫よりの當家の一族同意して氏真の命に應じ夜討の働し其功を以て氏真より遠州一圓賜らば家を興し先祖への孝且に子孫への榮

花を殖すべく此事よく御思慮あるべきにこそやける宗能聞て各が諫言一理なきにあらざ然れ共宗能去年一族を引具し徳川殿に歸順せし後恩を蒙る事頗る厚し今故なく其恩を捨て利の爲に義に叛き裏切せん事勇士の本意にあらざる其上氏真が有様を見るに讒を信じ佞を愛し昏愚の愚將行末頼母しからず面々にも不義の謀計思ひ止るべしといひて其手所を不用其翌廿一日に氏真重ねて河井與四郎を使として久野が一族彌同意せらるに於て明夜城より勢を出すべしかまへて裏切すべき旨や越たりよつて淡路守佐渡守彈正采女將監等皆氏真に同意し宗能を討て一族みち氏真に一味し明夜裏切せんと評議を決したり八右衛門宗明のいつれにも宗能の一門の物領主將之然るに一門等宗能を伐ん事なげりのしく思ひ此事を宗能に告しり(原書に八右衛門の氏真に一味せしを佐渡守本間十右衛門が宗能に告たりとあるす誤れり今の御年譜家忠日記基業編年によりてあらむ)宗能大に驚き本間十右衛門長季を使とし内々此仔細を神君御陣に告奉る神君大に御感有て菅沼新八郎定盛松平與一郎忠正植村山羽守家政三宅惣右衛門康貞を加勢に遣はされ又榊原小平太康政にも宗能に力を添て反逆者一族等を誅すべしと命せらるよつて康政并宗能の金丸山の本丸に籠り其

外加勢の四將の二丸に籠りたり此時淡路守采女將監の大手にむかひ佐渡守彈正の擲手より
 攻寄たり城中に思ひ設けたる事あれば矢炮多く透間なく射山し打出したる程に寄手攻め
 ぐみたる折うら二丸に籠りたる加勢の輩手分して敵の後へ廻り徳川勢後詰するとあめき叫
 て突てかゝる本丸二丸に籠りし輩も門を開て切て出れば寄手散々に敗北す遂に淡路守の生
 捕と成り腹を切らせらる(家忠日記大久保物語)其夜一族家人五十余人討取れ彈正采女將監
 等の追拂ゆる佐渡守の行衛あく落失けりこの日榑原康政手を碎きて奮戦し中根善次郎遠藤
 八右衛門篠嶋才藏竹内太郎左衛門竹尾平十郎等の従士多く功をばげまして各高名せしと
 ぞ(編年)

天王山夜討付掛川城攻の事

今川氏眞の久能一族裏切の事を領掌しけるを以て大に悦び然らば今夜天王山徳川殿の本陣
 に夜討をうけ大勝すべしと殊更勇猛の輩を撰み其川意をぞ仕たりけるこれ久野一族等既に
 誅に伏したる事掛川城中に會て知らざりし故之神君より久野三郎左衛門宗能が一族の隠
 謀を訴ふるとして今川より今夜御本陣へ夜討せんと計策を設るよし申上げるよつて城兵の打

て出る道三所より大久保七郎右衛門忠世水野惣兵衛忠重大須賀五郎左衛門康高三人を將とし
 て伏兵を置ける(原書忠世を次郎右衛門忠佐とす大成記家忠日記にて改む成績基業より
 本多豊後守松井左近を加ふ)頃永祿十二年正月廿二日の夜今川方究竟の勇士共天王山の
 御本陣を志してのさくど来る所を一の伏をやり過し二の伏の前を半過三の伏着前に来る
 とき大須賀康高俄に関を作り討てりれば三の伏兵あまじく起り前後より引包んで討てか
 こむ城兵大に驚くといへども殊更撰み出されたる驍勇の者共あれば少しも氣を屈せず奮戦
 す高天神衆坂部又十郎正家質助太夫正重其外驚山渡邊久世門奈等別て粉骨を振ふ此時松井
 左近忠次の御本陣に有しがこゝに馳來り味方を扶けて勇をばげます此戦夜の巳の刻より始
 りしが城兵ども手強く争ふ間に夜のほとと明にけり廿三日明方に神君も味方を救ひせ
 給いんとて山家三方衆を先手となされ八幡山を過て此所迄御出馬あり長篠の城主菅沼左衛
 門尉貞景先登に進み討死す同美濃守の讃井善右衛門と鎧を合せ貞景郎等河井筑後勇をふる
 ひ其外御旗本勢力戦すれば城兵ども耐へ兼天王小路より引取んとす内藤四郎左衛門正成渡
 邊半藏守綱服部半藏正成等城兵に追番ひ付入にせんとすい大久保治右衛門忠佐同新十郎

忠隣小坂新助等の乾堀を越へて三丸の喰違まで攻込む城兵日根野備中守弘就同彌次右衛門
 同彌吉等勇をはげまし命をおしまず奮戦すれば味方にも林藤右衛門加藤孫次郎(大三河志
 孫平次)松下新助等討死す松井左近忠次が家人岡田竹右衛門元次石川新兵衛都筑助大夫左
 右田與平等の日根野兄弟と鎗を合せ松下源太郎清景淺原八藏も高名せり其外水野忠重の城
 兵大屋七十郎伊藤武兵衛を討取る武兵衛が首をば棕原治右衛門に取らせ水野太郎作の日根
 野彌吉を討取る大久保治右衛門忠佐の近松丹波と詞をわかし丹波を討取る其後も忠佐敵を
 突伏て姪忠隣に其首を取れといふ忠隣今年十七歳これ我が功にわらずとて自身別の敵を討
 て首をとるかて城南の松尾口北の太鼓門まで攻入しつゝも城兵透を見て城に入て門を閉
 て出されば寄手詮方あく矢を納め軍を班しけり(内藤四郎左衛門此時の戦功を御稱美あり
 しうば今日の功名の某を始め皆ひへ首にいとやたりとぞ此事大久保記に見ゆ)

掛川城邊設し砦付濱名氣賀都筑諸城の事

正月廿五日に神君八馬の勞を休め給へんためにまばら見附に御歸陣ありよつて所々の
 砦警衛を命ぜらる河田村の砦の岡崎の諸士に守らしめ笠町の砦の與平美作守貞能菅沼新九

郎正貞(左衛門貞景子)曾我山の砦の小笠原與八郎長善岡津村久野の砦の久野三郎左衛門宗
 能に守らせらる(成續基業の二月の事とす編年原書にもなし)神君此時山本帶刀成行(編年
 成氏)を召て見附宿の東の山ついきの舊壘を崩し鎌田原に新城を築くべしと命ぜらる此頃
 迄遠州に濱名肥前守頼廣後藤佐渡守氣賀の新田友作容輪三郎兵衛等のいまだ徳川家の御下
 知に不應然るも神君御威勢日を追て盛にならせ給へば濱名後藤并福井修理等降参せんとて
 見附の御本陣も参けるが御陣前にて下馬せざる故神君御氣色損じ鉄炮を以て後藤を打殺さ
 せ給へば濱名肥前守大よ恐れ其子與兵衛と同じく甲州へ逃行て信玄を頼みけれども信玄是
 を用ひされば江州へ落て塾居す肥前守が伯父大屋安藝政頼弟金太夫頼次等一族濱名の城に
 籠り一戦せんとす神君此由聞召本多平八郎戸田三郎左衛門を遣はされ濱名都筑兩城の要害
 を窺はせられしに其城堅固にて急に攻抜がたうるべしとや依て其二月城兵等降参せば其罪
 を赦し本領賜へらんと諭されしうば城兵皆々降参す此輩の本多平八郎戸田三郎右衛門兩人
 に屬せらる此時後藤覺兵衛も戸田も屬じたり又後藤佐渡守が日比澤の城兵も降参し氣賀の
 新田友作の城を捨て落して跡もなし容輪村の容輪三郎兵衛の久野三郎左衛門本間五郎

兵衛(十右衛門少事)に攻られ自殺して此城も落たり(山本帶刀鎌田城築く事命ぜらるゝより此一條の始末原書にハ見へず今の編年基業によりて補入したり)

掛川城再攻の事

神君人馬を休られて三月四日再度掛川城を攻給へんとて見附より御出馬あり五日本多平八郎忠勝松平主殿助伊忠を先手として攻寄給ふ(編年今日先手松井甚太郎松井左近となす基業成績の原書に同じ)既に大手の南町口を攻破り二の門に至る此所に寒大寺川といふ大河あり此頃春雨日數を重ね降つゝきたれば水うさまさり掛買南といふ邊平日の歩行渡りの所あれども水深くして寄手大よみやみたり搦手の水野惣兵衛忠重西町口より攻入松尾池を隔て互に矢炮を飛ばせ挑み戦ふ又一手の東口より攻入不動山を右に見て天王小路より押寄せたり北嶮口の一方の城兵の心を一致させまじき爲に態と開てかこます城中よりの朝比奈備中守泰能三浦監物秀盛天王小路に打出て烈しく防戦す此時松平主殿助家士石原十助城兵を射けるに其城兵射られていまだ鞍を離れず十助又射て遂に射落したり城中の將卒ども其矢繼早なるを感じ其矢を金の團扇にのせて主殿助が陣へ送りけり七日にハ辰の刻より朝比奈

備中守三浦監物天王小路に打て出菅沼帶刀伊藤治部少輔同掃部介同左近左衛門小笠原七郎兵衛濹谷右馬允朝比奈小隼人同小三郎笠原出羽守等の西宿より打て出今日の歩兵にハ目もけらず大將分の者を討取らんと奮戦す敵味方互に勇を争ふ本多平八郎柳原小平太須賀五郎右衛門大久保七郎右衛門大久保治右衛門みづから鎗をふるつて眞先にすゝめば味方の輩進み勇んで突戦す菅沼三九郎の笠原七郎兵衛を討取高橋傳七郎の朝比奈小三郎泰秀を討取松下加兵衛之綱の菅沼帶刀を討取本多三彌の(一向亂の時立退しが此時御先手に加へる)新谷小助を討取高力與左衛門清長の粟飯原平左衛門を討取中山是非之助(小笠原與八郎臣)の伊藤左近元實を討取散木某の山崎市兵衛を討取小林勝之助重直も首級を得たり今川家十八人衆と名を顯はしたる朝比奈小隼人伊藤治部同掃部を始め究竟の輩三十八人雜兵百八十八人討取味方よも中根傳四郎正重本間五郎兵衛長季加藤市十郎正重本多康重が家士畔柳又次郎を始め六十餘人討死せり又本多彦次郎康重時に十六歳其家士本多左馬助吉見孫八郎與平家士名倉五郎作菅沼新八郎家士菅沼彌太郎今泉新助同孫三郎何久左衛門皆戦功をばげます柳原家士安松彌之助菅沼が家士彦阪小作御旗本にハ小林傳四郎吉勝射藝を施し彌之助ハ此功

により矢之助と名を賜ひたる小笠原喜三郎貞慶菅沼藤藏定政も戦功ありされども朝比奈備中守笠原出羽守の猶も勇をふるひ残兵をまどひて城より引取る榊原康政の一二の丸まで攻入松平與一郎忠正の旗馬印を堀際に押立諸手竹把を付寄て今のはや城を乗取かと思ふ所に御本陣より急に諸手引取るべき旨命せらる依て與一郎忠正後殿して早々諸手の人数引返す是の今川與力の者も徒黨して船に乗て當城後詰せんと掛塚の港へ着岸するよし注進有るがゆへ之榊原大須賀并鳥居彦右衛門元忠を掛塚に馳向かひしむ彼今川方與力の者共の是を聞て早々船に取乗り逃んとする所を御目付に参りし渡邊半藏守綱かけつけて船に乗んとする所を敵七人迄突倒す大須賀康高が屬兵寛助太夫久世三四郎坂部又十郎榊原康政が屬兵清水久三郎伊藤藤助も走り來り首級級を得る敵散々に打負て残兵やうく船に乗て逃失けり(編年記に此兩日の戦を四五日とす基業成續の原書に同じく五七日とす)

神君御班軍付堀江堀川兩落城の事

掛川城に今川家宗徒の勇士五日七日の兩戦に大勢討死し兵糧も追々乏しくなれば徳川家と和睦し北條を頼み氏真小田原へ落行時節を見て恢復の功を計り然るべきりと評議するよ

し神君聞召さらば此地に押の勢を残り置きまばらく岡崎へ歸城して人馬の勞を休むべしとて數ヶ所よ砦を命せらるまづ金丸山の砦を築手の奥平貞能田峯の菅沼刑部貞吉長篠の菅沼新九郎正貞に守らしめ河田村の砦を酒井忠次に守らしめ小笠原山(大三河志高天神)の砦の小笠原與八郎長善久野に久野宗能を備しめ懇切に守衛の命令を施され既に御歸陣にともむらせ給ふ此時去年三月遠州堀川の城にて攻落されし大澤左衛門基胤が屬將尾藤主膳(一本彦四郎)村山修理(一本山村)また村田(氣賀)の一揆西光院寶諸寺桂昌院をはじめ給人百姓と稱する内山黨其外寺社地下人男女千五六百人堀川の舊壘を取立て立籠り徳川家の御歸路を遮り討奉んとす神君此事のさらにもろしめされず近習十七騎歩卒二百三十人斗にて此道にかへり給ふ一揆どもは是を見たれども御勢余りに少勢されば徳川家の御通行の思ひもよらず打過て其跡より石川伯耆守政正が百騎斗まで後陣を打て通りかへるを見て初て心附切の先に通行ありし少勢こそ徳川殿にて有ける物と後悔せしとぞ神君岡崎御歸城の後此事聞召さらば急に征伐すべしと諸軍に令せらる(編年記に渡邊圖書旨同が謀を用ひ給ひ御先へ少勢にて御通行古美村より船にて濱松へ引取給ふとあり)此頃大澤左衛門佐基胤(關

白道長四代中務大輔基頼が子持明院左京大夫通朝が十代左衛門佐基久遠州に住し丹波の犬
 澤を領す今の基胤の基久より九代之ふたゞび今川に一味し遠州敷智郡堀江の城に籠り中
 安兵部定安權田織部泰長等とあなご敵の色を顯ひしければ三月廿五日これをば井伊谷三
 人衆近藤石見守康用其子登之助秀用鈴木三郎大夫重吉菅沼次郎右衛門忠久野田の菅沼新八
 郎定盈等よ命じて討手に向ひしめらる神君の堀川の一揆を攻給いと同日廿七日堀川へ押
 寄せらる山の後平松崎といふ所に御旗を立ちらる(此所御殿松とて古木今も存といふ)抑此
 城の海濱にして潮満れば船よて出入するといへども潮退きて干瀉とされれば巖巖峭壁にて陸
 地只一面あれは攻寄るに便を得たり此城只今攻落さず其間に潮來るべきぞ平攻に攻落せと
 御旗本勢攻寄たり其中に小林平大夫重直廿五歳其弟勝之助正次平井甚三郎大久保勘十郎廿
 三歳永見新右衛門爲重先登し小林平大夫重直廿五歳平井永見皆討死せり(大成記等諸書小
 林平井永見等去年三月堀川城攻の時に戦死とするの誤なり)大久保勘十郎の深手負歸陣し
 諸士の戦功を見届て味方の輩に物語して落命せしかば將卒とも甚だ是ををこしみける榊原康
 政勇をふるひ深手ニケ所負ながら益進んで攻戦ふ其外森川金右衛門氏俊始め大勢一面に

攻入て城を乗取城兵百八人が首を討其餘烏合の一揆七百人の寛仁の御沙汰にて悉く殺し
 給ふ此日味方にも究竟の輩十六騎討死せり又堀江城の井伊谷三人衆野田の菅沼定盈押寄て
 攻けるが鈴木三郎大夫重吉討死す其後日數をかさね攻かこまれしが四月十二日城中へ御使
 を立られ大澤事の氏真が被官家人にもわらず然るに舊好を忘れず只今衰運の今川の爲に籠
 城日をして苦戦する其義烈尤も感ずる所なり志かりといへども今遠州一圓我手に入て掛川
 も和睦と今の速かに天意人望に應じ降参あるべし本領相違わらじと仰遣ひさるれば大澤が
 主従何れも仰に従ふ依て御誓紙を下されしうへ大澤始め中安兵部權田織部も皆降参す此時
 中安權田兩人の御家人に召出さる(基業編年)

今川氏真出掛川赴小田原事

掛川城中よての朝比奈備中守泰能小倉内藏助資久等とりて評議し是迄の今川舊好の衆馳
 集り堅固に當城を持ちためけれども今の遠州一圓に徳川殿に歸服す當城の兵糧次第に盡て
 飢に望むかくての永く籠城かき難し氏真は小田原に避給ひ北條を頼まれ開運の時節を討
 られ然るべしと評議一決すされども氏真の疑念深くいまだ決定あかりしを小倉内藏助種々

に諫言す折から奥平美作守貞能も神君を諫め氏眞を赦し御和睦有て早く遠州を平均し給ふべしと申に神君元より御同意之其時今川方朝比奈彌太郎泰勝(子孫今水府に仕ふ)使として石川家成酒井正親か方迄和睦を申請(基業)奥平貞能久野宗能淺系主殿助と和睦を相計り四月八日主殿助御使として城中に入て小倉内藏助に對面し仰の旨を傳へたるの家康幼年より今川義元の扶助得たる舊好の今に於ていかで忘れんや氏眞を敵とする心なし如何せん氏眞讒佞を信用し我を仇とし謀盾に及ばるゆへ止事を得ず合戦に及ぶと雖も更に本意にわらず只今のときよ於ての遠州をも終に駿州と同じく武田信玄に奪へるべし速かに駿州を我に避て渡されなば我又北條父子と相計り氏眞を駿州へ遷住させやべしと仰送らる内藏助大に悦び氏眞をいさめ内藏助氏眞の使として雙方誓詞取かわせ御和睦整ひしかば内藏助又小田原へ赴き北條父子へ此由を告るよつて北條より北條助五郎氏規(後に美濃守)を氏眞の迎として掛川へ遣はす氏眞五月六日掛川を出て掛塚の浦より船にて小田原へ赴けし神君よりも松平紀伊守家忠をして送らしめられ海路を守護させ給へば恙なく豆州戸倉に着岸す今川北條の者共も徳川殿の情有る大將哉と感じける是より掛川城の酒井左衛門尉石川伯耆

守本多作左衛門請取て守衛せしが同月廿二日神君掛川に入給ひ軍士を發應せられ當城を石川日向守家成に賜りぬ是より以前一圓御手に屬しける時三河の國人と二組に分て酒井左衛門尉と此家成兩人に屬せられ兩人左右の旗頭と定られしが家成當城賜りし後の旗頭をの甥の伯耆守數正に譲り其身の久保大須賀松井と同く遊軍となり本多廣孝本多忠勝鳥居元忠神原康政等の御旗本を警衛す(今川と御和睦の事大成記に今川より朝比奈彌太郎泰勝使として申越たりと有り其業にも同じ事之家忠日記に徳川家より御使を小倉資久へ遣はされたりとあり本文兩番を合せ意を迎へてつゞりしなり)此頃石川に屬する西三河の松平源次郎眞乘松平宮内忠直内藤彌次右衛門家長平岩七之助親吉鈴木喜三郎重時鈴木越中守重愛酒井に屬する東三河の松平右京亮親盛松平内膳家清松平源七郎康忠松平立蕃頭清宗松平又七郎家信松平彌九郎景忠設樂甚三郎貞通菅沼新八郎定盈西郷新太郎家員松平丹波守康長奥平美作守貞能牧野新次郎康成(基業に石川が紐に酒井正親鳥井平藏松平三藏松平信一を加ふ孰れが是なるを知らず依て兩説を備ふ)此輩また石川伯耆守が弟半三郎の猛勇の士之ければ先に攻落されたる堀川を下され其地に土着して土人を主宰せしめ給ふよりて

氣賀の徒屏息して大に恐れ此後一揆をおこす者あり(基業編年)

山縣三郎兵衛昌景復讐并天方飯田落城の事

永祿十二年五月下旬に遠州一圓神君に歸順したり兼大井川を限り西の悉く御領とせらるべき旨武田信玄との堅く盟約有し事なれば御領境を御巡見のためあつかに御供五六百騎を召具せられ榛原郡に赴かせ給ふ其時信玄が侍士大將山縣三郎兵衛昌景も三千餘騎を具して駿府より此邊より金谷にてはしなく行違ひたり昌景禮をなして其所を過んどせしが神君御供の少きを見て喧嘩に事をよせ忽ち討てかゝらんとす是の内信玄が密旨を受て兼虎狼の心をさしはさみける故之神君此跡御覽有りて山縣が味方の小勢あるを見て時節よしと思ひ兼ての約を變じ俄に備を立直し味方を襲ひ討んとす去年も秋山伯耆守約を背き我國境を犯んどせしも今日も山縣が狼藉めたく信玄が偽謀疑ひあり然れども味方の機の小勢じかる地の理を得ず少し引退き地利に據て戦ふべしとて兵を五六町引退け險路に備て待かけ給ふ山縣の徳川勢進ると思ひ勝に乘り透間なく追かくる所に本多平八郎忠勝一番に小返して奮戦す其手に屬する三浦竹藏原田彌之助櫻井庄之助梶金平柴田五郎右衛門大原作之

右衛門木村三七渡邊半兵衛多門越中荒川甚太郎本多甚六河合又五郎同じく進んで鎗を入るゝ二番に大須賀五郎左衛門康高柳原小平太康政鯉貝一手になつて鎗を揮て決戦す兩將の手に屬する坂部又十郎寛龍之助久世三四郎寛助太夫渥美源五郎伊東雁助清永久三郎鈴木角太夫加藤平次郎おとらじと争ひすゝめば三番に大久保七郎右衛門忠世弟治右衛門忠佐又御旗本よりの渡邊半藏服部半藏菅沼新八郎石川又四郎馳出く鎗を合せ敵七八騎忽に突倒せば昌景此軍利あるべからずと知て早々人数をまどめ駿府をさして逃去ける(原書此事を元龜元年十月とするのみに大に誤れり今大成記による)神君秋山山縣等狼藉の全く信玄が姦謀ありとしりしめされ是より永く信玄とのよしみを絶給へり信玄も此頃世上にて信玄姦謀を誹りければ信玄是を愛ひ一旦山縣を塾居せしめ其後程なく馬場小山田等愁訴するると山縣をゆるしたり是皆信玄作謀の致す所之越後謙信も是を聞て今度信玄徳川殿と盟約を變じ山縣を以て其慮に乘じ討んと計りし事の武田家の瑕瑾なりと評しけり(原書此事を元龜元年十月とするの誤なり大成記基業等み今年五月の事とすよつて今こゝにあらたむ)信玄の此後じやく掛川へ手を掛んと計るよし聞へければ石川日向守家成が堀松平玄番頭清宗を援兵

として加へられ松平紀伊守家忠の馬伏塚に備へて甲州勢を防ぐべしと命せられ此後松平左近太夫貞乗を掛川に加勢として遣はされ立藩頭清宗の新坂の鹽井原の砦を守らせ給ふに清宗じつと甲州勢を防ぎ功有りしかば遠州三張菅谷龜甲の三村を加恩せらる(編年)六月十九日遠州周智郡天方の城主山内(編年天方)山城守通綱を攻らるべしと御出勢あり通綱遠州に有奇からいまだ歸順せざるが故なり先陣は柳原小平太康政勇をふるつて速に郭門を攻破り二丸に押入らんとしけるを天野三郎兵衛康景大久保新十郎忠隣力を盡し攻戦ひ高名し康景の深手をあふ山城守防戦叶はず降参す神君是をゆるし給ひ軍勢を進められ同郡飯田の城を攻かこみ給ふ此城の主將山内大和守防戦して極きしかどもこゝにても柳原康政大須賀康高先登し屬兵寛助太夫久世三四郎坂部又十郎伊東雁助清水久三郎等各先を争ひ山内大和守も必死と志ざして打て山決戦しけるが終に寄手に取込まれて主従残らず討死し此城も忽ちに落たりけり

按るに應仁以來諸國割據の英雄豪傑少ならず其中にも越後の謙信甲斐の信玄の二人殊更胸に韬略を明らかめ手に常蛇を制す兵を用ひ陣を布き城を攻敵を討る悉く孫吳

に機をおなじくせずと言事なし天下後世規則として是を仰く事泰山北斗の如く然るに信玄がなす所は既に父を追て國を奪ひ姪を倒して地をかすむ天倫の道絶たれば隣國の盟約を背く如きの論するに足らずされども今度盟約いまだ數月を経ずして山縣に密に計畧をふくめ我兵寡きをうかいひ襲ひ討んとはかりし偽作姦邪ものづから國をいひ傳へ是より大に人望を失ひしと聞へしのみありぬべき事

駿府營作付河鳴嶋洪水武田勢敗走の事

此頃までも山縣三郎兵衛昌景の武田信玄の命を守り駿府の燒跡は假に柵を附て舍宅を營み守りたり神君駿州に打入て府城に押寄給へど山縣昌景縋の柵のみよて防戦かなふべからざるを知て城を捨て甲州へ逃歸る神君に小倉内藏助を以て北條氏康父子へ信玄どの永くよしとを絶給ふよしを仰遣はされ夫より氏康父子と牒し合せ今川氏真を駿府へ歸住させ給ひん懇切に沙汰せらるされども駿府の城郭先に信玄がために燒亡せられ住居すべき所なかりければ氏真戸倉の城に在て小倉内藏助森川日向に命じ城郭を修築せしむ其功半成就しければ先岡部次郎右衛門正綱其弟治部右衛門安部大藏元真(編年に是を當家の岡部大藏定吉

と顯したるは尤も誤あり)等よ守らせ専ら作事を營まじむ(大成記家忠日記)武田信玄のこの事を聞て大に憤ほり一万八千の軍勢を催し再び駿府を奪ひ取んとて六月十二日(編年二日)甲府を打立富士山中の全王通り大宮に出て神田屋敷蒲原善福寺三枚橋奥國寺等の城々への押勢を残り一万二千の人数にて基山口迄押入十七日には三島の社内を侵し其近邊を放火し夫より人数を進て河鳴島に陣せんとす原軍人の此所にて水害わらんうとて諫しうども信玄更に是を用ひず河鳴島に陣を取る北條氏康もうくと聞て三方七千余兵を引卒して出馬し信玄に對陣し互に兵機を見つころひ軍のいまだ始まらず然る所其十九日夕方より雨降出し、夕夜に入て後大風烈しく雨のいよく篠をつくが如し甲州勢の雨草紙紙桐油等にて陣屋をかこまんとする間に風のいど烈しくあり雨のなほ車軸を流し木筋末筋どもに一度に吹消したり目さしも知らぬ暗夜に燈付竹取出と燈火を立んとすれども陣屋くの間の野原故風吹入て燈火うつらずとやかくと苦辛してやうく陣屋を圍たれば子刻斗りに成ぬ將卒ども疲れ果て甲冑を枕としまばと休息すまじして歩卒ども宵の普請に勞疲して解けて前後も知らず臥居たり此時北條方蒲原奥國寺三枚橋の城々より信玄が旗本へ入置たる忍びの者共

ひそりに陣々の馬の絆綱を切て捨棄々驟し合せし事なれば其城々より究竟の勇士三百余人其頃の世上稀なる雨松明(一本水松明に作る)といふ物を手々に持筒の火よて吹付陣屋に火をうけ三方より陣の聲をおぐる甲州勢此聲に驚きすや夜討の入たるぞ一人も泄すなどいへども既に洪水押來り陣營の皆水になる弓よ鉄炮長刀よとひとめげども箭火燈火も皆消て暗さのくらし兵具の置所もわうらす敵味方わきまへうねて同士討するぞと呼わめき取あづめんとする所に河よりのまきりに洪水漲り出て陣屋くんに流れ入て暫時の程に腰丈まで浸りたれば諸將卒どもにわいてふためき高き所へ登らんと騒ぎ立て陣々に有所の弓鉄炮鎗長刀武器馬具旌旗兵糧迄津波に取られ押流し諸將卒逆巻く水を凌ぎ漸くと奥國寺の崖へおしのぼる退き後れて水に溺死する者も若干之信玄暫時も滞留する事を得ず早に大宮まで引退きもと來し道を経て甲州へ歸陣せりよくく狼狽せしにや有けん武田重代の家寶八幡大菩薩の旗を取落し北條方へ拾ひ取られたり北條氏康の蒲原城に善徳寺曲輪といふ大郭を築き其外大宮神田屋鋪奥國寺三枚橋戸倉隼山新庄山中深澤鷹巢獅子濱等の城寨に援兵三万余人配分して籠置其身の小田原へ歸陣すかくて北條方にての流石の信玄此度のよくく狼狽

せしと見へ重代の旗指物を取落したりと嘲りしを信玄方にて重代の重器たりとも津波の爲に流しけるの何ぞ恥とせん津波に流れし兵具を拾ひ取て夫を武功手柄の如く高言するの笑止まよ旗がほしく何程も製作して授くべし武客の優劣の戦場の勝負にあり天機を頼み物拾ふを武功と思ふ淺ましきよと誹謗せり北條方又是を聞て信玄例の巧言曲辭を以て其過誤を飾る事こそ片腹いたけれ去る永祿六年二月上州箕輪の城攻に信玄が家人大熊備前おのれが指物を敵に取られしを恥て敵中に馳入て其の指物を取返したる時信玄大に感心無雙の高名比類あしと感状をあたへ其時より取立て騎馬三十騎足輕七十五人預けたりと聞へしが家人か指物を敵にとられしを恥て取返したるを賞美し其家重代の重寶八幡大菩薩の旗の敵が取ても恥ならずといひ大熊に授けし感状今より後の反古と成る信玄が虚偽さらに證とすべからずと雙方嘲り罵りてやまず其頃老練の人と是を聞て信玄洪水の爲に重代の重寶を流し敵に拾われし天機なれば信玄が罪にわらず河鳴島の卑濕の地にて水害あるべしと原隼人の諫しを用ひず其地に屯して此難に逢しこそ一方ならぬ不覺されと誹謗しけるとこ

大樹寺御條目付久野宗能加恩の事

神君大樹寺の御代々の御廟地たるを以て今度改めて御條目をあし下さる

定

- 一 於寺中并門前不可致殺生一事
 - 一 爲不入の地一間雖有罪科の輩一號奉行入檢斷狼儀不可有之於有高利之族者自寺家可有追討一事
 - 一 國中の諸士等不倫貴賤於惣門可下馬一事
- 右條々於違犯の輩者可加成敗もの也仍如レ件

永祿十二年己巳六月廿五日

家 御判

大樹寺登譽上人(これ大樹寺十三世之)

久野三郎左衛門宗能の此正月掛川城攻の時今川氏眞よかたらわれ其一族家人共皆裏切せんとはかりたる時宗能一人同意せず御加勢を待受て叛逆の一族家人討亡して忠義をばげみ戦功多かりしかば其忠勳を賞せられ一族等が没人の地を加恩として賜へる其の時下されし御書にいふ

宛行同名淡路守同彈正并采女佐知行の事

右此度彼三人雖令逆意宗能無別義旨太以忠節也然間為其賞彼跡職知行等一圓出置以永久不可有相違若同心者共於有無沙汰如存分可被付以重彼同心者雖訴訟不可許容者也仍如件

永祿十二年己巳八月廿八日

家御判

久野三郎左衛門殿

武田北條三増峠軍付蒲原落城の事

武田信玄ハ此正月より四月まで蒲原にて永々北條氏康と對陣しまた六月も川鳴嶋まで出陣し洪水に逢て逃歸り本意を達せざれば九月下旬かさねて甲斐信濃上野の人数を催し相州小田原の城下迄押寄せ猛威をふるひ十月六日小田原を引拂ひ歸國せんとて同月八日同國三増峠に軍を班す所(原書に信玄小田原に攻入し事あく武州瀧山の城を攻て其歸路とし其上日月をじるさす今翁物語并編年によりあらたむ)北條陸奥守氏輝秩父新太郎氏邦北條上總介綱成等に信玄が歸路をさへざり討留んと謀し合せ三増峠をめぐり峯に陣取りて待掛たり

り武田勢には思ひもよらず敵愛にもありと驚き急に備を立直せば武田方先手の部將淺利式部重信音真先に乘出し二散に斷破らんとする所に鉄炮に胸板を打れ馬より眞逆さまに落る北條勢勝に乗じ打てかゝる其時曾根内匠助昌世(翁物語に曾根の淺利が陣中の檢斷なりと云)しつまりかへつて軍伍を整へ北條方の二千騎とかけ合せていどみ戦ふ是を見て馬場美濃守氏勝も備を直し打てかゝる北條方内藤大和守七ヶ所迄湖手負て引返す山縣三郎兵衛小幡上野介も六千餘騎にて北條方の後へまゝり関の聲を揚て突てかゝる元來小勢の北條方前後より攻付られ死傷する者少あからず大敗北して逃散たり信玄は負べき軍に打勝て禍ひを轉じて禍ひどあし凱歌を唱へて歸陣す北條方の輩は無謀の軍を催し大敗せしかば信玄の猛威又恐れ氏康の命を受て駿州所々の城塞を守る諸將士悉く其所を棄て小田原へ逃歸る信玄ハ北條方の守將共各城塞を棄て歸國せる由を聞て其慮をはかり十一月の始又大軍を引具し駿豆相三ヶ國の境に兵を山せば北條常陸介氏忠同左衛門太夫氏勝芳賀伯耆守正綱松田次郎等皆各城塞を棄て小田原へ逃歸る信玄九ヶ所の城塞を乗取て新庄湯澤足柄山中の寨を破却し深澤の城に駒井右京昌直を置て守らしめ是より駿府を襲ひ奪へんとて先蒲原の城よ

取詰たり(編年)此所の守將の早雲入道長氏が二男幼菴が三男新三郎氏時(原書綱重と有令
 基業成績による)兄喜太郎氏盛小田原にあり弟兵部少輔氏定の興國寺の城に有氏時一人
 に有て守りけるが我の氏康が爲にの従弟之(原書氏時が父幼菴を氏綱の子にて氏康の弟と
 し氏時も氏康が甥とするの誤なり)恥を知らん人々の我と同じく城を枕に討死すべしと堅
 固に約束し籠城の用意をなす信玄此城を伺ひ見て此城中へ力攻にの攻がたうるべし扱ひ
 を用ひて請取べしと計策をめぐらし小宮山内膳原勘四郎を使とし城中へ入ける頃日新
 庄足柄湯澤を始め九ヶ所の城々皆逃去て信玄が手に入しよ氏時一人残り留り此一城を持固
 めらるゝ剛勇感ずるに餘りあり然れども小田原より後詰の頼みもなき此孤城に辛苦してあ
 たら命を落されん事詮なきに似たり早く此城を信玄に譲り將卒共に後業を期せらるべきや
 といわせけり氏時其使者に對面し我父幼菴の早雲の三男氏綱が弟我父幼菴が三男あれば氏
 康父子の爲にの正しき一門親族の歴々として此年頃關八州の武士の爲にうしづくれ榮華に
 ほこる身あれば始終氏康父子が爲に患苦をともせざる事を得ず然れば運を天にまうせ當
 城を枕とし尸を晒ん事と存すれば武田の家風のいざ知らず北條が一門親族に於ての危き

にのぞみ義を捨て敵へ降参する事の五尺の童子も恥る所之兩使無用の遊説せんよりの早く
 信玄に常城を攻取て氏時が死首に對面せられよとやさるべしといし信玄兩使を差越さるべ
 の城中要害の險夷人類の多少を探索の爲なるべしとて城中の將卒共の兩使の首を刎て門外
 へかけよとすゝむるといへども氏時に於ての更には是を憂とせず兩使能々城内の形勢を伺ひ
 見て氏時が少條詳細に信玄に申達せらるべしとや渡し其後家人を差添て兩使に城内逐一見
 せしめ城内を送り出しける使者の立歸りかくとやせし信玄も氏時が剛勇の詞に感じ然らば
 此城いよく力攻に落さん事かあふべからず我又別に計らふ術ありとて夫が陣中へ令し此
 城を巻つくと明日の當地を引拂ひ直に駿府へち通らん城兵出て戦いんとするともかまへ
 て戦ふ可らず只々軽く引取べしとて觸渡す城内より武田が陣中へ入置たる忍びの者ども是
 を聞て城中へ注進すれば城内にての氏時始め將卒共是を聞て打寄評議をこらしける其中に
 狩野新八進み出で信玄明日人数を引取あらは濃須賀を越ん頃城中より打て出跡を慕ひ戦ふ
 べし然らば味方勝利うたがひなきといふ氏時は同意し信玄旗本と先手の間を取切て戦を
 仕掛る物あらば甲州勢の途を失ひ大宮筋より甲州へ引入んとすべし其時薩埵山に於て甲州

方先陣と戦ひ、先手の旗本とかげ離れ力を失ひ亂れ立ん其時味方押まどひ一人も潰さず討取へしと其用意手配既に定りたり。信玄の胸中に謀略をめぐらし其夜城をば巻つくも六日早朝に人数をまどひ由比倉澤を押し通る。其先陣の小山田備中守昌重が一隊旗本より少し進んで濱須賀邊にかゝる時城中に北條新三郎氏時狩野新八等銳兵すくつて二千八百餘人留守に病者足弱き輩二百人斗を残りて打て出信玄が旗本と先手の間を取切て戦を始めける。暫時が程の互に矢砲を飛せて迫合しが無程鎗をふるひ散々に相戦ふ其時城中に敵方へ内通の者有しかば、武田四郎勝頼が一隊の城の後の道場山より善徳寺曲輪へ乗入其一番の落合市之丞初鹿野傳右衛門本丸へ小搦六右衛門入澤五右衛門常盤方右衛門大石四方之助佐澤郷右衛門駿州の先方岡部忠兵衛が一隊関をつくりて亂入す城兵も打出て防んどの思へども勇銳の輩の皆氏時にしたがひ城外にあり城より病人老幼の足弱計ゆへ防ぐべき様もなく散々に逃散りて城のあへなく乗取らる。氏時も新八も是をかへり見敵の計畧にかけられぬる口もしきよ即時に此城取返さて置べきかど軍勢を引返し信玄が旗本脇備の道をさへきり突てかゝる氏時を弟箱根の僧少將覺胤狩野新八清水太郎左衛門其外笠原多目荒川等の部將をばじ

め勇銳の士卒共必死にきりて奮戦すれば甲州勢も思ひの外ふ切たてられ小幡尾張が三男陣正昌尹(原書氏房)始め討死する者若干としかりといへども甲州方の大軍之氏時方の小勢之其上信玄が計畧に陥りし事なれば終に討負て氏時始め狩野清水笠原多目荒川僧少將等の部將迄七人勇銳の士二百餘騎雜兵都合七百餘人其所をも去らず討死し武名計りを後世迄傳へける(原書清水一人の切ぬけて小田原に返るとすいふかし)信玄謀策のごとく城を攻落し城に長坂左衛門を留め守らせ爰より駿府へあもむかんと凱歌を奏し薩埵山を越んとせしに山上に敵屯して有けるが城意庵よく見切て馬場美濃守が一隊をして追拂ひせ雜兵三十七八人追討し彌駿府をさしてぞ進ける(編年)

信玄再奔駿府付岡部安部の事

是より先駿府の城をば武田が守將山縣三郎兵衛守護せむを神君今川の舊好を思召て氏真が爲に山縣を追拂ひ給ひ北條父子と牒し合され氏真を歸住せしめんとて城郭修築せしめられしかどいまだ營柵整ひがたき所に武田信玄の蒲原の城攻落し其翌七日大軍を進め直に駿府に押寄せたり岡部次郎右衛門正綱弟治部右衛門安信大藏元貞(編年岡部次藏定吉として別

に事跡を作る笑ふべし其子彌一郎信勝小倉内藏助森川日向守酒井椽之助其外富永澤木長井などいへる今川備前藩好の輩統に諸士五十人討り勤番して城の警作どり行ふ最中に此大軍取詰て四方をかこみ攻立れば防ぐべきも見へずされども岡部正綱老練の勇士なれば軍令厳しく防ぎ戦てたやすく陥されず信玄入道岡部が古主の恥辱をすべからんとわづかなる勢を以て營築未成の孤城にたて籠り我大軍を對手にし雌雄を決せんとする大勇剛志の程こそ神妙なれば八十の兵の得安く一將の求め難志といふ本文ありいかにもして岡部兄弟を降参させ我が家の子とし召仕のいやとて鉄山和尚といふ僧を使とし岡部兄弟かゝる粗畧の城に立籠り大敵を物の數ともせず義を守る志の程比倫なしといふべししかあがら北條が後詰もせざる此所に辛苦してとても其詮あるべからず天命に應じ早く我味方に來らば十倍の祿宛行いんといひせけるに岡部兄弟も浦原の落城し其外北條が駿州の諸城の皆明退たりと聞ゆ小田原よりの何方へも後詰の沙汰もなし兎角此城持たへがたしと決して遂は信玄に降参せり信玄大に悦び岡部の今川が方にて三百貫の地を領しけるを十倍して三千貫知行させ侍大將として五十騎を預らる天正十年武田家亡びて後御當家に仕へ國初の功臣と

いなれりける又安部大藏彌二郎父子へも信玄高祿を授くべければ味方へ参るべしとすいめしかど安部父子は其返事をもせず安部谷に引籠る信玄安からぬ事に思ひ伊川七村の内に廻文して安部父子を討て出さば賞の其願まうすべしと下知しければ田代河内の者共安部が許に夜討を安部父子散々に戦て敵數人討取る其ひまに郎等主の妻子引具し遠江の國に落たり神君安部父子が武勇稱し給ひ彼夜討せし徒速に追討すべしと仰下され御勢三十騎を差添られしりべ元貞信勝大に悦び田代河内の地に馳向ひ彼の奴原を悉く誅戮す神君御威料ならず此時より安部父子の御家人に召加へられぬ此後信玄安部の津々野藪科口の永見土岐川根の山王が嶺遠目花澤遠州金谷の臺諏訪原の五ヶ所に砦を構へ軍勢を籠置しよ是も永井善右衛門等八十騎を添られ安部父子に仰下され攻落さしめられ彌御威淺うらず岡部安部等と同じく駿府を守りしに小倉内藏助森川日向守兩人再び巨倉へ歸り氏真に仕ふ(駿府再亂の事原書に誤て浦原とす今岡部安部等事跡の藩譜によりて考るす但し藩譜に安部が事の去年信玄駿府を奪ひし時の事とするの信玄の再び奪ひし時の事と混するがごとし信玄再び駿府を奪ふ事の大成記家忠記等みなおまじ)

松平康俊逃歸の事

武田信玄の再び駿府を奪ひ今年の爰に越年せんと軍勢を分て榛原郡に山の城に籠置たり神君此事聞召て十一月十三日御勢を向けられしに松平左近太夫眞乘先登し軍功多かりしうば吉永西嶋幸王藤窪星窪山川舟市山梨等二千貫の地を加恩として下されたり去年駿府を信玄が奪ひし時神君異父同母の御弟松平源三郎康俊の酒井左衛門尉忠次が女子と共に三浦與一駿州より伴ひ甲州へ行て與一降参の功に信玄に献じけり信玄此人質有るから徳川家も終に味方へ來らるべしと悦び嚴しく番人付て押籠置たり然るに今年信玄の駿州に在陣して越年すれば其虚に乗じ伴中務盛陰が計ひにて番人ども大雪に堪兼し時強く酒をどめ大に沈醉させ酔伏たるを待て康俊を盗み出し山中の大雪を踏分て康俊難なく三州へ歸着せられしうば神君御感不斜流石に我弟なりと悦ばせ給ひける然れども康俊山路の深雪を踏分け寒氣をおろしける故にや兩足の指皆落たりさるゆへに康俊此後の閑居して世に交らず生涯を送られしとぞ忠次が女も後に岡崎に立歸り松平彌三郎伊昌よ嫁して此腹に土佐守忠實の生れたり（康俊歸國の事原書に永祿十一年十二月廿九日とす大成記家忠日記等に年月を

まるとぞ基業成績より今年十二月に信玄留る故伴中務計を用ひ逃歸るとす此説より所有が如し今是に従ふなり）

正校 三河後風土記卷第十二

神君濱松御在城付花澤城合戦の事

永祿も十三年庚午に改元ありて元龜と號せらる神君の遠州愛知郡引間城を西南の勝地に移され城郭を經營し給ひしが落城せしかば(元龜)元年正月より此地を御居城と定められ濱松に遷御まします濱松の城規模宏麗近國第一の名城たるが故に此時より三州岡崎城に三郎信康君を住ましめ給ふ武田信玄の去年十二月思ひのまゝに駿府を奪ひ今年まで駿州に滞留して万事沙汰しける今川氏眞が家人小原肥前守鎮實其子三浦右衛門佐美鎮の猶も信玄へ降参せし家の子郎等三千余人必死を覺悟し駿州花澤の城に立籠りたり信玄此城急に攻落せんとて正月廿五日より大軍を以て城を取かこむ廿六日曙より武田四郎勝頼長坂釣閑諏訪越中初鹿野傳右衛門名和無理之助等腰曲輪の虎口に附たり初鹿野の矢玉を厭はず揚賣戸を押揚ける時信玄旗本よりしきりに使を走らせ引どらしむ其跡へ曾根内匠助昌世眞田喜右衛門昌幸三枝松勘解由左衛門守友等五十八斗り腰曲輪へ至りし所へ城兵十八斗り鉄炮の足輕を左右に分ち突出けるに三枝松曾根眞田鎗を揮て先登し横田十郎兵衛小幡彌左衛門同じく一隊の

騎士歩兵をすゝめ左右より突崩し引橋迄追詰て藩の小兵共を追散して退く廿七日また東雲の頃より馬場美濃守山縣三郎兵衛城の大手へ押つめしに城中より小原源之進同権右衛門井桁(原書大石)又右衛門井伊彌五郎杉原十(一本戸)茂兵衛三郎左衛門等究竟の勇士其従兵百余人引つれ突て出る寄手を三度迄追出し烈しく奮戦す殊更三郎左衛門強弓の射手成りしが寄手落合治部の兜の天邊より首筋かけ胸の中迄射通し治部の忽に命を落す(原書に瀧三郎左衛門が岡部治郎左衛門を射殺すと有誤之岡部の天正十一年四月四十一歳よて卒す)其弟左平次兄が骸を引取らんとすれば城兵の其首とらんとす敵味方入亂れ戦ふ程に瀧が矢先に命を落す寄手若干之寄手の大勢堀を埋め堀を毀ち夜中迄も攻けれども城中より大石大木を投げかけ熱湯煎砂をかけそゝぎ防戦するゆへ寄手大軍といへども乗取兼てわぐみける信玄依て謀をめぐらし謀者を城内へ忍び入らせ放火して陣屋々々を焼立寄手の跡船にて城門の脇金を打破り攻入ければ小原肥前守三浦右衛門佐父子も防戦の術盡和睦を乞ふ信玄是を赦し小原父子始め城内の生口悉くたすけて城を出去らしむ其時今川土村上彌右衛門の濱松へ参りて御家人に加へられ年へて後神原康政に附屬せらる今川の同朋伊丹權

阿彌は信玄其武勇を稱して家人とし大隅雅勝(後康直と改む今伊丹理右衛門康榮が家祖)と改め船手の將とす後に甲州滅亡の時より御家人と成る今川氏眞の神君の御威勢にて駿府を取返し既に還住せんと城郭修造する所再び信玄よ奪われ不得止事又相州小田原に立こへ北條氏康を頼みけるの氏康是をわかれみ早川に邸宅を構へ養ひしに坂東の輩是を稱して早川殿といふ駿州藤枝戸久一色の城を守り氏眞方に残りたる長谷川次郎右衛門も今の頼みなく城を落て遠州に参り御家人に加へらる其城をも信玄乗取て馬場美濃守に命じ修築して田中城と改む其外江尻清水にも壘を築き兵を籠置て北條に備へたり

小原三浦父子逢害の事

さて此正月廿七日の夜小原肥前守三浦右衛門佐父子の駿州花澤の城を出て身を何方に寄んかどさまよひける肥前守の先に氏眞の命を蒙り三州吉田に在城せし時國人の八質を預りしに徳川家御家人の八質共を悉く申刺に仕ける故御家人一同に小原が肉を醜にせんと怨み憎みけり神君常々是を憤らせ給ふ事を聞かば今更濱松へ参り降参も成難く其子三浦も氏眞が寵にほこり徳川今川兩家の中をもすさまたげし事なれば是も濱松へ参る事を得ず兎

や角と思ひ煩ひけるが高天神の城主小笠原與八郎長善(一本長忠また氏備)の年頃の舊友な
 れば長善を頼み罪を謝して徳川家に従ひ奉らんと案じ出し正月下旬餘寒風はげしき山路の
 残雪を凌ぎやうくと高天神へたどり付てひたすら長善を頼みたり長善元來邪佞の性質ゆ
 へ舊友の漂泊を哀れむ心の更にあし氏真掛川在城の間には世上變化を見計らひ氏真方の人
 々へも折節音信を通じけれども氏真掛川を逃去て遠州一圓徳川家の御手も属したる後今
 川方の人々との長善いさゝかもかへり見ずまして肥前守父子の事の徳川家君臣とも深く怨
 悪ませらるゝ故是を誅し其首を濱松へ献せんに徳川家御満足此上不可有思ひめぐらし小原
 三浦兩人を殺害せばやとわざと懇にもてあす様々終に父子とも首を刎て其首を濱松に
 献じたり神君是を御覽じ給ひ鴉鳥懐に入る時は獵人も是を殺すに不忍といへり與八郎舊
 友の落泊を哀れまらず是を伐て迎合の媚をあす殘忍邪佞の志更に人倫の情にわらずとて御
 稱美のなかりけり世人傳へ聞て長善が舊友を殺害し佞媚を計りし志を惡まぬ者のあかりけ
 り此時三浦が有さま餘りに淺間しかりし事とぞ聞へける長善父肥前守をもたばかりて討果
 し其後三浦を擲取て廣庭に引出す三浦の癡の如き涙を流し聲を上て泣ながらやけるは與八

郎餘り情知らぬ計らひ哉我等父子舊友のよしみを思ひ親ども兄ども頼み來りしを頼まれず
 ば頼まれぬ迄ぞかゝる非道のふるまひ何事ぞやと歎き叫ぶ長善が家士足助長九郎(一本長
 助)太刀取に出しが此跡を見て然らば與八郎殿へ上て命計りをば助けてとらすべし其替
 りに鼻をろぎ片耳切て放じやるべし夫にても命が惜きかといへば三浦のたどへ耳鼻切らる
 ども一命だに助け給ひは是御恩の忘るまじきなりと泣々訴へ歎く聞者彈爪し臆病者多しと
 いへども三浦如きの聞も不及とく首刎て讒邪の者こらしめにせよといふに三浦の足摺
 して泣叫ぶ所をもはやわかぬ所觀念せよと押ふせて首切りしとぞ(一説に小原三郎の父
 子高天神に來りしかども小笠原是をふせぎて入ざりしかば近邊岡崎村に塾居せしを小笠原
 討手をさしむけ小原三郎をはじめ従者妻子迄都合七十五人を誅し其尸を沓掛原にうつむと
 いふ此説是なりや)

織田徳川兩公上洛付越前手筒金崎軍の事

越前の領主朝倉左衛門督義景の其家代々織田家と同く管領斯波武衛が家の老臣にて斯波家
 衰廢の頃より朝倉彈正左衛門繁慈照院將軍義政公より御教書を賜り直勤して越前一國の領

主となる其頃より織田ハ武衛義廉の孫治部大輔義達を補佐し尾張國を守りける是も次第に
 衰微して尾州も今は織田家の所領と成り信長に至り其氣量父祖に倍し足利家再興の大功を
 立られしかば當時に於て其威勢並ぶ者なし織田朝倉もどの一列に斯波が陪臣たりしが其國
 々を割據し自立の志を立んとし今ハ兩家永く權勢の間とぞ成にける當將軍義昭公沈淪の頃
 足利家再興の事度々朝倉に仰下されしか共義景はかゝりて御請もせず軍將上洛し給ひて
 後ハ早々上洛し勤仕すべき旨仰下されても一度も上洛せず北國の要路を領しながら武命に
 不應不臣のふるまひなれば誅伐を加へずして叶ふべからずと信長是より朝倉征伐の事急が
 るにより先毛利新介秀詮濱松へ參らせ御加勢の事請ふる濱松よりも酒井忠次本多百助
 信俊兩人を岐阜へ遣はされ堅く約束し給ふ御旨有つて京都御遊覽を仰出され其御川意専ら
 なり信長の二月廿五日岐阜を出馬せらる神君ハ一万余騎を引率し三月七日遠州濱松を御發
 途わり信長途中にて相撲杯見物せられて上洛せられ四月朔日京都興樂半井謙菴の家を旅館
 にて泉州堺浦の富商共が所持する名物の器財ども取集て見られ過分の祿をうづけらる十四
 日將軍二條の御所にて能興行神君も信長と同じく川仕し給ふ此日信長の正四位を下しす

めらる朝倉方にハ今度事もなきに信長大勢引具し上洛する事全く越前表へ出軍の計略ある
 べしと防戦の用意手配りを急ぎける(岐阜記編年)廿日信長いよ江州坂本にて勢揃し堅
 田迄出陣廿一日西近江高嶋郡より若州熊川をへて廿五日越前孰賀表へ發向せらる神君も同
 じ道をへ給ひ今日此所へ渡らせられ信長と御對面あり朝倉方にハ朝倉中務丞景恒教賀の
 郡司にて金ヶ崎を守る又手筒山の城にハ寺田采女を守將とし正田右近津波甚四郎九岐左介
 氣比の宮社人其外上田中村吉川萩原入道等始め千五百人立こもる織田の大軍手筒山へ押寄
 柴田修理介勝家木下藤吉郎秀吉池田勝三郎信輝を先手とし徳川家の御加勢をろへ三方より
 攻かむ此城三方ハ平地故城兵も用心嚴しく備たり城の後ハ深沼にて渡るべき櫓もあけれ
 ハ寄手も此方より攻入べうらずと思ひ柵木茂くふり置守兵ハ少うりしを信長山上より見定
 められ其身紺地金襴色の具足に白星の兜を着利刀黒といふ駿馬に鞭打て深泥の沼を乗越ら
 る旗本の輩五百余騎あどらず眞先うけて柵を破る朝倉中務丞景恒(岐阜記編年景恒基業原
 書定景)手筒山危しと聞て五千餘人引具し後詰に来るといへども織田方十方に余る大軍な
 れハ幾隊も人数を分て後詰の敵をわしらせ信長の景恒方の見合もせず新入替て亂入

し水手口の小屋に放火す其時徳川勢の大手の方より攻入て城を乗取景恒心の矢猛に思へども手筒山の落城し手勢五百余人討れしかば心あらず金ヶ崎へ引返す今日織田方へ討取首千三百七十余級寄手も八百余人討死せり信長此機を失ふべからずとて翌廿六日大軍を進で金ヶ崎の城を攻かこむ森柴田佐久間池田の大手に向ひ搦手の坂井木下山田等取圍んで攻けるに景恒昨日手筒山の後詰して手の者多く討せ矢炮も多く費したり義景の後詰の爲淺生水まて出勢ありけれと一乗谷に騒動ありとて引返す朝倉式部大輔景鏡も府中をい出勢せしかども急に寄來る有様も見へず此機を見て信長より木下藤吉を以て扱を入られしかば景恒も禪僧を出し和談して越前の案内すべしとすける信長大に悦これより丹羽長秀明智光秀を若狭に遣はし武藤上總介が人質を取らためしめ直も景恒を案内として府中へ軍を進めんと急がれける此威勢も恐れ疋田の城も今夜落去りぬ(岐阜記編年)

金崎退口付信長野州軍并千草越の事

織田彈正忠信長の兩三日の間に手筒金ヶ崎等の城々責落し朝倉中務丞景恒に府中案内の事を約し先達て府中に歸し直に義景が居城へ押寄んと議せらる所に近江の淺井下野守(寛

系祐政)父子心を變し朝倉と一味し織田殿を前後より狭み撃んと計るよし飛脚來て注進す久政が子備前守長政の信長の妹(市姫)聲あり争てさる事あらんと信川せられざる所に淺井か使三河熊谷忠兵衛來り先も信長より贈られたる辯詞を返し朝倉が年來の舊好もまたしがたければ織田殿と手切する旨申述て其使の立歸るかなくては淺井父子彌朝倉と一味して飯路をふさぎ朝倉又大軍を發して跡を慕ひなば山々敷大事ありと信長大に驚かる六角承禎も淺井と同じく謀を合せて信長が後を取切さまたげんとするよし又々注進われバ信長驚天し然らば此所に然るべき將士を留置いて朝倉をおさへさせ我が物軍を引揚て早々江州にむかひ淺井父子を征伐せん誰か此所に留りて朝倉が後詰の勢を押へんと左右を見廻りされける日比の大剛の名を得たる侍大將共一座に群列したれどもいまだ詞を出す者もなき所に木下藤吉郎秀吉某此所にどまり朝倉勢をおさへんとすければ信長大に悦ばれどる物も取わへず急に諸軍を引揚て敦賀表を引拂はる朝倉方に淺井六角との調議整ひければ諸手の手配りを定め朝倉式部大輔景鏡大野に有て穴馬篠役をさしふさぎ溝江大炊介長逸の金津の城にて細呂木吉崎を警固し黒坂備中守兼久岡崎の城にて竹田風谷を守り朝倉兵庫助景綱織田の城

より河野口に向ひ櫻井新左衛門并鱒淵將監は杉津口(向ひ朝倉出雲守景盛三段崎權頭虎杖椿井坂をへて疋田口(一本に引壇とす)に向ひ印牧彌六左衛門の木目峠鉢伏の要害を守り朝倉掃部助景氏の大肥田城を守り惣大將義景の廿七日の曉東方しらむを待ず一乗谷より出陣其先陣の山崎長門守吉家統美越後守行忠河合安藝守宗清朝倉土佐守景行魚住備後守景固二陣の淺井彌三郎景健梅野三郎右衛門吉仍鳥居右馬助景房青蓮寺近江守景基中軍の左衛門督義景脇備の鳥居兵庫助景親山崎肥前守吉延高橋新助加藤新三郎後陣の小林備前守景隆窪田左近將監毛屋民部少輔青木隼人一色治部大輔富田孫六大軍きそひ進んで敦賀表へ着陣し信長を始とし一人も遁さじと押寄たり信長のあまり事急よして神君へ此事を告ず引退き今夜の栗屋越中守を頼て佐野の城に一宿あり織田勢十方に餘る大勢の事故其混亂大方からず木下藤吉郎秀吉僅に七百餘騎にて踏留りしが急ぎ神君の御陣營に來り然々のよしを告て此度の難義を救ひ給へるべしと願ひければ神君快く請合給ふ朝倉義景の廿八日引をくれたる織田勢の士卒を追討する事千三百餘先陣の朝倉勢并手筒山金崎の敗兵共毛屋七左衛門を大將として徳川勢に打てかゝる内藤四郎左衛門正成射藝の妙を顯し敵の先手若干射落

す渡邊半藏守綱の鎗をふるつて返し合せ數十人突倒す敵の此勇銳に辟易して慕いんとせざりしに神君木下藤吉郎が方をかへりみ給へば敵四方より取かこみ散々に戦へども既に危く見へければ神君最前に秀吉が頼みといひしを請合ながら秀吉を救はずして我何の面目有て再度信長を面を合すべき進めや者共と呼ひらせ御みづから鉄炮を放ち給ふ從軍等疲れたれども義を守る三河武士少しも臆せず取て返し突て入二も三もみ攻立ければ敵の向の山降迄捲り付て風の如く引て行敵またどよみ立って慕ひけるを一度にとつと引返し手しげく弓鉄炮にて打拂ひ脇へ廻り競ひかゝれば又どつとさけんてがけ破り難なく是を追ひなびく敵兵いさみ進むといへどもわたりがたくや思ひけん唯遠より関の聲計り揚て近寄事なければ味方の勢足並靜に引取ける既に黒濱に來る所に毛屋七左衛門五六百の人数を以て前をさへざらんとす是をも鉄炮をつるべかけ一度に突てかゝれば立足もなく崩れ立須賀濱へ逃て行神君御心靜に椿峠に引揚給ひ人馬の息を休め給ふ秀吉の神君の御馬前に來り今日御合力なくば甚危かるべき所よ今度某が後殿の働の偏に御影を蒙り忝次第なりと厚く神謝して立歸る神君の此後も織田勢と打交て引退んとせば味方自由あるべからず繕語

を取て歸陣すべし所の案内者をもむ先に立て木野を通り松原に野陣を張て夜を明され翌日
 早天に打立給ひ久々子氣山を過て若狭の西津に出小濱に至り給ふ御家人和田嘉兵衛元來此
 土人にて万事才覺者なれば御宿陣の場を見立しめらる向島の連興寺究竟の地なりと見て爰
 り御陣を張給ふ住僧徳元すけるの朽木信濃守事朝倉六角に一味し朽木谷をふさぎ多羅尾四
 郎太夫日結淨泉寺等一揆をかり催し今津筋を取切たりと風説されば愚僧脇道を御案内すべ
 しとなり神君大に御悦わつて此僧に道しるべさせて根來谷に分入針畑を越へ鞍馬山を過
 て京都へ歸らせ給ふ所信長の敦賀を引拂われ其夜佐柿の城に休息わり城主栗屋越中守勝久
 自身案内し廿九日熊川にかゝりて江州山中朽木越へにからんとせられ森三左衛門を以て朽
 木信濃守元綱をたのみ猶又松永彈正忠を使として信濃守を諭しめらる信濃守も是より隨ひて
 信長を我宅へ迎へ參らせ種々懇應し信長翌晦日安々と京都に引入らる神君も御入洛有て御
 對面あり秀吉も歸り來り神君の御影を以て十死を出て一生を得たりと披露しければ信長厚
 く神君に神謝し給ふ丹羽五郎左衛門長秀明智十兵衛光秀も若州の人質を取かためし所淺井
 叛心により織田殿歸路せらるゝと聞て直に京都へ赴きし道一揆等道をふさぎ妨しを漸く

蹴散して歸り參る神君は信長今度は先歸國して近々江州征伐に出軍あるべしとの事故御暇
 乞し給ひ信長より先に御出京五月十八日濱松に歸らせ給ふ信長は五月九日京都を出て江州
 へ下られ志賀永厚長濱等へ守兵を定め悉く仕置整ひければ十九日江州を發せんとせられ
 し所六角入道承禎愛智郡總江の城より立籠り市原邊の一揆を催し野州の河原まさへたり是
 を見て在るの郷民一揆を起し舊主六角の爲に織田殿を討留舊恩を報んとひしめくされども
 信長は少しも驚かず彼入道何程の事かあらん蹴散らして押通れと柴田佐久間に下知し給ひ
 めめき叫んで打て掛れば速に敗北し手勢八百餘討れ逃散たりされども一揆等郷に在る多け
 れば信長は當國の味方浦生右兵衛太夫賢秀父子香津島勘六左衛門布施藤九郎等を頼み案内
 とし千草越といふ山中羊腸の曲折を上下分行所に思ひもよらす林樹藪と茂りたる方より
 鉄炮の玉二ツ飛來り信長の帷子の袖おはたと當る供の將士等大に驚き山中に手を分て捜さ
 んどす信長さらに騒給はず從者を制して捜索もなさず徐々山道を越る間近き鉄炮の二玉
 も肌には恙なく五月廿一日岐阜へ歸城せらる此鉄炮を打けるは勢州朝熊の悪僧善住坊とい
 ふ鉄炮の妙手常々翔鳥をはづさず打取る者故六角頼みて山中林樹繁茂の陰に隠し信長を

近くねらひ打ちめしことぞ後に聞へける(大成記成績基業編年岐阜記淺井朝倉記)

按るに金ヶ崎退口に原書には秀吉が備は朝倉勢手も出さず秀吉安くと引退く神君の朽木谷にて丹羽明智を救はせ給ふとしるす誤之後年秀吉小杉山軍終り御和睦整ひ神君御上洛御對面の時秀吉神君の御手を取て金ヶ崎退口の御恩に今に忘却せずと謝せられし事有を見るに秀吉此退口神君御救援ありしに疑なき事之又岐阜記に信長神君始より御相談有りて神君の信長より先に岡崎へ直に歸り給ふとし編年織田殿神君と御軍議有て神君跡にとまらせ給ふとすどもに誤れるに似たり此時の織田殿大に驚かれ急に引取給ひしゆへ神君への告られざりし之大成記簡畧に過たれども其實を得たり基業に朽木谷にて丹羽明智を救給ふといふも今津船木にて淺井が兵鉄炮を打かけしといふも皆誤にて神君椿峠にかゝり給へば今津船木に出る道なし既に朽木谷に入ていかで今津船木へかゝり給へん皆地理不案内の説と見ゆ此説據ありて聞ゆ依て基業をもととし大成記等の諸書に依て原書を改明す

姉川合戦の事

織田彈正忠信長の淺井父子か朝倉よ一味して前約を變じけるを怨み深く憤ほりさらば先朝倉を捨てて淺井を誅すべしとて其五月廿一日毛利新助秀詮を使者とし援兵の事を徳川家へ請れける神君少しも御辭退なく御領掌まじく早々軍勢催促し給ふ所先三千余騎とぞ聞へける御軍勢是より多かるべしといへども三州遠州御領内の城々へも堅固に人数を籠給ふが故之是甲州の武田信玄が御營の虚を窺ひ襲ひ伐計畧あらんかとの御川意あり別して遠州掛川の城に石川日向守家成を守將とせられ自余の城々をも心付て少しも由断すべからずと懇切に命せらる六月十七日(岐阜記編年とにも十七日とす基業十八日原書十九日)信長數万の大軍を引運岐阜の城を發向せられ江洲へ予向のれける是より先江州に淺井父子かねて此事を心得て防戦の用意し南郡外安長比兩城を捕へ越前勢を分て籠置鎌の齒の城(岐阜記一名長堅田といふ基業長亨新の要害とあり)に堀次郎に後見として樋口三郎兵衛多羅尾右近を籠置本江の要害に黒田長兵衛横山の城に大野木土佐守三田村左衛門野村肥後守同兵庫頭を籠置淺井父子の小谷の城に在て段々手配りして織田勢の寄來るを遁しと待かけたり江北の要害堅固にて急に攻入がたきにより信長の川陣以前に木下藤吉郎秀吉に内意を

合め竹中半兵衛重治に内々樋口三郎兵衛をかたらしむ重治樋口と年頃知音なりければ樋口方へ赴き理を盡し誠を顯し和々かたらしむに終に三郎兵衛も得心し同列の多羅尾に相談し信長方に一味とある此城織田方へ降参せしと聞て外安長比兩城に籠りたる越前勢も淺井に一言の按内にも及ばず三千餘騎みな越前へ逸失たり信長の是を聞て江州へ攻入十八日坂田郡柿田村の西山に陣を張十九日に横山の城を巡見せらる此城を押として水野下野守信元織田上總介信包丹羽五郎左衛門長秀并堀次郎が勢を殘し置れ信長は坂井右近森三左衛門を兩先手とし數方の軍兵を引具し小谷の向虎御前山に備て雲雀山の方より坂井森尊勝寺のかたより柴田内藤等攻入て小谷の町中所々放火す此時淺井備前守長政の城より打て出一取せんとはかりけれども城兵小勢にして信長の大軍よみたり難し越前の加勢を待給へど家老共謀めて出陣せず依て織田勢西の馬上東の小室瓜生まで燒立其次の矢鳴は野陣して明朝の早々龍が鼻へ本陣を引横山表へ向いんと淺井備前守其機を察し明朝打て出で信長が退口を追討せんとあり此時も父下野守久政も家老共も兎角越前の加勢を待て軍すべしとて長政かや所を川ひすされども長政か家人の若者どもあまりに無念におもひ二百騎斗り打て

出で織田勢佐々内藤助中條將監が陣に弓鉄炮打掛て敵多く討取たり織田方にも佐々中條并築田左衛門次郎猶戰し柴田勝家も味方を救ひ引取らしむ是を三田村の後殿とて當時美談とせり信長か龍ヶ鼻に本陣を張て惣軍横山城を取かこみ攻る事急なり城中に三田村大野木野村高坂其外宗徒の者共少しも撓まず防戦すれども寄手大軍の事あればかきひがたく小谷へ加勢を乞事頻りなり長政小勢ながら捨置難く八千餘騎にて小谷より出勢し大寄山まで着陣す其時越前よりも加勢として朝倉孫三郎景健(一本景忠)一万餘騎廿六日江州へ着陣せり神君の廿三日(記開編年廿三日岐阜記も同じ基業廿七日とて大成記廿六日とす)江州坂田郡に着給ひ廿四日信長の龍ヶ鼻の陣所へあはしむし御對面有り(記開編年廿四日とて家忠日記廿七日とす)淺井方への越前の加勢來るよ力を得て明日必らず一戦すべしと評議す長政の計策に信長本陣龍ヶ鼻迄五十町あれば直にかゝらば人馬疲れん今夜野村三田村へ陣を移し明日曉天に信長本陣へ切入らんと有し所に淺井が家人淺井半助信長手早き大將なれば野村三田村迄陣替覺束なし令少し軍の様子御覽あるべきにやとやす遠藤喜左衛門の長政のはからいせ給ふ事尤も是非一戦に勝負を決し給ふべし我の敵の中にまされ入て信長と引

組討果すべしとヤ長政大に悦び廿七日の深更に越前勢の三田村へ歸り淺井勢の主斗村野村に移る果して半助が詞に違はず信長の敵方終夜火を焚ひ朝倉戦を心掛ると見へたりとて味方の備定めあり毛利新助を神君御陣へ使して明日の戦信長の越前勢に向ふべし徳川殿の淺井に向ひ給ふべし然れども御勢多からざれば誰にても加勢付べしとの口上之神君聞召我此所に来るより水火をも避べきにわらず朝倉淺井何れにても請取すべし然れども左様に打込の軍の更に本意にいはず強敵と覺ゆる方一方を請取勝負を決すべし淺井が八千を我三千と取らん人数に於ての不足なしされ共加勢を添られば稻葉伊豫を差越給ふべしとの御返答なり新助歸り此由聞て信長宣ひける徳川殿伊豫が將畧あるを知られて加勢に望まる事伊豫が身にあつて譽とすべしとて伊豫守に加勢の事を命ぜられ信長重て其軍勢を十三段に定らる一番坂井右近二番池田勝三郎三番木下藤吉郎四番柴田修理亮五番明智十兵衛中條將監鑓田出羽守等堂々整々として備へ又丹羽五郎左衛門長秀氏家常陸介入道卜全伊賀伊賀守範秀等は横山城の押手と定めらる徳川勢は酒井左衛門尉石川伯耆守を先手にあされ松平甚太郎家忠松井左近大須賀五郎左衛門高天神の小笠原與八郎等すべて二千餘騎二陣とせ

られ中軍御大將の左右に榊原小平太本多豊後守備へ稻葉伊豫守後軍として都合六千餘騎あり櫻井の松平與市家次(清定が子)福釜三郎四郎親俊(親次が子)深溝松平又八郎伊忠(好景が子)竹谷松平與次郎清宗(清善が子)形原松平又七郎家忠(家廣が子)長澤松平源七郎康高(政忠が子)五井松平彌九郎景忠(忠次が子)設樂甚三郎貞道野田の菅沼新八郎定盈西郷孫九郎家貞二運木松平丹波守康長(本氏戸田)與平九八郎貞能牧野新次郎康成此輩の酒井左衛門尉に屬したり大給の松平原次郎眞乘(親乗が子)藤井松井勘四郎信一(利長が子)押鴨松平左馬允忠頼(忠吉が子)能見松平新助忠澄(忠恒が子)嶋田平藏平岩七之助親吉酒井與四郎重忠與七郎忠利内藤金市郎家長足助の鈴木喜三郎重時小原の鈴木越中守重愛等の石川伯耆守に屬し大久保七郎右衛門忠世弟治右衛門忠佐本多平八郎忠勝等の御旗本に屬したり廿八日曉に信長敵陣の様子を見らるゝに淺井が勢八千斗り野村に備へ東にあり朝倉勢一万五千斗り三田村に備へ西に有て姉川を堺に陣を取れり信長徳川殿へ使を立て昨夜軍議を定たりといへども我怨の淺井にわれは我淺井を討べし徳川殿の朝倉に向ひ給ふべしとヤ送る酒井左衛門尉是を聞て味方既に淺井に差向ふ今戦に陣備を立て替へん事せば隊伍亂るべしとヤければ神

君淺井の小勢朝倉の大勢之大勢の方へ向ふの勇士の本意之兎角織田殿仰に任すべしと御返答有て其使を返し俄に軍列を立直し西北に向ひおしまひす(柏崎物語南横山東の伊吹山草野山の間より姉川流出る堤廿六丁程高峯之)淺井勢の磯野丹波守秀昌山崎源八郎高宮三河信氏大守大和前田信濃運靈寺常陸等一千五百斗り二陣の淺井玄蕃弟雅樂助同齋之助空助上坂備中同刑部同五助同彌太郎三陣の阿閉淡路同万五郎西野壹岐四陣新庄駿河今井十兵衛田邊式部神田修理五陣東野左馬月ヶ瀬若狭世上坊六陣淺井對馬同大學七陣の旗本都合八千余騎朝倉勢の朝倉九郎次郎景記黒坂備中豊原平泉寺の衆徒氣比社人三千斗り先手とし都合一万五千斗り備たり徳川勢先手弓炮放ちかくるを見て越前勢の大將朝倉孫三郎此手の敵はわづかの小勢之打ば忽ち破んぞと下知なせば平泉寺の衆徒心得たりと徳川勢に切てかゝり姉川を追つ返しつ戦しに折節六月廿八日極暑なり馬汗人汗流水に異ならず淺井方又は磯野丹波守是を見て越前勢のばや鎧を入たるぞと呼はり西南に向ひ千五百の勢を押し出す越前勢の大將朝倉孫三郎の味方を離れ百騎斗りにて平泉寺の僧等が力戦する横合より切てかゝり徳川勢を追拂はんとするを見て御旗本より木多平八郎急馬を馳せ電の如くかけ來り此

敵を突破り大久保兄弟安藤彦四郎直次も同く馬を馳來りて奮戦す朝倉孫三郎も烈しく下知し諸軍を進めて川を向ふへ追立んとし石川伯耆守姉川の中程にて返し合せ大塚甚三郎の敵の鎧を引合けるが終に其鎧を奪取て敵を突伏て首を取る此功により又内といふ名を賜ふ内藤甚一郎正興(正成が子)鎧を敵の間へ落しければ馬を乗戻し其鎧取て歸る此時朝倉が後陣の勢淺井勢と一になりて進む神君御覽あり織田方利を失ふと見たり旗本より備を崩しかれと御下知あれバ本多平八郎畏れ馬上に鎧引提て朝倉が一万餘騎が中へあめいてかゝる本多豊後汗を始として徳川勢の平八討すなど一同に三千計り突てかゝる松井左近左の手を鞍の前輪に射付られながら其矢を抜て敵を射倒す松平甚太郎十六歳よく戦ふ朝倉方魚住龍門寺等の八千餘騎御旗本を目がけ突てかゝれバ大久保新八郎廣忠(忠勝が子)始大久保黨其外小栗又一服部一郎右衛門等これを迎討て高名す其中にも大久保權十郎忠直敵の鎧を奪て其敵を突伏て首を取る依て荒之助といふ名を賜ふ此時神君御下知有て榊原小平太本多豊後守に敵の横を打べしと命ぜらる小平太左右を願るに前に水田あり底の砂石にて渡られしかバ馬を乗入を見て豊後守其子彦次郎康重渡部半藏本多三彌水野太郎作も同じく進み突

戦す阿倍忠政の頼に射倒す小笠原與八郎もす、み戦へば其手の者渡邊金太夫門奈左近右衛門吉原又兵衛伊達與兵衛中山是非之助等も勇をふるふ越前勢遂に敗北し小林瑞周新黒坂備中守前波新八郎同新太郎魚住龍門寺などいへる宗徒の輩討死す北國無雙と聞へし勇士眞柄十郎左衛門直隆父子兩人の衆にぬきんで働きたるが向坂式部と渡り合草摺の外れ一鎧つかれあがら式部が兜の吹返しを打碎きあまる太刀にて鎧を打落す式部が弟五郎次郎が弓手の股をなきすへたり其弟六郎五郎吉政進み來るを從者山田宗六我主人を討せしと進みけるを眞柄手の下に切伏る其ひまに六郎五郎眞柄をかけ倒し首を取る眞柄が嫡子十郎三郎直基の青木加賀右衛門子所左衛門一重と戦ふ所左衛門が郎黨一人かけふさがりしを太刀ふり上るより早く首打落す所左衛門鎌鎧にて十郎三郎が馬手の肘をなき落す其ひまに朝倉孫三郎の危き命助かり虎御前山まで引取たり此戦半に誰かは知らず淺倉方の者御旗本に紛れ神君に近寄らんとせしを天野三郎兵衛康景加藤喜右衛門正次あやしみ二人とも討取る其血の御刀に幾ぐ程之是より先織田方先陣坂井右近の敵に姉川を越させしと遮へたりしが淺井が先鋒磯野丹波守其外高宮三河大宇大和山崎源八郎前田信濃連齋寺常陸等五千餘騎はげしく

突てかゝる坂井の小勢故突立られ嫡子久藏十六才郎黨百人討り同じ程に討死す右近の是を知らず味方の陣へ引取たり二陣の池田勝三郎も散るに切崩さる淺井方切ほこり勝に乗じて阿閉上坂を始め七千餘騎一足も引じと突てかゝる木下森が備も敗れ墮つたる十三段の備十一段迄切崩され信長が旗本も大に騒動し既危かりしを神君御覽じさらばかゝれと下知し給ひ越前勢をば追捨て淺井が勢の中へおめき叫て馬煙を立てかけ入給ふ稻葉伊豫守の今朝より徳川勢の後陣に備て手を空くして口おしく思ひ居たりしかばよき幸と同じく馳入て突かゝる横山の押に備たる氏家卜全伊賀伊賀守範秀が三千餘騎横鎧入て徳川勢雙方よりもみ合攻立れば淺井長政力を盡し戦へ共終に戦ひ負て惣敗軍とある神君齒がみをあし衆をばげまし下知し給へば大久保七郎右衛門本多平八郎酒井左衛門尉小笠原與八郎等先を争ひ奮戦す青山虎之助定規の是より先に討死す又淺井方に淺井玄蕃磯野丹波守阿閉淡路取て返しけれども遂に戰勝て玄蕃淡路の引退き磯野丹波の手勢三百斗りにてむらがる敵を打破り佐和山の居城へ引取る酒井雅樂介同齋之助加納次郎左衛門同次郎兵衛安養寺甚八郎同彦六郎細江左馬之助早崎吉兵衛上阪五助同彌太郎同次右衛門等討死す遠藤喜右衛門の昨

夜長政の前にて軍議有し時某ふ於てハ味方万一敗軍と見るならば敵軍に紛入て信長と引組
て討取へしと申けるが果して其詞の如く首一級携て此首實檢入んと思ふハ大將は何方
においしますぞと言ながら信長の木陣近く進み来るを竹中久作見咎め引組て遠藤を切て首
を取る遠藤が郎黨富田才八其外弓削次郎左衛門今井掃部助も引返し討死す長政もかなひが
たく小谷をさして敗走すれば味方の矢嶋の郷尊照寺田川邊迄追討す安養寺三郎左衛門經世
生捕とあり信長の前に引出さる信長兼て其名を聞知給ひければ其死を救され我此軍威に乗
じて直に安養寺に案内させ小谷攻んと思ふハいかよと問れしに安養寺答へけるハ長政今日
敗走するも雖ども父下野守久政が勢千八百計も備て城を守れば輕々しく押寄給ハんの御遠
慮あるべきにやといふ信長其詞を尤なりと小谷の重ての事にすべしとて安養寺をハ助命
し其上願のまゝに小谷へ送り歸されけるかくて今日討取敵の首を討ふるに三千百七十級多
くハ徳川勢に討留し所之信長神君の大功を感ぜられ今日大功不可勝言ハ前代無比倫ハ後
世誰爭雄可ハ謂ニ當家綱紀武門棟梁一也其感狀ハ長光の刀を添て進上せらる此刀ハ光源院將
軍(義輝)の秘藏にて其後三好下野入道鎌齋所持し世に勝れたる名物之(柏崎物語に此時信

長より爲朝の川ひたる矢根を進上せらる御當家よて鎗になさると見ゆ)其外民家稻葉伊賀
伊賀守三人も横鎗の功を賞し感狀を賜はり諸手將卒の勳功もらさず褒美せられ姉川に於て
勝利の凱歌を奏せらる(基業岐阜記編年紀聞)

横山落城付佐和山城攻の事

姉川の軍大勝により信長頻りに神謝の詞を盡され神君ハ御勢を引具せられ三州へ凱旋し給
ふ信長の直に横山の城を圍攻らる大矢木土佐守三田村左衛門野村肥後守同兵庫頭等随分と
防戦すといへどもかゝる難く遂に城を渡し大野木三田村野村等の小谷に引取れば此所の
木下藤吉郎秀吉に守らせ姉川にて討取首共ハ京都へ遣ハし義昭將軍の實檢に備へ六條河原
に梟首せしむ京都にてはわなをびたハしの首かなど是を見る貴賤どもハ驚歎し膽を消し
けるとなり信長七月に至り軍勢を進て磯野丹波守が籠りたる佐和山の城を圍攻らる此城峻
峻にて要害の地あるに丹波守さる老練の宿將にて防戦の術を盡せば容易に攻取がたく其上
織田方軍勢打ついきたる合戦に人馬も多半疲れしかば此城重て攻べしとて城の近邊に獅子
垣ゆひ廻し鳥居木口百々屋浦に向城をとり丹羽五郎左衛門に守らしめ小方尾末山に市橋九

郎左衛門南方佐渡山に水野下野守西彦根山に河尻與兵衛等を定め佐和山を押へさせ信長の入浴ありて義昭將軍へ謁し姉川の軍勝利の事を告られ七月八日岐阜城へ歸られける(基業岐阜記織田真記)

上杉謙信通信付信康君元服并大風の事

神君は是より先に今川氏眞の媒介にて越後上杉謙信と音信を通せられしが今年七月下旬に至り遠州秋葉別當加納坊光幡其甥熊谷小次郎實包を使者として越後に遣はされ今より後彌仰合されたま旨にて濱松御城の圖太刀馬代金十兩贈らせらる謙信大に悦び當時海道第一の弓取と傳へたる徳川ウ我等武畧を慕ひ使節を贈らるゝ事謙信が大慶不_レ過_レ是とて兩使に引川物若干あたへ徳川家の老臣に書簡を酬ゆ其文にいふ

追て眞羽二十尻任見來差遣し誠に大喜之至し

雖未_レ申_レ通_レ一筆令啓達し仍従家康使僧大慶不_レ過_レ之_レ以_レ向_レ後無_レ二可_レ申_レ合_レ心中_レ以_レ畢宜取成願入_レ以_レ尙委細可有口上恐_レ

八月二日

謙信在判

松平左近丞殿

甲州信玄方への翌年_二至り越中の推名肥前守より此事の告知らせけれ_一信玄大に愁悶す(甲鑑并編年)扱又た八月廿八日に神君の御長男竹千代君十三歳にて御元服まします岡崎二郎三郎信康君と名乗らせ給ふ兼てより信長の御娘を以て御配遇の御契約により織田殿より信の一字參らせられ信康君と名付られし一族譜代の輩に及ばず御家人被官の面々各酒肴を献じ目出度賑ひしき事共あり此御祝儀として濱松の城に親世宗雪を召され猿樂興行あり一族譜代の御家人被官の將士のゆ迄もなし三河遠江の百姓町人共迄見物をゆるされしかば殿上殿下に群集して見物す猿樂夜に入て終りければ宗雪以下猿樂とも御前に召て三郎殿御祝儀の能執もよろしく出来たり殊更親世十郎か仕たる鉢の木_一近代の出来能と大に御褒詞下されしに十郎進出鉢の木の御能の去ル永祿年中駿河崩の時今川氏眞の所望にて仕り其後打絶し所今若君の御祝儀に仕るよし申上る御祝儀の御席にて不吉の事を例よ引たるとて御氣色よろしからず十郎の御勘氣を蒙る是を見聞する御家人どもかゝる御祝儀に十郎不吉の詞を申出す事不思議され此若君始終の御行末いかゞあらんとて耳語しとぞ此

月世上一同大風烈しく吹て諸國五穀實のらず其外神社佛閣を吹倒し喬樹大木を抜折たりま
して民家の顛倒せざるは稀之けり其中にも三河遠江兩國の別して此風甚だしく高き所の民
屋の悉く吹倒しぬ三州の三奉行高力左近本多作左衛門天野三郎兵衛逐一査檢し家居の大
小破損の多寡にしたがひ分限に應じ金銀米錢を施され其品に依て恩貸せられ修造仰付られ
ければ諸民御仁政を仰ぎ尊び父母のとく思ひ奉る此事のみよかざらず年頃貧民を賑ひ救ひ
孤寡を恵み給ふ事なみくならねば國民一同あつき順ひ奉る其頃他國の守護地頭には聞も
及べぬ御仁政をかしくみ何卒耕作に力を盡し軍役兵糧の御用に立たしと心懸けるぞありが
たき民の歸する事水の下に就がごとし仁者の敵あしといへる古語も思ひ合せらるゝ事こそ
有けれ(編年)

野田福島軍付本願寺の事

此頃七月廿七日攝州にては細川六郎昭元三好山城入道笑岩同日向入道北齋同下野守其身爲
三入道齋藤右衛門太夫龍興香西越後守岩城主税助藤原玄蕃頭松山彦十郎等二味峰起し都合
一万三千餘人野田と福嶋に新城をかまへ楯籠り又安宅甚太郎の一千五百餘人計具し淡州よ

り出船し兵庫浦に着陣し相互に謀し合せ國中を侵掠し京都に亂入せんとす織田殿出馬遅々
に及べ、後潮の程はかり難しと五畿内の味方より追々岐阜の城に注進す信長かくと聞給ひ
京都を再び三好黨馬蹄の塵に汚させて口惜き事とて八月廿日三方餘の軍勢にて濃州岐阜
を出馬し給ひ横山の城に宿陣あり廿七日攝州に發向せられければ先手の諸將の天滿森川口
渡邊神崎の邊に進み野田福嶋を攻かむ九月四日に義昭將軍も攝州中嶋の内堀迄出馬し給
ふ信長の旗本は同月九日天滿の森に陣をすむ此時根來雜賀湯川紀州奥郡の軍勢も二万計
り馳加はり攻ければ野田福嶋防戦術盡て見へにけり其頃攝州石山本願寺光佐顯如嫡子光壽
教如の朝倉義景の聲に定めければ兼々淺井朝倉を救援せんと企てしに三好一黨も元來朝倉
に一味し今度も攝州に蜂起せし事なれば本願寺父子三好三人衆の方へ使者を通じ野田福嶋
へ後詰の事を約したり然るも織田勢の近日野田福嶋を攻抜て本願寺の大坂城を攻落さん勢
なりと風説を聞て光佐上人に恐れ急に門徒の僧共のいふ迄もなし檀家爰かしくより催促
しければ千人餘りにあれり然るに十三日西風あびたしく吹て淀川水たゞへたるに三好方
より堤を切て落せば川水俄に織田方の陣所に押入て寄手の陣々大に難義に及ぶ廿日よの本

願寺方の僧俗必死を極め押よする是に機を得て三好黨も城より切て出織田勢を一時に切崩さんと突戦す織田方の本願寺衆細徒長袖の事故思ひ侮り大に切立られ散々に敗北す其中よ織田の先鋒野村越中守清友の春日井堤にて引返し本願寺方嶋源太を討取其勢も乗じ敵軍に深入して雑賀の志摩與五郎に討れたり此後ハ本願寺衆彌々勝にのり追掛しうべ佐々内藏助成政福富平左衛門正之踏留りく勇を震ふといへども門徒の僧俗猶喰付て働きければ織田勢大に狼狽せし時前田又左衛門利家かくと見るより乘戻し敵を手にたく追拂ひ驍勇を顯しければ門徒の勢是に恐れしう漸く物別れて引退く(岐阜記織田真記)

宇佐山軍付徳川家加勢赴江州事

織田殿ハ攝州に在陣し不日に野田福島を攻落し大坂石山の門徒迄も征伐せんと籌策をめぐらさるゝ所に九月廿二日江州の早馬福島に來り此十六日朝倉淺井大軍を催し三好と牒し合せ織田殿攝州在陣の虛を伺ひ江州比叡の辻八王寺に出陣し坂本邊を侵掠す森三左衛門可成ハ織田殿の仰を請て宇佐山の城を守りしがかくと聞て城より打て出敵を追散らす同十九日朝倉淺井兩家一同して大軍雲霞の如く攻よる三左衛門心の矢猛と思へども多勢に無勢せん

方なく終に大軍にかこまれて討死すれハ織田殿の舎弟九郎信次青池駿河守定綱森り被官尾藤源内道家清十郎弟助十郎等ハ三左衛門討死するを見てければ何うハ少しも猶豫すべき多勢の中へ打入て前後にあたり左右にめぐり敵大勢を打取て同じ枕に討死す朝倉淺井ハ宇佐山城を乗取て廿日にハ大津馬場松平邊を放火し廿一日にハ醍醐山の邊迄燒拂ひ追付京都へ押登らんとす佐々木承禎も朝倉淺井に一味して野洲郡に人數を押出し比叡山延曆寺の僧徒も朝倉淺井にかたられハ加勢せんと川意する旨注進すれハ信長是を聞給ひ江越の逆徒を京都へ入ん事こそ大事なれ當所への押の兵を留置急に江州へ發向せんとて野田福島の圍をどき將軍義昭卿を伴ひて一先歸洛あらんとす然しながら敵此勢ひに乗て跡を慕ふと有べきうとて柴田修理亮勝家和田伊賀守惟政兩人ハ跡に引下り城兵もしも慕ひ來らば一戦せんと思ひ定め同月廿三日攝州より都に歸陣せられ方一江州發向延引あらば淺井朝倉に馳加ハる軍勢も有べし片時も早く征伐有べしと同廿四日義昭將軍を伴ひハ江州へ信長出馬せらるれば姉川の戦ひに手こりしたる朝倉平場の合戦叶ふまじと比叡に楯籠る織田方にハ戦ひいまだ始まらざる内に勝軍したりと悦び勇む事斜ならず廿五日巳刻より比叡を取ろこみ攻んと

す信長謀策をめぐらされ稻葉伊豫守を以て延暦寺の衆徒をうたらし早く朝倉淺井等の一味をばなれ織田殿へ歸順あらば寺領を昔の如く寄附せらるべしもし又其事同意なく逆徒荷擔するならば一山悉く焼滅せんと論じけれども衆徒の更に返答もせず（大久保物語に信長の北國雪深ければ冬にならば糧米運漕を得ず北國勢の究乏すべし其時越前勢を干殺すべしと計り給ひけれども元來嶽山より糧米を送りし程に越兵少しも糧にとぼしうらず）是より先に信長京都より江州發向にのぞみ徳川家へ羽書を馳て加勢を乞はれしかば今度も神若早速御許容有て酒井左衛門尉石川日向守松平勘四郎松平主殿助本多豊後守松井左近等を將とし遠三の軍勢三千餘人差向けられ引つゝ鳥居内藤牧野等をも遣はさる此輩江州表着陣すれば信長早速對面せられ速かに御加勢遣はされしを神謝あり此輩をも厚く慰勞せられける朝倉淺井兩軍に徳川殿着陣と聞て大きに驚き扱ひ例の烈しき一戦に及んうと大に恐れけり此頃攝州にては野田福島の城兵等虛を伺ひ京都に切て上らんとせしうと高屋の城に島山若江の城に三好義次片野に安見右近其外伊丹惣河次木高槻等の城々皆信長の味方されば容易に城より打て出難くむあしく月日を送りける（基業織田真記）

江州堅田軍坂井右近討死付朝倉淺井和睦の事

十一月に至り江州堅田の住人馬場孫次郎猪飼甚助居初又次郎三人の今度織田殿へ降参したりしが或時や出けるの我々御味方に参るといへども然るべき大將あしむし大將一人下し給ひらば朝倉淺井と一戦して忠勤すべしと望しうは信長尤もなりと同意し給ひ坂井右近安藤右衛門浦野源八父子を將とし二千餘人を差添て堅田の猪飼甚助が館へと向はせらる朝倉方は是を聞て二万餘人を押出し同月廿六日の早天より押寄たり坂井右近の先に姉川の戦に不慮の敗北を大に恥て今度の加勢を望み來りければ是非討死と心懸しかど小勢にて越前の大軍を平場の合戦中々叶ふべしとい見えず依て右近が家人ども諫ける敵の目に餘る大軍あり味方のわづかの小勢を以て戦ふ時の千に一ツも利有べうらずかゝるも引も折による一旦此所を引取て織田殿に告て援兵を待請て合戦し給へとやたるに右近はしばらく眼を閉て思案するやふかりしがやがて眼を開きやけるの汝等がや所の尤も一々道理至極せりさりながら此度の我等が討死すべき時節到來すといふ物之其故如何といはんに先日姉川の戦に我等織田家の先陣にありて一番に淺井が爲に打破られ一子久藏を始として頼に思ふ家の子共大勢討

死させ味方の諸陣を混亂せしめし事我生涯の不覺たり然るに今度馬場猪飼居初等より大将を望むにより諸將の中より我等第一に撰み出され此所へ來り又朝倉勢に對し一戰にも及ばず此所を引退く時の味方の嘲りのしばらく差置朝倉淺井が軍勢の思ひん所我等一身の恥辱のいふ迄もなし織田殿の御名迄も汚さん事是にすぎざる不忠の有べからず同意の者のなきあらば我一人なりとも討死して武名を天下後世に留めなんと我志ざし決せりといひければ皆尤もと返答し必死と決定して敵を待居り去程に朝倉は二万餘騎にて押寄たり右近かねて討死と定ければ矢一筋射出すとひとしく右近馬場居初浦野源八父子同しく馬を馳入て十文字に破り巴の如く追廻りかけ抜て見れば二千餘騎の者共討つうたれつせし程に七百計りに成る右近は其勢を押まどひ朝倉が旗を目にかけ進みより間近になれば真蕤に馳入る朝倉が先手は中を破られしと鎗を並べ馬のはなを揃へて待居たる所へ會釋もあく突てかゝればこらへかねて中を開て通す二陣請取て逃に討んと争ひけるが如何したりけんあちけだちて討留得ず朝倉勢には前波藤右衛門堀平右衛門并右筆中村空平も討死す朝倉式部少輔景鏡山崎長門守告家赤尾美作守等も防兼てしきりに下知し矢砲を雨霰の如く射かけ打かけしかば坂井

が手勢共眼前に討死し進兼たる跡を見て越前勢一陣二陣の兵士共坂井馬場等が跡を取切て前後より差はさみ攻る右近今は是迄ありと思ひけん馬場孫次郎居初又次郎浦野源八父子もろどもに多勢の中に切て入り同じ枕に討死す依て越前勢彌々勝に乗する所に三河よりの援兵松平勘四郎信一本多百助信俊を魁けとして圓に備て越前勢に突入て奮戦すれば越前勢是に突立られ逃走れば信一信俊等は長追もせず物別して坂本の陣所へ引歸す信長徳川勢の猛勇を感稱せられ右近か忠死を憐み是非朝倉淺井を討果すべしと籌策をめぐらさるゝ所に佐々木承禎は徳川勢松井左近等と合戦し打破られ承禎降参す淺井朝倉の輩も粮米は延暦寺衆徒の方より助けしかば事欠には及ばざれども寒天の長陣大に疲勞せしうば機を察し信長ひそりに禁裏へ密奏の旨ありければ此坂本へ勅使参向有て雙方和睦して天下大平の功をなすべしと繪旨を下されしうば義昭將軍二階堂駿河守孝秀を御使にて(二階堂後に一色と改む)繪旨を兩陣に遣りし雙方和睦の事を扱ひしむ信長兼て斗られし事あれば普天の下離人う王命に違ひんと忽ちに領掌せられしうば朝倉淺井寒天永陣に退屈の折うらなれば是も速かに勅詔に應す依て十二月十三日雙方誓詞取りし義昭卿も歸洛せられ十五日に朝倉淺井坪

笠山五ヶ村の陣を拂て越前江北に歸陣すれば信長の十七日歸陣せられ徳川勢當年二度迄援兵を遣はされたるを厚く謝し將士の軍功を褒美せらる將軍暇賜りて三遠に歸りける(基業織田眞記別本信長記)

北條氏康病歿付今川氏眞逃于濱松事

北條左近太夫氏康の祖父長氏入道早雲以來父左京太夫氏綱の舊業を受關東を割據し氏康にいたり殊さら沈毅にして將略有ければ十六才にて武州小澤原の戰は武容を顯はしけるより生涯勝軍三十六度其中にも廿四歳の時上杉管領八万餘の人数を敵とし氏康八千の人数にて川越の夜軍に討勝しより武威關東八州にういやりし其上仁愛の心あり民を憐みければ坂東の諸民恩澤に浴し驩虞の思ひをあせり然るに今年元龜元年十月三日五十七歳にて不起の病におりされあへなくも木枯の風にさそられ化し野の朝の露と消うせぬれば八州の士民實に父母を失ふとく哀しみけるぞことわりなれ代々の例にまうせ小田原早雲寺に墓所を營むべしと評定せし所に常村下總國古河の左馬頭義氏朝臣(原書に成氏とす古河公方原書に見るに成氏の明應六年九月晦日卒其孫義氏の時氏の子にて母は北條氏綱の女と見ゆ時氏も永祿

三年五月廿七日卒したれば此時の義氏とせざるを得ず)の母は氏康の妹なれば懇望し一寺を建立し大聖寺と號し氏康の靈牌を安置し法號は大聖寺東陽岱公と贈り早雲寺に墓所を築き双方にて法會佛事を懇慫に營みける爰に今川上總介氏眞は駿府を二度武田信玄入道が爲めに奪はれ小田原へ逃來りしに氏康の婢の事故其不幸を憐み早川は居館を營造して懇養ひ置たり然るに北條左京太夫氏政を繼て當年三十三歳父は別れ心細くや思ひけん小宰相といふ女房へたより此後信玄と和睦入魂の事を種々かたはるに信玄も徳川家と合戦の謀をめぐらす最中ゆへ早速に氏政と和睦をどへの互に一味の契約をあしける依て密々北條へ使を送り今川氏眞を養ひ給ふ事の虎を養ふ思ひひへし其ゆへ徳川家より氏眞を扶助の苦情今も絶へずと承れば遂に御敵と成るべし毒の虫の腦をひしくといふ諺あり早く誅戮せらるべし然るに於て今川家傳來の寶物京極黃門定家眞蹟の伊勢物語は當時信玄か手にあれば是も北條家へ進上すべしと申送る氏政の父氏康との違ひ闊弱の將なれば信玄の予所を信用し氏眞を殺害せんと用意す氏眞の北方は氏政の妹なりしが此計策を聞付大に驚き氏眞に語れば氏眞驚天し手の舞足の踏所を知らず船よて逃出し遠州濱松に來りひたす

ら御仁惠を頼み奉る神君へもとより義元の舊好を捨給はず濱松の近郷に居館をしつらい氏
眞主從留置て殊更優待まじくければ駿遠三の國民ども徳川家の寛厚の御仁徳を仰き慕ひ
ける(基業甲鑑編年)

織田信長江州諸城攻の事

元龜二年辛未正月五日神君從五位上にのぼらせ給ひ同十一日に侍從に任せらる同二月に
織田信長丹羽五郎左衛門長秀市橋九郎左衛門長隆水野下野守信元河尻與兵衛鎮吉をして
磯野丹波守が江州佐和山の城を攻しめければ晝夜を分たず攻けるに磯野も今の力盡て城を
開き高島に引取り依て丹羽長秀と佐和山の城を守らしめらる然るに淺井備前守長政再び
和睦の約を變じ五月六日姉川に出軍し横山の城への押の兵を殲し播磨次郎樋口三郎兵衛が
守る所の箕浦の城を攻たりける此時横山の城よの木下藤吉郎秀吉守りたりしが忽に城よ
り打て出堀樋口が郎等多羅尾相摸小川平左衛門等討死す其時丹羽長秀も佐和山より出張し
ければ淺井が勢疲れて敗走す信長此程の勢州長島の敵と合戦に暇なうりしうば八月十八日
に至りて又大軍を引率し江北へ出馬せられ横山に陣をどられ廿六日長政が構たる山本山の

要害に押寄小谷の間を取切て與語木木の邊を放火せらる九月朔日に柴田勝家丹羽長秀中
川八郎右衛門等に命じ志村の城を賈落し城兵六百餘人を討取夫より小川の城に押寄らる守
將小川孫一郎入質を獻じて降參す又金ヶ森の城を取圍まる此城も入質を出して降參すれば
三城どもに暫時に落去し此上の直に畷山を燒討せんとて先々凱歌を行へる(織田眞記)

山門燒討の事

九月朔日より三日に至り信長志村小川金ヶ森三城を攻落し猛威に乗じ十二日に大軍を勢
揃して比叡山にぞ向ひける是延曆寺の衆徒朝倉淺井に一味して信長を討亡さんとはかり朝
倉淺井の方へ軍糧まで運ぶが故に信長の憤り大方ならず急に攻立られけるなり山門の大衆
の背より猛威を張て王命をも武威をも物の數とせざる習ひなれば法衣の上に甲冑を着し念
珠を離すまじき手に太刀長刀を提げ坂下に立て散るに切立れば織田勢是に追崩され坂より
下に追おとさるされども寄手は大勢ゆへ荒手を入替踏越し攻取ふ其間に信長は忍の兵を
山上に粉入しめ堂社佛閣僧坊悉く火を放たしむ折ふし魔風吹散り峯谷の院坊に黒煙
覆ひ火焰一圓にはびこれは山法師共は心の矢猛にはやれども跡よりは猛火に責られ前より



織田信長
比叡山茂
燒討



は敵にかこまれ逃出へき道はなし寄手の大軍時を得て切伏難伏たまく逃るゝ者は縲紲の辱を受法師兒童をしめて助る者は稀なりけり今年今日いかなる日ぞや元龜二年九月十二日其古桓武天皇傳教大師とて心を合せ創創し給ひし王城鎮護の靈場根本中堂文珠樓日吉山王二十一社凡山上の三塔院と經藏佛宇神社一字も不殘焦土となる淺ましかりける事ども此時金剛相摸といふ惡僧強弓の手だれありしか如意が嶽より二度迄信長をねらひ射たりされどもわたらす信長山門を燒滅し山麓に新城を構造し明知十兵衛光秀に守らせ信長は岐阜へ歸陣せられける(編年織田真記)

三遠所々合戦の事

同年二月十六日武田信玄は甲府を出馬し富士大宮に宿陣して駿州田中へうつり廿四日遠州小山に向ひ能満寺の城を取立大熊備前を籠置三月初旬遠州城東郡高天神の城を攻る小笠原與八郎長善武功勝れたる者みれば防戦のさき随分と堅固之(甲陽の説にも小笠原衆去年姉川に於て信長は逃たるに家康手からを仕り大軍の朝倉を切崩す家康下にて小笠原衆初合戦よく仕るゆへ其手柄を鼻にかけ先へ出し信玄の馬もひらきたるよも武弁立をすると見へ候

としるせり)次の日信玄兵を引揚て乾懸川久野の諸城を巡見し信州伊奈に馬を止む信玄か家人秋山伯耆守晴近は東三河設樂郡に出馬し田嶺の菅沼刑部貞吉か家人城所道壽築手の奥平美作守貞能が家人山崎善七郎をかたらひて刑部美作兩人も味方になす是を聞て野田の菅沼新八郎定盈設樂甚三郎貞道西郷の西郷孫九郎清員押寄るを見て秋山へ引退く其時兼て信玄へ降参したる天野宮内右衛門景貫其子小四郎景廣人数を出し長篠の菅沼新九郎正貞を攻る新九郎迎へ戦て菅沼道滴を始め互に死傷多し秋山伯耆并城所道壽も來り新九郎が家人菅沼伊豆満直をかたらひ新九郎をも信玄に降参せしむ道壽又新八郎定盈をもすゝめて武田へ降参させんとしけれど定盈は義を守りてしたがりず島田の菅沼伊賀三照の武田へ降参し小大膳定利同信濃(後に十郎兵衛)田嶺を出て濱松へ参り昵近す扱三月廿四日信玄東三河に兵を進め四月七日遠州所々の郷士共信玄にかたらひれ一揆を發し築手口より岡崎へ亂入すを聞へしかば青山喜太夫忠門弟平太夫卯野小兵衛河知和右衛門玄鉄を遣はされて是を討しめ給ふ喜太夫の討死し其他の人々追討して一揆等の吉田口より退きたり四月十五日に信玄西三河足助の城へ押寄たり城主鈴木越後重直應じけるにや城を棄て逃去ければ爰に下條

伊豆信氏を籠置て大沼の木村藤九郎安信太代の松平傳藏親清淺谷の梁瀬入道道悦足利の給
 木忠兵衛原田彌五郎八梁の那須惣右衛門を攻たるに此輩皆小身あれば城を開て濱松へ参り
 たり信玄の夫より二連木吉田邊へ軍をすむ神君是を聞召五千斗の御人數にて吉田表へ御
 出馬あり信玄山縣三郎兵衛小笠原掃部相木市兵衛三河先手銃手田嶺長篠衆案内として二陣
 の四郎勝頼都合其勢一万三千餘を高地段々に備ふ神君の吉田の城に入給ひ大手門櫓に扇の
 御馬印を立させ御覽じ給ふ酒井左衛門尉と山縣三郎兵衛の兩手合戦す山縣が手より廣瀬郷
 右衛門景房と御味方戸田左門一西鎧を合せ三科傳右衛門形幸(甲陽に肥前とす)御味方大津
 土左衛門時隆と鎧を合す三宅彌次兵衛正次も後殿して四ヶ度山縣が先手を追散らし互に物
 別れして引退く此時信玄の大津三宅が勇猛を感じかゝる勇士を討べからずと頻りに下知む
 神君の廣瀬を稱し給ひ菅沼藤藏をして其姓名を問ひせ給ひしとぞ(一説信玄戸田大津三宅
 が勇を感じ此後吉田の城へ廣瀬三科を使とし金咽輪を贈りしといへり)明君英將互に士を
 愛し給ふ所有難き例といふべし五月に信玄東三河設樂郡まで侵掠し半に一の宮にて一戰
 して甲府へ歸陣す小林傳四郎吉勝が御馬先にて敵を組討し片腕を切落されしも此頃一の宮に

て信玄と一戰ありし時の事とぞ七月廿五日濱名の郷主大屋安藝政頼信玄に降参して其所を
 捨て去ければ其他は戸田三郎左衛門忠次本多百助信俊に分ち給ふ其頃織田信長は老練の信
 玄しばしば三遠を侵掠するよし聞給ひ濱松の信玄が領地に近し早く岡崎に移り住給ふべし
 と仰進らせらる神君聞召岡崎に移る事いまだ遅うらざるとの御返答あり扱近臣等に向ひせ
 給ひ信長何とてかくや送られしや我當城を避る程あらば刀を踏折て武門を止むべしと仰け
 れば人々其御勇銳を感じ奉る(此一條原書脱す今基業編年甲陽の説によりて記す)

按るに信長いふあれば無名の軍を發して三遠を侵掠するぞといふに其本源の足利將軍
 義昭卿近年織田殿の暴横跋扈の猛勢を厭ひ猜み今年九月初旬松原道友尼子新左衛門を
 使としてひそかに信玄誅す(本書の儘玄の信の誤り)氏康をかたらし淺井朝倉及山門の
 大衆と謀し合せ織田殿を討亡さんとてしばしば甲越駿へも密旨を仰遣はさる信玄元來
 中國の旗を揚て齊桓晋文の霸業を志ければ是を幸ひとし徳川家の織田殿第一の依頼せ
 らる所の奥國あり徳川家をさへ傾覆せば織田殿を討ん事何の難き事あらんと思ひ立
 ち之然れども無名の軍は發し難ければ徳川殿最前に天龍川を限り互に切取べしと約せ

られずめら今大井川を限りて埤とするよし仰らるゝの番盟に違へりて冤詞を造りて其名とすめらの入道が老算妙謀孫吳を欺とらゝとも其實は亂世の英雄治世の逆賊と云へし

正校 三河後風土記卷第十二終

正校 三河後風土記卷第十三

神君大井川御巡見付信玄姦謀の事

元龜三年壬申閏正月十三日神君大井川金谷邊へ御馬を出さる酒井左衛門尉忠次小笠原與八郎長善の伊呂瀬を越して鳴田の河原に陣を張て十九日濱松の城に歸らせ給ふ甲州の武田信玄は越中の椎名肥前守泰胤が注進にて此節に至り越後の上杉謙信が徳川家と盟約を堅め一味合昧ありと聞知て大に驚き思ひ彌三遠に働いて徳川家を傾覆せんと急ぎ計畧を廻らし詐謀の術を設け濱松へ使を遣らせ兼日信玄と徳川殿との天龍川を界として東西を分領すべしと誓約をなせり然るにいかなれば大井川迄御出張以哉さらに心得難しとや送る神君聞召我全く領地の境界巡見せんがため出馬する所なり信玄こそ早くも誓約を變じたれ其子細の先に大井川を界とし互に手を出すべからずと誓約する所程も亦く秋山伯耆をして遠州を侵さしめ其後我等小勢にて領地の内を巡見に出して山縣三郎兵衛大軍を以て合戦を不應に仕あけたり是も信玄が命じてしからしむるとの鏡にかけて見るが如し去年も度々信玄大軍を以て遠州三州所々の郷邑を亂し我被官どもの小城を侵掠し獲糧を擧動かたら今我に誓約違

犯するなど、送る全く信玄詐害を以て事を左右によせて鋒有、及我所領を侵掠せんと、の
 森計と大に怒らせ給ひ此後、彌信玄の御敵となりける。四月廿八日に上杉謙信の徳川
 家の御手合として信州河内嶺迄出馬す武田四郎勝頼伊奈部にありしがかくと聞より八百許
 りの勢にて晝夜を分たず馳つぎ一戦をいどみたり謙信の勝頼若手にて我八千の人数に對し
 八百の勢にて敵せんとする勇健可感と大に稱美し勝頼に取あはず馬を返し納たり信玄の此
 後三道の繪圖を以て地理山川の險夷村邑の廣狹查檢し諸軍の手配をなしやがて三道亂入
 せんとぞ企ける(基業甲鑑編年)

奇妙御曹司元服并初陣の事

織田信長の今年三月五日重て江州に出陣せらる小谷城より十里餘に山本山とて城あり此所
 淺井が被官阿閉淡路守三千餘騎にて守りけり信長此所迄軍勢をすゝめ與語木本邊を放火し
 淺井を引出さんと種く計略をめぐらしけれと淺井打て出されば織田勢の軍を歸し志賀郡を
 めぐり信長上洛あかて妙覺寺に陣どらる是の細川六郎岩成主税介三好左京太夫松永彈正父
 子が三好一黨に組し朝倉淺井と謀し合せ逆謀をめぐらすゆへ是を誅伐せらるべきが爲あり

し所細川岩成の早速降参し本願寺光佐も今度いかい思ひけん信長の陣へ使をたて、珍器數
 多きいらせ其外の皆落失けれ五月十九日信長の岐阜に歸陣せらる此春の頃信長の嫡子奇
 妙御曹司元服あり秋田城之助信忠とやは是之七月十九日信忠甲冑着初せらるやがて信忠初
 陣あるべしとて信長同伴せられ江北淺井郡へ出馬せられ雲雀山虎御前山へ取のぼり小谷の
 邊を燒拂ひ廿二日の柴田佐久間木下等を先手とせらる藤吉郎秀吉火をかけて山本山の城を
 攻れば城主阿閉淡路守命ををします諸將に下知して防げども大軍にて八方より攻入れれば
 阿閉今の防へき術盡て城兵二百餘人まで討死して此城も落ければ廿三日信長も小谷迄出馬
 あれば淺井一家の軍勢を以て敵せん事かなひがたくや思ひけん又、越前へ早馬をはしらせ
 急を告て加勢を請ふ朝倉義景一万五千の人数を引具し廿九日小谷に着陣す依て信長も軍を
 進めて虎御前山に陣を張り朝倉に對陣せられければ日數をへて朝倉は討て出ず八月九日
 には前波九郎兵衛父子富田孫六郎毛屋猪之助等皆織田家へ降参す朝倉淺井は彌討ても出ず
 其時義昭將軍よりは度々信長の陣に使もて歸陣を進められければ虎御前山の留守に木下藤
 吉郎秀吉を残しとめて信長信忠父子八月十九日横山まで歸陣せられける(織田真記)

遠州一言坂軍の事

武田信玄は三遠二州を攻取て徳川家をさへ傾けなば京都までの間に手に立ものは有べから
 すと深謀遠慮を帷幄の中にめぐらしけるか手配既に定りければ元龜三年十月中旬（原書九
 月とするは誤之大成記御年譜甲鑑十月とす）山縣三郎兵衛昌景に五千余兵を添て信州伊奈
 より東三河よ向はしめ其跡より信玄三万五千の軍を引具し甲府を發し遠州乾城主天野宮内
 右衛門景貫を案内者とし多々羅飯田の五城を攻落し夫より久野の城に攻掛り袋井見附の間
 木原西嶋に陣す上杉謙信か所領越後は此節もはや雪深して加勢出す事かかひ難を察し十月
 を待て三遠に亂入せし之濱松にては神君斯と聞召て大久保七郎右衛門忠世木多平八郎忠勝
 内藤三左衛門信成等に四千餘の人数を添て斥候の爲に見附の宿迄遣はさる此輩三加野木原
 西嶋邊迄張出し武田か軍備の様を窺見るに信玄はさかには是を見てわの敵を逃とべからず悉
 く討取れと下知すれば武田勢の心得たりとて袋井林の陰より段々人数を張出す内藤三左衛
 門かくと見て諸將に向ひてやけるの今諸將の軍勢八千のうち四千のこゝに來れり此勢を以
 て只今武田が犬軍と合戦を取結ぶ程ならば勝負の程尤危し爰にて打負なば後日の合戦な

りがたかるべし何とぞして此人數を引とり織田殿へ加勢の事や遣はし待合せて戦ふべし然
 りといへども兩軍かく間近く取結びし上の此人數を引揚て歸ん事三左衛門にのなるまじく
 い誰かひ人下知して引揚給へどやければ其時本多平八郎忠勝廿五歳なりしが黒糸の鎧よ
 鹿角打たる兜を着崎崎切といふ鎧を馬手にかいこみひかへたりしが進出でそれがし引揚見
 中へしとて從士大兼彦八郎に下知し足輕を差添て見付の町に遣はし戸板壘越等の燒草を
 路に積せ合圖次第に火を放つべしと約束して身の崎崎切の鎧を提て只一騎三反ばかりへた
 てたる敵味方の間へ乗入士卒を指揮し馳廻り味方を引揚たる其武者ぶりの勇ましきを武田
 勢も感稱し諸軍皆眼を付猶豫しける間に平八郎采幣をふりたて味方の兵を脇の小路に引取
 敵陰をかたどり足輕を立燒草に火を放ち其烟に乗じ引とる所に甲州勢は山縣三郎兵衛先手
 どし思ひしより地理を心得て引取味方を喰留て悉く生取にせんと一言坂の下迄乗かゝる
 此時都筑藤一郎の頼に矢を以て敵を射落し大久保勘七郎忠正の鉄炮を放て敵を打倒し大久
 保七郎右衛門忠世同治右衛門忠佐同荒之助忠直本多平八郎が屬兵櫻井庄之助三浦竹藏大原
 作之右衛門同物右衛門柴田五郎右衛門村越與惣右衛門等小返して突戦す平八郎敵味方の間

を縦横に乘制て味方二騎も討せず軍を全くして濱松に歸りしかば神君平八郎が功を感稱し給ひ成瀬吉右衛門正一を以て忠勝に仰下されしに汝今日の舉動平八郎の思はれず唯是八幡大菩薩の御化身と覺ゆると褒詞を賜りしかば諸人はより益平八郎を鬼神の如く恐れける扱甲州勢の中よりして一首の歌を書て一言坂の上に立たり

家康に過たるものが二つありからの頭に本多平八

此歌後に聞け信玄近習小杉右近助といふ者の所爲なりとぞ唐頭の其頃世に稀なる品あるを三河武士の十人の内七八人の唐頭をかけたなり故にめくのみみけるとぞ(柏崎物語に唐頭の元龜二年始て蠻人持來る牧尾牛といふ獸の尾なり三河にては本多平八郎内藤三左衛門川井十度兵衛等七人は是をかけたなり依て武田家の者共の小身の御家に過て多しと申けること見ゆ)

按るに原書には此時神君三加野迄御出馬あり内藤本多が諫めに依て先に濱松へ引取給ふとて眞籠に御馬を留め諸將の歸るを待給ふとしるすといへども大成記基業編年等には神君御出馬のましまさず大久保内藤本多等のみ斥候に遣はされしとす今是に従ふ又

原書に大久保忠佐神君濱松へ御歸城の時其御馬の鞍壺に葉があるべきを葉をたれて逃給ひたりと罵りたるよしを記すこの日御出馬なけれぬ逃給ふ事有べきまわらず是皆妄説之故に剛り去りの甲陽の説にも家康衆隨分の侍大將四千餘の人数にて打出るとい見へて御出馬の事なしたし忠勝今日の働の甲州にて昔の足輕大將原美濃横田備中小幡山城多田淡路山本勘助此五人以來信玄家にも多くなき人と相似たりとしるせしを見れば天下の公論を志るべきなり

二股落城付織田家援兵着陣の事

武田信玄の見付驛より江島島にうつり四郎勝頼武田左馬助信豊穴山信若入道梅雪三將を以て遠州豊田郡二股の城を攻しむ此城の守將中根平左衛門正照小勢ある故に濱松より加勢として兼てより青木又四郎吉繼(原書貞治)松平善兵衛康定(善兵衛正親が子後石見守)等を籠置れしかば甲州の大軍城をかこみ新手を入替々攻るといへども少しも氣を屈せず防戦す信玄再び軍伍を整へ押寄て透間なく攻かゝるゆへ今の城兵も難備のよしに聞へしかば神君五千餘の御人数にて笠掛山まで御出馬あり信玄方には兼て山縣秋山を進め平井に陣取日保

田に出軍し濱松の方へ備へ猶も此後詰あさへの爲に馬場美濃内藤修理其外北條氏政より信
 玄方加勢として来る勢千七百計り信玄も旗本勢都合四千餘の兵を以て前後より狭み討んど
 す神君の御勢前後の敵にあたり難ければ天龍川を越て引取給ふ武田勢の其間五六間斗に退
 來りしかども御味方難あく川を越へ引取給ふ馬場美濃是を見て信玄の前に來り只今まで地
 圖を以て考へしへども此川淺深心得がたき所今日濱松勢卒示に河を渡り淺瀬を敷たり此後
 のよく渡る所を知りしとすける（以上基業に記す所の甲陽の説に本つきしなり尤も實事へ
 原書にも編年にも説同じ神君の後詰をしらず二股落城とす誤れり）然れども城兵猶も力を
 盡し防戦し寄手上野松井田の城主小宮山丹後始よき者多く討れしかば信玄竹抱を問なく付
 て水の手を取れと下知す左馬助梅雪はかりて此城西の天龍川に臨み東の小河あり天龍川の
 方に水矢倉有て城中に水を汲を見えたりとて大綱を以て材木數多筏よ組て川上より流しか
 ければ水路をふさぎて水矢倉より水を汲釣瓶の繩を切たり是よりして城兵水に渴しけれ
 ば平左衛門又四郎善兵衛等防戦の術盡て寄手と和睦し城を開て濱松に歸る神君再び二股を
 救はんとて軍勢を出し給ひけれども城兵既に退きければ戦はずして濱松に歸り給ふ平左衛

門又四郎の此事を恥て三方が原の戦ひに討死せり信玄は二股城を得て信州の先方依田下野
 守に守らしむ是より先に東三河山家三方（筑手奥平貞能長篠菅沼新九郎正貞田盛菅沼刑部
 貞吉）の輩の皆信玄に降参し野田の菅沼新八郎定盈同次郎右衛門のみ義を守り信玄に降
 らず濱名郡宇津山の皆の最も要害の地にて濱松より後詰の道を取切て武田陣營を運ねたれ
 ば誰にか此所を守らせんと神君御心を悩し給へば竹谷松平備後守清善隱居の身あがら某守
 るべしと願出たると神君其志老て益怠らざるを感じ給ひ友長村にも千貫の地を賜ひ宇津
 山の守將に命ぜられ又松平與一忠正設樂長三郎貞道は野田城に援兵たらしめ本多太郎左衛
 門青木右衛門の高天神城の援兵に遣はるる信玄の二股を乗取し後の軍威ますく遠近にふ
 るひじかば濱松の諸將とりく評議し武田勢を防んに織田家へ加勢を仰遣はされ然るべ
 しとすけれども信長へ加勢を乞ふ迄もなしとのみ仰せらる大久保酒井等の諸將ひたすら諫す
 ける織田殿數ヶ國を併吞せられ軍勢數萬ありながら御當家御加勢を願はるゝ事數度あり
 御當家のわづかに三遠二州を領し給ひ信玄と兵を結び給ふ事既に手を越へたり然るに織田
 殿の加勢を仰遣はるゝ事一度もなし今度仰遣はるゝに何の恥とすへきや仰遣はるゝべき

こと強諫し奉る神君も此上のごとて其意を任せられければ御使を岐阜につかわし加勢の事を仰遣いさる信長領掌せられ佐久間右衛門尉信盛平手監物清秀瀧川左近將監一益(織田真記にの瀧川なく水野下野守信元とす)等援軍の將として十一月上旬濱松に参着す此三人の者共織田殿の仰にて信を取んといふも味方かまへて兵を發し給ふべからずとの事と有ければ神君御心ならずも月をこへて御合戦のあかりける(成績基業編年甲鑑)

三方原大戦の事

武田信玄遠州の諸城を攻ぬき元龜三年十二月廿二日二股城を出て濱松近邊より毛鹿堀江の城に打廻らんとて近邊の村里を放火し三方ヶ原に(味方原とも書す梅花無盡藏にの箕形原とす駿遠三の三州菟牧の地ゆへ三方ヶ原とも言といへり)に陣を張り其先陣の山縣三郎兵衛内藤修理小山田右兵衛小幡上總真田源太左衛門高坂彈正馬場美濃三陣の四郎勝頼左馬助信豊左衛門佐信州穴山梅雪板垣五郎信顯望月甚八郎信益土屋右衛門佐跡部大炊介脇備に小山田備中栗原左兵衛今福丹波并ふ小宮山丹後少屬兵左の脇の原隼人佐相木市兵衛安井左近太夫駒井右京後備の逍遙軒一條右衛門河野仁科の屬兵等旗本の市川宮内少輔小山田大學

助長坂釣閑下曾根豊後室賀入道三枝勘解由左衛門武藤喜兵衛曾根内匠甘利藤藏武田兵庫助并に今度北條家より加勢として遣ひせし大道寺駿河守笠原藏人太夫等都合四方三千餘騎を段々に備たり神君是を聞き召敵我郊野を踏付るを一矢も射ざるの大丈夫にあらずも強く留る者あらば我今より軍事を抛て山林料敵の身とあるべしと仰られ八千の人数を發して三方ヶ原へ出給へば瀧川平手佐久間等の織田勢もせん方なく心ならずも引ついき押出す信玄此跡を見て諸將を集めて今日の合戦の思ひ止るべし其子細の當時世上に彼徳川をへ海道一番の弓取といへども其實の我朝若手の武士に徳川一人の上に出る者あし其上に信長が加勢九頭と開ゆ(九頭基業にの平手佐久間其外毛利河内氏家卜全林佐渡伊賀伊賀守弟安藤與兵衛遠藤九左衛門瀧川伊與稻葉伊與とす一説に佐久間平手の荒井より來る瀧川武藤彌兵衛伊賀伊賀守氏家稻葉の本坂をへて來りしが戦に及ばず道より歸るといふ其實の瀧川平手佐久間の三將先達て來り其跡の鞞の間に合ひさるべしされど佐久間の跡より來り道より歸るといふ説の誤あり)彼等岡崎山中吉田白須賀迄取つゝ水野下野守も半途にひかへたりといふ風聞もあり大軍を以て疲れたる味方にかへらば疑なく味方をくれを取るべし敵の居城

間近く働き負る時、山川險阻を越て引退く事成難し。信玄少年の昔より勝はこりたる武道の譽、皆水に成て尸の上の恥辱之勝頼と馬場山縣三人にわいのせ瀨松の北大菩薩を歴て今日、引佐郡刑部迄引取べしとて既に打立んとせし所に小山田右兵衛信茂が属兵上京能登三方原の左へ乗出し、犀谷の方より瀨松勢の備を見れば、九手の備只一重之織田勢の旗色、すみやうにして然も早く浮立てよへありと見てやがて歸りて小山田に其旨をアせ、小山田の馬場に告る馬場小山田と打つれ、此由信玄に、信玄聞て可勝と云、證ありやといへば、小山田敵の人数只一重にて、味方の五分が一と答ふ、信玄聞て證據あるや様なり、さらば旗本の物見番功者やあると尋ねれば、室賀山城行俊入道一葉軒にていしと依て一葉軒に上原能登を差そへて再應斥候に出しけるに、先刻の詞は相違なくさしも勝軍たるべしと馳歸て、故直に小山田右兵衛に先陣を命ず、此時既に中刻なり、瀨松勢の八千余騎を九備とし、酒井左衛門尉忠次、石川伯耆守數正、柴田七九郎康忠、青木又四郎吉繼、中根平右衛門正照を先手とし、小笠原與八郎、長善松平甚太郎、家忠、松井左近忠次、本多平八郎忠勝是につく、柳原小平太、康政を御旗本の先とし、織田方池川左近將監一益の柴田七九郎と大久保七郎右衛門忠世と一手に成り、佐久間右衛

門尉信盛、平手監物汎秀相並て備へ、鳥居四郎左衛門忠廣の軍目付成りし、敵陣近く乗行て見濟し、馳歸り今日の合戦の尤も然るべうらず、敵の思の外大勢段々に備を設けいかにも堅固に見へて、味方の兵を敵に對し、いへば七分が一、もたらぬ程の小勢、殊更山降に近して、只一重うのに備たれば、もし敗軍せば入替る勢もあし、信玄が引取り幸ひなりよし、左さく、い共御先手へ軍使を遣はされ、諸軍を速かに引取らせ給ひて、然るべし、夫ども是非に御一戦有へく、いは、味方の備を立堅め、鉄砲せり合に時刻を移し、合戦をもたざる、跡をなむ、敵堀田邊へ打出、いはん、時合戦をかけ給ひ、勝利の事もあるべきか、是とて、も危く、い、只今味方何の手立も、さく、競ひかゝる時には、忽ち敗北すべし、此小勢を以て、老練の武田が大軍と、雌雄を決し給はん、い、勿、跡を、しと、神君大に怒らせ給ひ、汝日頃武功の者なれば、大切の役をも、付しに、今日敵の大軍を見て、臆病神に取つかれたるや、左様に腰がぬけて、い、何の用にか、立べきと、仰らるれば、四郎左衛門も腹を立、某、左様の病に取付れ、い、覺へもなし、屋形様に、い、平生の合戦に、念を入過る程の御大將あるが、今日の何とやらん血氣、よは、やられ給ふこそ、心得ね、今御覽、い、某が、い、せし、詞、思召、わたらせ給ふべし、と言捨て、先手へ進みける、神君か、さねて、渡邊半藏守綱に見て、參れと、仰らる

れハ半藏も見て歸り敵の備り段々に厚くまがらみ味方の湖く間原に見へて以只今軍を仕掛
 給ひ利あるべからずと上る其時大久保治右衛門忠佐柴田七九郎康忠既に合戦を始んど
 いさむを半藏堅く制してゆるさず老臣ども兎角今日の合戦然るべからずと諫けれども神君
 にはたどへば屋鋪の内を敵の踏通るに出で咎めざる者やあるいか程武田が大軍猛勢なれば
 とて我城下を踏散して押行を居ながら見物するは武門の瑕瑾是に過たる事なし此後に何程
 の武功を顯はすとも彼こそ武田が勢に枕の上を踏越されて起もぬがらざりし腰ぬけなりと
 天下後世の評論こそ遺憾なれ勝負の天運にまかせて是非とも合戦すべしと宣ひければ諸將
 此上の是非もなしさらば死にせよや者どもとて其日の申刻に御旗本より大久保柴田足
 輕引具し先手を進み石川伯耆守が手先に出張して鉄炮を打かくる信玄下知して雜人二三百
 人斗り高き岡に登り織田勢の平手監物に礮を打かくる事雨の如し監物の敵我を小兒の
 わいしらひにする奇怪さよと討てかゝる武田勢も突てうれば忽ち敗れて引退く時に御先
 手石川伯耆守の者を進め岡の聲を揚武田が左備小山田備中持重が陣へ面もふらず突てう
 る石川が從屬外山小作正重一番に鎗を入れて小山田が勢をまくと立る渡邊半藏かたわらよ

り進んで長鎗を以て敵兵若干突倒して首をとるに暇わらず小山田たまたま敗走して即時に
 首二百餘級をとる馬場美濃守氏勝小山田に入りり烈敷もり返す所本多平八郎忠勝榊原小
 平太康政大久保七郎右衛門忠世突てうり馬場が勢を追立る本多が屬荒川甚太郎本多平六
 河合又五郎多門越中此所にて討死し櫻井庄之助勝次の敵の首を取り神君まきりにはやらせ
 給ひ御旗本を詰りけ給へば酒井左衛門尉今御覽有べし味方の敵に驅立られて前後の差別わ
 るまじ其時の味方の負と成るべし今まばらく様子を御覽じ給ひ時を見斗らひ機に應じし
 い思ひの外に勝利をすべしと諫けれども其間にはや御旗本より崩しうけて山縣三郎兵衛が
 備へ會釋もなく突てかゝる(柏崎物語に山形が入りの時より雪ふり出し米津小太夫討
 死の時いよくつよくふるよし見へたり)山縣が軍勢是を見て取包んで討んととれども御
 旗本衆こゝを専途と戦ひける故山縣が勢も三十程崩れ立て走る(甲陽の説に山縣三郎兵衛
 が手へ家康旗本を以てかゝつて三十程志さりする三河三家三方衆の日來家康衆の手並を出
 したる故四十程足並にて逃ると云ふ)此時酒井左衛門尉大須賀五郎左衛門小笠原與八郎等
 の山家三方衆手田嶺長篠の勢を追崩す信玄が七手の先陣悉く敗れ味方勝軍と見る所よ四

郎勝頼白地に黒き大文字黒地に白き大文字付たる二本の馬印を左右の脇に押立て馬より下り山縣が人数崩れかゝるを妻手の方へたゞき廻して御旗本へ横筋違にかゝり突崩す此時山縣も備を立直し左衛門尉が手へ突てかゝる信玄是を見て甘利衆（甘利七郎左衛門吉晴は永祿七年既に死たり今其跡を米倉丹後預る）横鎗せよと下知すれの米倉丹後重繼心得たりと小荷駄を捨て酒井が備に突てかゝれば酒井が備も敗れ走る信玄嚴しく下知し典麻信豊穴山梅雪内藤修理昌豊等左の窪より濱松勢のうしろへ廻り前後より攻立れば濱松勢入替る味方のなし散々に敗れて退かんとする所を信玄諸軍に下知し惣軍一同は明を發して攻立る申刻より取ひ始りはや暮昏に及び雪の頻りに降て濱松勢の惣敗軍となる其中に松平甚太郎家忠ふみどいまり従兵數十人討せて防ぎ戦ふ石川伯耆守數正の今度武田と合戦有へしと沙汰わりし頃の織田家に参り有しか信玄が三遠に亂入するよし聞て本國へ立歸るとて其頃美濃の土岐が家に朝岡某といふ古兵ありしか數正彼かもとへ行今度遠三境にて徳川武田有無の決戦あるへきと其時某の討死と志し決しし然るに數正田舎に生立たるかあしと軍陣に望ん時の鞆さし緒結ふ様いまた習ひたる事あし最期に石川の某の弓矢の骨法らさりと敵

に笑ひれいん事骸の上の恥辱なりあはれ御敵下されかしと請て傳受し終に今日の先手に出けるなり數正味方崩るゝと見るより士卒を勵し馬より下り鎗を横たへ敵の至るを待てとバく突拂ふ信玄後日數正が鞆の事聞傳へ武士の嗜み誰かかゝるへきなり天晴徳川が弓矢あなつり難しと感ずる事斜からず武田勢の濱松勢を追討せんと勇み走る程に城の北扉が磯にいやう上に落重ねて死亡する者若干と神君齒嚙をなし給ひ諸卒を勵し三四度引返じ喰付敵を追拂ひ給ふ此時加藤比禰之丞其弟源四郎九郎二郎大久保新藏忠寄河合八度兵衛杉浦次藤兵衛米津小太夫政信柳原攝津守石川半三郎正俊杉山久内吉明松平彌右衛門江原又助川澄源五郎通成天野愛右衛門政景をはじめ屈竟の勇士三百餘人討死す其中にも中根喜藏重利の北條より信玄へ加勢に遣ひしたる近藤出羽助貞と鎗を合せ神君御馬前にて討死す時に三十歳（此重利子なりりしうば其外松平九郎兵衛正俊が子九之丞を以て其祀を達せしめらる今喜藏正恒が家之近年一橋藩倍臣中根長十郎正國とて大朝へ召出されし此喜藏が家の二男にて有ける）中根平左衛門正照青木又四郎吉繼の二股城の守を失ひしを恥て其後一人も残らず討死し鳥居四郎左衛門信元成瀬藤藏正義と昨夜口論し既に討死せん事を互に約

し今日戰場に臨み相共勇を争ひ苦戦し各敵の首取て見せ其後又敵中に打入て討死と藤
 藏討死にのぞみ弟小吉正成を呼んで我等の昨夜鳥居と討果すべき所同じく失ふ命あらば互
 に屋形様の御ために討死せんと約せしう今日是非討死と志あり汝の地理をよく知れり
 早く屋形様の御供して濱松へ入奉れと言捨て其儘敵中へ乗込んで討死せしと哀なる信長よ
 り加勢に差向られたる佐久間瀧川一戦にも及ばず敗走すれば平手監物一人徳川殿思ひ給ひ
 ん所も取うしとて味方への目も掛す信玄の旗本さして切て入しと忽ちに討れたり是につい
 き織田勢山口飛騨守長谷川勝助佐藤藤八等百三十余人討死し其外へ悉く敗走す又本坂よ
 り廻りし武藤彌平兵衛伊賀守氏家下全稻葉伊豫守等の味方敗軍と聞て洛より本國へ引
 返す(原書に織田勢の新井本坂の前に備て信玄と戦ひしとて前條に志るせし此事を誤り
 記せし大成記基業記聞甲陽の説皆同じけれ本文を改む)柳原康政の備をまどめ西島の
 方へ引取る神君の大久保忠世に命じ犀ヶ磯の少しこあたに御旗を押立敗軍の士卒を引揚さ
 せ給ふ此時迄の本多肥後守忠貞後殿して引取ける武田勢大勢にて烈しく追がくれは忠貞
 度と返し合せて終に討死す此忠貞の平八郎忠勝が爲に叔父の其後の内藤三左衛門信成後

殿まで引退かせ給へんとするに御馬廻の輩大久保新十郎忠隣内藤四郎左衛門正成を始め皆
 馬に離れ歩立之其所へ馬場美濃小幡上總が勢横合より突てくる水野左近正重取て返
 し追拂ふ左近危く見ゆれば神君興をかへして救ひ給ふ其所へ又城伊庵が勢追來り右より弓
 鉄炮を放ちかけ今の逃るまじく見ゆる所に濱松御留守置れし夏目次郎左衛門吉國與力廿
 四五騎引連れ馳來りて某御諱を名乗御命にかかりやべし皆々早く御供して御歸城有べしと
 や神君何ぞ汝一人を捨て殺すべき我も一所討死すべきぞと仰らるる夏目大の眼をいうら
 し言甲斐なき御心哉大將たらん人の後度の功を心掛給ふおそ簡要なれ棄武者の働きし給ひ
 て何の益うわらんと怒れる眼も涙をうりめ御馬の轡を取て濱松の方へ引廻し御側に付居た
 る畔柳助九郎武重に早く御供やせと云ながら持たる鎧の柄を以て御馬の尻を叩けば御馬の
 流石に逸物なり飛が如くに馳り行其跡にて夏目の十文字鎧を振ひ追來る敵二騎突落し其外
 を追拂ひ猶も進んで敵中へ入て與力士廿五騎と共に一人も残らず討死す此夏目一向亂の時
 逆徒に組し生取とありしを松平主殿助伊忠が此者始終御用に立べき者ぞとす上て助命せら
 るのみならず御懇切に召仕られしうば其御恩に報ひし忠死なりとぞ知られけるかくて後

の君臣いよくはなれんにて神君もつかに五騎斗にて追來る敵をつき破り追拂て退け給ふ所に敵一人近くねらひ寄て神君を射んとす天野三郎兵衛康景馳來り其弓を馬上より蹴落せり敵も恐れ引退く又敵三騎來り一鎗參らん返し給へと詞をかくる神君弓を放て其敵一騎を射落し給ふ残る二騎の天野三郎兵衛大久保七郎右衛門成瀬小吉等追拂ふ又敵二騎神君を回かけ討てかゝるを野中三五郎重政討果す松平善四郎康安十八歳深手負ひ矢三筋胸にわたりしを一矢のぬく間もさく馳來り漸く從者にめぐりわひ馬に乗て退く時岡崎の町奉行右衛門七が手を負て其馬かし給へといひしとて右衛門七に我馬を貸てどもに引とりたり高木九助其時法師武者の首討取て持參しけれり神君御覽じて汝早く其首濱松の城門迄持て行信玄が首討取しと呼のれと仰らる依て九助畏まり急ぎ城門迄馳付て敵の大將信玄が首高木九助が討取たりと呼のれに城中より今日收軍と聞て大に騒動せし所此聲を聞て上下勇み悦びける程なく畔柳城門を高らかに打たしき屋形様御歸りありと高らかに呼のりければやがて城門を開き恙なく御歸城有しにより諸人始て安堵の思ひをあらはにけり畔柳に始終御側を離れず御供せしと褒せられ御腰にさし給ひし扇を下され後日に采地を加恩せられ又先々夏目

が討死の時都筑久太夫景忠の氷野太郎作清久と同日決戦し二人とも深手負しを久太夫が弟久太郎景近市助泰重敵中に馳入て兩人を肩に掛て濱松へ歸來れば討死同前の働さしと御感詞を蒙り常座の褒美として久太夫に御兜を下され弟兩人への塗籠の弓一張つゝ給はる(原書に都筑右近が夏目と同じ時に討死といふは此の事を誤れるなるべし)かくて濱松の支駄口の鳥居彦右衛門元忠天野三郎兵衛康景植村庄右衛門正勝に警固の事を命ぜらる鳥居門を閉て守るべしといふ神君閉召て必ずし門を閉べうらさ跡より追々歸る味方城中に入んが爲之たどへ門を開き置とも我が籠りし城へ敵兵押入る事のかさふ可からずも又門を閉なは却て敵に氣を呑るべきぞ結句門内にも門外にも大旗を焼せよと命ぜられ旗を白晝の如く焼せられ其後奥へ渡らせ給ひ御夜食を仰付られ久野といふ女房が湯漬を奉る三椀迄御かひり有て召上られやがて御枕をめして高附して御寝なりければ誠々大勇不敵の御大將にまじりけるとて上下皆感心奉れり(基業成績編年甲鑑中根都筑家譜)

支駄口迫合付扉々磯夜軍の事

扱も武田が先手馬場山縣が勢の何國迄も追て來り濱松の支駄口に至りしにこのいりに城

門残らず押開き内にも外にも大箒白晝の如く焼置たり山縣大にはやり敵急に逃入て門を閉
 る暇なきと見ゆる之直に此城に乘入んといへば馬場美濃守頭を振て徳川の若手第一智謀の
 名將今日惣敗軍にて城中に逃入し事なれば門扉を堅め橋を引て要害を守るべき所に結句諸
 門を押開き箒を焼置たるの何さま謀略あることあるべし容易に打入がたしと寄手老ばら
 く猶豫する所へ鳥居植村天野突て出れば渡邊半藏守綱弟半十郎政綱勝谷甚五兵衛櫻井庄之
 助天野又作佐脇亂之助等の大谷口より蘆田にかゝり城に入んとして此有様を見るよりも鳥
 居植村天野を助て突戦し敵あまた討取其時戰場あくれて歸る諸軍を引まどひ酒井左衛門尉
 石川伯耆守も寄手の後に陣を揚て突てかゝる寄手箒火のあれども外聞くして見分がたぐ敵
 の味方う持あつりひ同士討するも少あらず其間鳥居も股に手を負志かども事どもせず
 酒井石川と一手あらず味方の勞兵を引まどめくり入て難あく城戸を閉にける其後山手口を
 守りける戸田三郎右衛門忠次の味方大に戦ひ疲れたり今夜敵又攻寄せんも斗がたし今夜中
 に速かに吉田の城へ御つばみありて重て織田殿の後詰を請て敵を退退け給ふべしとさせ
 諸人皆尤も同意せり神君附召て合戦に負て退く却て敵を招く媒之勝負の天運にある

所なれば今日負たりとて明日勝まじきにもあらず吾軍兵を以て大軍を打靡けぬることの面
 をも知る所之信玄とて鬼神にてのよもあらし川中島にて上杉謙信が八千の人数に大軍を
 切崩され各をすて頼み切たる侍大將ども數多討せつる事の面をも聞及ぶべし少しも恐る
 るに足らず信玄もも當城に攻うへらば城中に於て火花を散し諸人の目を覺すべし誰り有る
 今夜敵陣に忍びより濱松勢の撓屈せざる勇氣を見すべしと宣へば大久保七郎右衛門忠世承
 り仰の如くかくの如き時あすくみての彌々敵に凌ぐる者いざ一夜討きて敵に冷を付べ
 きなりと石川伯耆守天野三郎兵衛と諸共に鉄砲足輕どもを招くにやうく百人にの過ずさ
 れども地理のかねて案内之五更の頃閑道よりめぐりて武田が陣所へ忍びより穴山梅雪が陣
 ばすき間もあく鉄砲を打かくる武田が陣に濱松勢の戦ひ疲れし勞兵なれば今夜押寄んと
 の思ひも寄らず由断して臥ければ鉄砲を聞と大に驚き狼狽周章と斜ならず雪の積りて道の
 分らず空の一面に曇りて敵大勢と思ひ我先にと逃出し扉が磯に落て人馬いやが上と落りさ
 なり踏殺さるゝも有り鎗長刀に突ぬかれ死する者少からず大久保石川天野歩卒を下知し輕
 く人数を引擧たり信玄が本陣は軍令を嚴にして少しも敗られずといへども此跡を見て大に

驚き扱も不敵なる徳川勢の舉動かある畏るべきは濱松の者共なりと歎息せしとぞ聞えける翌
 廿三日神君渡邊半藏同半十郎を隊長として人数を城の東北下垂といふ所へ出張せしめらる
 (甲盤には下垂をくみくりと有り) 此所三方が原を七八町へたて西は野原東は泥田之(大久
 保が物語に濱松の城近くしもたれといふ町有り此町と三方原との間七八丁の堤あり其堤と
 町との間に木戸あり信玄此町を燒拂はせんと人数をつかはす味方木戸を開き渡邊兄弟敵を
 拂らふとあり) 穴山梅雪が軍勢は城の近邊を放火せんと押寄る所待設たる渡邊兄弟弓鉄砲
 を放かけ則の聲を揚じか昨日の敗軍にもこりず濱松勢は打て出たるはとて穴山が者共
 泉大學種坂常陸同掃部が人数真先に進み來を渡邊兄弟は近々と引うけて鉄砲を放て突てか
 り先に進む敵二人を突落し首五級討取て敵を追拂ひ速に歸來れバ神君大に其功を賞し
 給ふ此時石川日向守家成は三方が原敗軍の事を聞て早掛川の城より軍勢を引率し來て濱
 松を守護し本多作左衛門重次は兼て守城の備をなして軍糧多く儲へければ神君諸將の志節
 義心の程悦ばせ給ふ事大方あらす(基業甲鑑)

高坂馬場諫信交付織田武田絶交の事

十二月廿三日信玄陣中に諸將を會集し軍議をこらし各の異見を尋ける勝頼はじめ典麻道
 遙斯穴山馬場山縣内藤小山田小幡真田等は此威勢を失ふはず直を濱松を乗取給へとすしめ
 ける高坂彈正晴久(一本昌信)しらべく考てすけるは各々さる所勿躰なし徳川織田とは
 同盟の上信長羽翼と頼む徳川なれば濱松より岐阜の間に織田勢打つべき陣取たるの必定
 只今濱松を御攻めらん早くても廿日かかりやへし其間に信長の兵本坂より五方今切よ
 り三方後詰と志押來らん時の此城を巻ほぐし織田の大軍へ向給ふへしとて卒忽に合戦
 も始られず互に此三方が原に長陣を張てありさる兵糧米事をかき人馬のつゝき不自由なる
 内は上杉謙信も近年徳川と厚く交りて結ぶよし聞ゆれり雪消さる上州信州へ働く事の眼前
 之其時の北條氏政の表裏人忽に志を翻す事疑なし其時に及んで何程思召とも軍を
 甲州へ引とらていかなはずもしとあらん時の信長の刃に血ぬらすして信玄を追拂ひたりと
 高育すへし上方武士の習ひ歩の首一ツ取ても士の首十も取たりとやと山本勘助がゆせし詞
 に違はずたとへ左とくとも此方より敵を奥深くあしらひ此名の汚れさらん様に速に御歸
 陣然るへしとやせし信玄其諫はまたがひて翌廿四日早く陣拂して彈正を後殿とし元鹿表を

廻り刑部迄引取爰にて越年（甲陽の説に神君信玄人數扱ひを御覽ありて敵との言がらも
 かの入道殺したくと思はずと仰られしとみゆ）廿八日刑部の陣中にて馬場美濃守氏勝が信
 玄へ申けるの徳川殿當年三十一歳なれども今日本國中に越後の輝虎入道謙信と徳川殿から
 での剛勇の大將あるまじく此度三方か原御合戦に討死の三河武士雜兵下々に至る迄勝負
 を仕らざる一人もなむと見へし其證據に尸骸此方へころびたるはうつむきになり濱松
 の方へころびたるの仰のけにあり申し猛き武邊の家と申は和朝に上杉謙信と徳川殿之五年
 以來始て駿河へ御出陣のみぎり相違なく遠州一圓徳川殿次第と御譲有て御入魂給り御縁
 者などに遊ばし徳川殿に先手をさせ給はは當年頃は大方中國九州迄も武田家御手に入て五
 三年の間に日本も大零物いひ御座ある間敷物をと申ける（此諫馬場彼家の爲に申所といへ
 ども實に天下の高論といふべし信玄大器あらば此時も此言を用ひ用ひらるまじきにあ
 らぬと用ひざるの其器量狭少戦争の末にのみ心を用ひたるが故之豊臣秀吉に於ての自づう
 ら此心を得て長久手の負軍に恥す終り和睦して天下一統の功をさせりこれ大將たる人心得
 あるべきとあらざや）信玄の今度信長の徳川家へ加勢を遣はされしを憤り彼三方が原にて

討死せし平手監物が首を織田家へもたせ送り信玄只今迄の織田殿と一味の誓約して一度も
 信義を失はず然る所今度織田殿の何の遺恨有て敵方へ加勢し給ふよや今より後の永く御手
 切仕るべしと申送る信長より刑部迄織田掃部を使として信長更に別心あらず徳川若氣ゆ
 へ萬一心得違の事もあらば扱ひいへとて我等家人共を遣はしし所御敵致しうへの御成敗御
 尤もい今度御敵仕し者の跡を立すまじく徳川共絶交仕へし信長が一子信忠御筆にさし
 下さるべくい何事も御指圖にもれずまじくいと種々佞媚の詞を盡し謝せられけれども信玄
 の信長の心密裏に砥礪あり錦に毒石を包みしに相似たりとて更に信用せず是より信長信玄
 も絶交し實に敵國といかりぬるなり（信長の是迄一年七度づゝ信玄へ音信を通じ種々贈送
 の外にもいつも蒔繪の箱に綿帽子頭巾迄進物せられし其意の信玄と和睦を結び後を必安く
 して早く關西を併呑し覇業を早くせんとの志ゆへ信玄をあつくきたしむ其中に徳川家に
 の信玄と争ひしめし事と見へたり）其時足利義昭將軍か上野中務大輔秀政を使者として刑
 部へ遣はされ織田徳川と和睦して國々靜謐すべき旨仰下さる然れども信玄の其御教書を拜
 覽し織田徳川兩家の事共様々に誹謗して御教書に従ひがたきよしを返答す（基業甲鑑）

按るに足利服詐謀の甚しき去年より甲越相に密使を下し三國牒し合せて織田殿を誅すべき旨頼み給ひ信玄今度の全く足利殿の命を奉戴して織田殿を伐亡さんか爲に徳川家を傾覆せんと三遠を侵奪し尾張へ手をかけんとてかく合戦を結びしを又和睦の事を扱給ふ其表裏反覆更に定め難きに似たり其實の陽に和睦を進め陰に合戦をいどましむ此後天正二年九月にも勝頼に相越謀を合せ信長を伐亡すべき旨御教書を給ひ勝頼より一色式部少輔宛所の返答の書あり然る時姉川三方が原長篠の三戦どもに其起本の皆是義昭將軍より起る事いち老るし義昭程なく祖業を失ひ足利氏再度振るざる所以よろしく知るべき

三州野田開城付山家三方人質替の事

元龜も三年にて改元ありて天正と稱せらる武田信玄の味方勝軍の後彌軍伍を整へ法令を嚴にし刑部にて越年し天正元年癸酉の正月七日に三方五千の人数を引具し刑部を出馬し本坂を越へ井谷を歴て長篠にかへり三河の奥郡を侵掠せんとす(大久保物語は信玄の犀が鼻の夜討にあひさてくしたりいまだよき者のありと見へたり兎角につきて勝てもこのき

此敵こと井谷を越て長篠へ行掛りし野田は攻寄と有り又足利殿の御使参りしも此日之とぞ(其十一日に三州野田の城に押寄たり此城の主將菅沼新八郎定盈加勢に櫻井の松平與一郎忠正川路の設樂甚三郎貞道雜兵都合四百餘人にて楯籠る新八郎元より元氣凛々たる壯士なれば山家三方の輩が早く信玄に降参せしをわざけり憤て義を守る心鉄石の如く信玄が大軍を以て攻かこみしよも少しも屈せず矢炮を飛ばし大石大木を提下し粉骨碎身して防戦すれば信玄が方にも小笠原掃部等一番に進み信玄旗本も金鼓を鳴らし関を作り竹東龜甲かつぎつれて攻るゝと守城の輩堅固に防しかば信玄勢あぐみ引退きしが翌朝より又取巻て新手をいれかへく晝夜を分たず攻じかども城中少しもよらねば信玄謀客を廻らし堀際に鹿垣を結廻し城兵をして出入を得せしめず巽の方より金堀共を入れて段々に地道を堀入れれば城内の井水ことごとく洩れて城中水既に盡しに糧米もやうく乏しくなりぬ此由濱松に注進すれば神君三千餘兵を具し給ひて笠比山迄御出馬有けれ共信玄老練妙算あれば段々に備を立後詰の用心して遊軍をつまらへに備へ置たれば十分一に不足の御加勢にて容易も後詰も成がたく思召小栗大六重常を織田家へ御使とせられ加勢を請ひせ給へ

とも信長も信玄の猛威をや恐れけん承諾の有けれど兎角出勢延引す其間城内に水盡果咽
 を潤す事を得ず新八郎が甥正左衛門貞俊が信玄へ内通する聞えもめれば此城終に守り難
 しと新八郎の與一郎忠正と相話し信玄が陣へ使者を送り城中上下共水に渴し防戦する事を
 得ず我々兩人の切腹すべし男女悉く助け給ふべきにやと遣はす信玄尤なりと許容し
 て兩將を山縣三郎兵衛が陣中へ招く兩將の切腹する心得にて來る所を伏兵を設て兩將を生
 捕山縣に預置き其外城中の男女の皆放ち去らしむ其後信玄近臣を以て新八郎與一郎に
 せけるの兩將此度籠城の武勇義氣頼母しく信玄感するが故に徒に切腹せられん事をあじ
 みてかくの計ひし徳川への義氣の是迄の武勇にて顯われ此後天命に應じ信玄へ身をまろ
 せ給ひ三千貫の知行を進上すべしと嚴懇を盡して詞をたくみにかたらひける兩將の鉄肝
 石膽の張なれば是を聞て信玄の仰身にあまり忝ひ得共徳川重恩の者共故尸を軍門
 に曝さんと兼々志を決しいへば今更其志變じ難く此上の御仁恵にいとく吾々が首
 を刎下さるべしと切て有けるにぞ信玄も兩將の義氣に感じまばらく山縣に預け置て二月
 九日に野田の城は信玄方へ請取けるこゝに當時信玄へ降参し山家三方衆銃手の奥平道文田

嶺の菅沼刑部貞吉長篠菅沼新九郎正貞等の徳川家へ出しおきける人質の事を常々歎き思ひ
 ければ此時を幸と思ひ新八郎與一郎の我々人質と替て賜るべきにやと懇願す信玄尤あ
 りとて濱松へ其旨を進せければ神君にも早速御同意有て二月十五日三州長篠の馬場廣瀬川
 の河岸に於て互に懇固の兵二千宛添て引替らる是により兩將の不思議に命ながらへて本國
 へ歸來れば神君大に悦ばせ給ひ殊更新八郎の忠烈を御感有て加恩の地數多給はりしとぞ十
 六日より信玄重く病にかゝり其身の長篠の城に入て城郭を修築させ山縣三郎兵衛に野田の
 城を守らせ遠州降参の國士の六笠可久輪鳳來寺一宮の古城を取立て守らしめ信玄の病を養
 はんため甲州へ歸陣す(基業編年甲鑑)

按るに柏崎物語に野田城攻の頃城中に松坂の産村松芳躰といふ者ありて毎夜笛を吹く
 寄手是を感じて聞たりしが一日寄手の兵紙を竿上につけて高き所に立置たり城兵鳥居
 三左衛門是を見て是の定て敵將が笛の音を聞に來る地の印あらんと思ひ其夜芳躰が例
 の如く笛を吹く時鳥居其竹の立し所を目當にして鉄炮を放つ果して信玄の耳をかすり
 て信玄絶入す信玄此疵癒ず終に死すと思ゆ大成記藩譜にも一説として此事を註せり編